女鑑

明治三拾六年四月一日發行

第拾參年第七號

口繪

大阪博覽會の眞景數種

清國西湖行宮の庭園と錢塘門

月の瀬梅景五月山と鶯谷

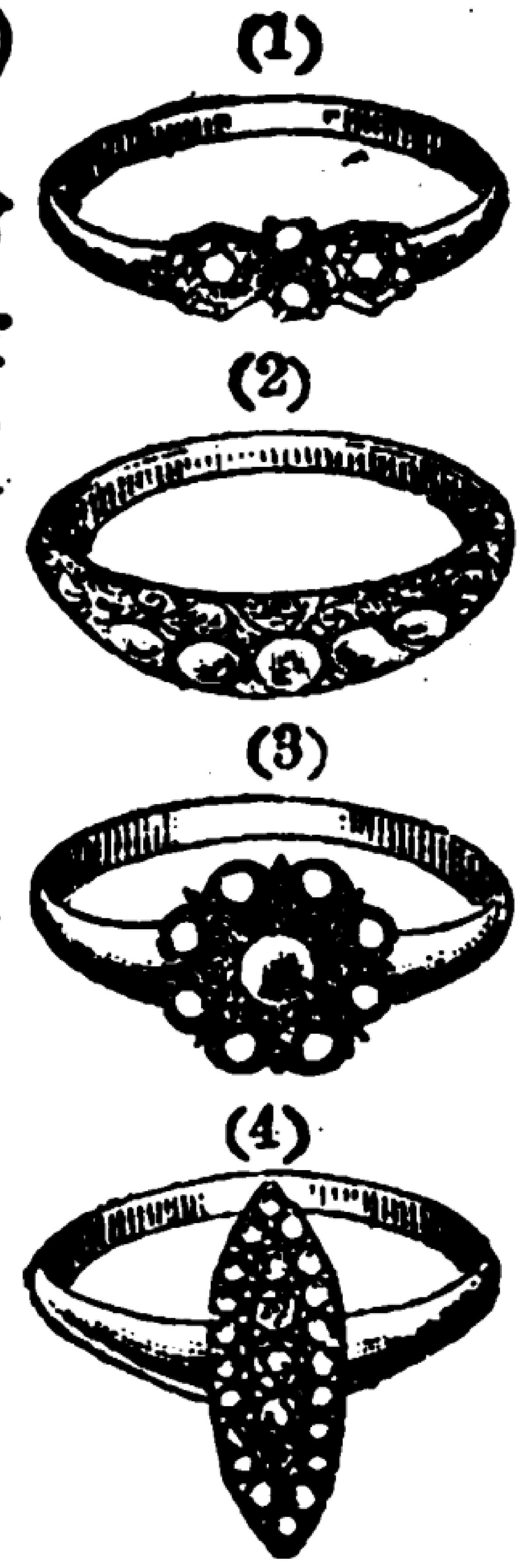
重要目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google

新製 寶石入指環



(1) 拾金製……價九圓六拾錢
(2) 拾八金製……價廿貳圓卅五錢
(3) 拾八金製……價廿三圓五拾錢
(4) 拾八金製……價廿六圓廿錢

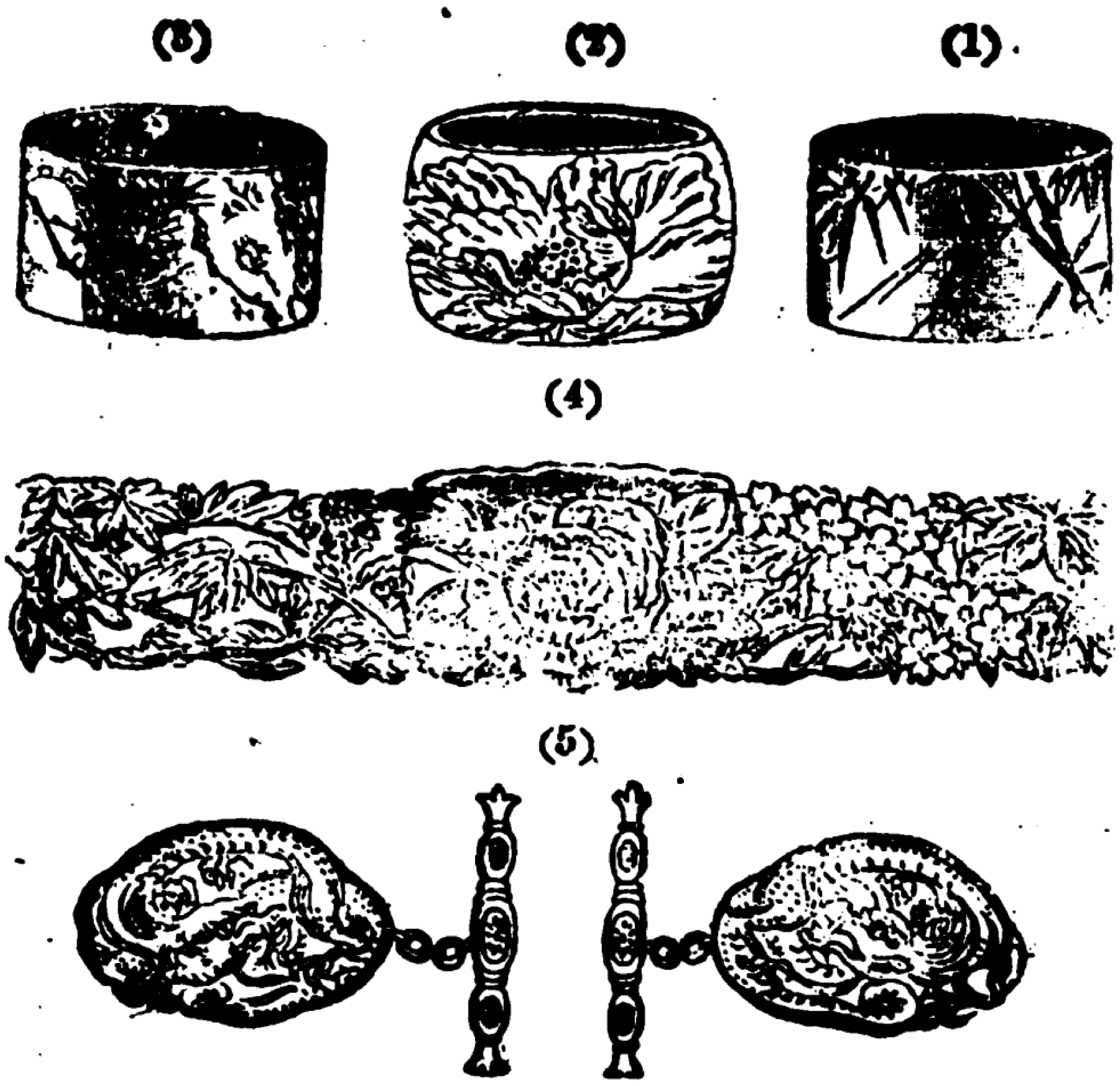
東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地 (市外郵送料拾五錢)

時計寶玉類貴金屬 美術品及銃砲火藥商 天賞堂

電話番號新橋(特三三三)(三一五三)

◉ 無料進呈 天賞堂營業一覽 (郵送料四錢)

新製指環及手釦



(1) 價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切彫
(2) 價廿七圓八拾錢……同……高彫
(3) 價二拾圓八拾錢……同……片切彫
(4) 價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高彫
(5) 價卅二圓九拾錢……十八金三匁付高彫

東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地

時計寶玉貴金屬 美術品及銃砲火藥商 天賞堂

電話新橋(特三三三)(三一五三)

天賞堂出張所々在地

東京市神田小川町 ●横濱市 ●名古屋市 ●大坂市 ●熊本市 ●長崎市 ●小樽

女鑑 第拾參年 第七號 目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

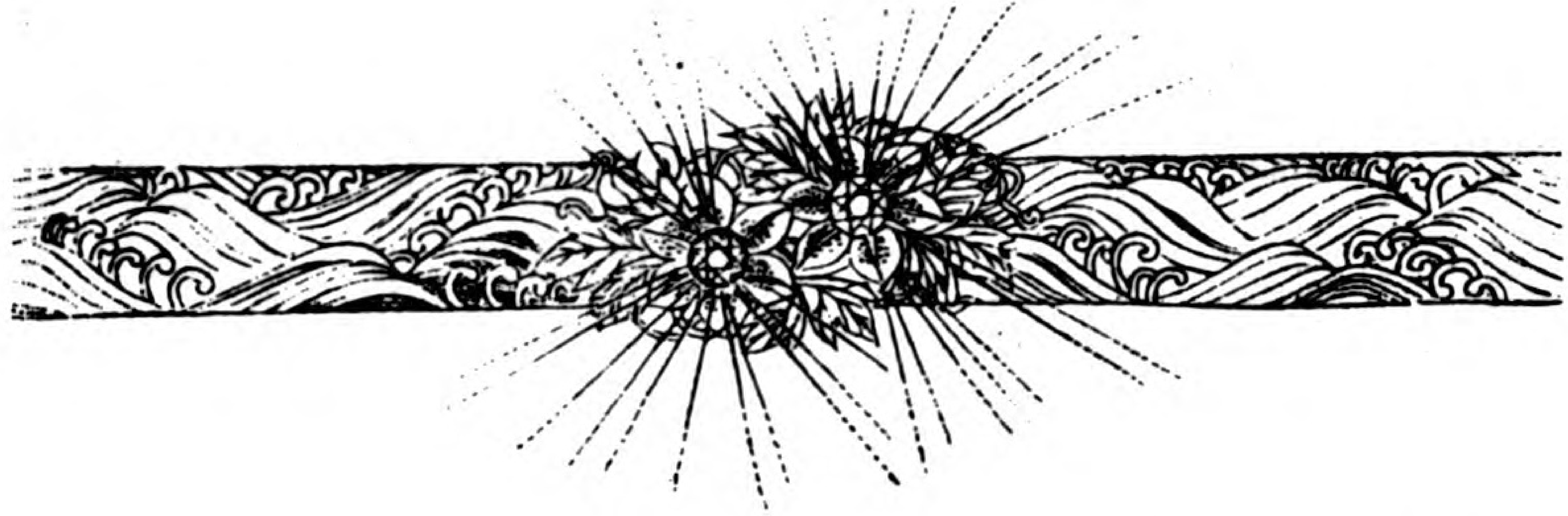
廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年三月卅一日印刷
明治三十六年四月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊桒一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 虵木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





貴金製金具附帯留

花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帯美はしくとも帯留佳ならねば裝ひとゝのはず茲に本店新製の帯留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を箝入し紐は鹽瀬地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極はめたる品なれば霞の帯の引もきらざる御注文あらんことを

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

（金製彫刻金具付價十二圓十五圓廿圓卅圓以上六十圓迄）

（寶石入金具付之價二十圓三十五圓五十圓以上一百圓迄）

（銀赤銅朧銀　並彫刻金具付之價三圓五圓六圓八圓以上十圓位迄各種）

（本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候）

大阪博覽會の一



噴水池の楊柳觀音

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

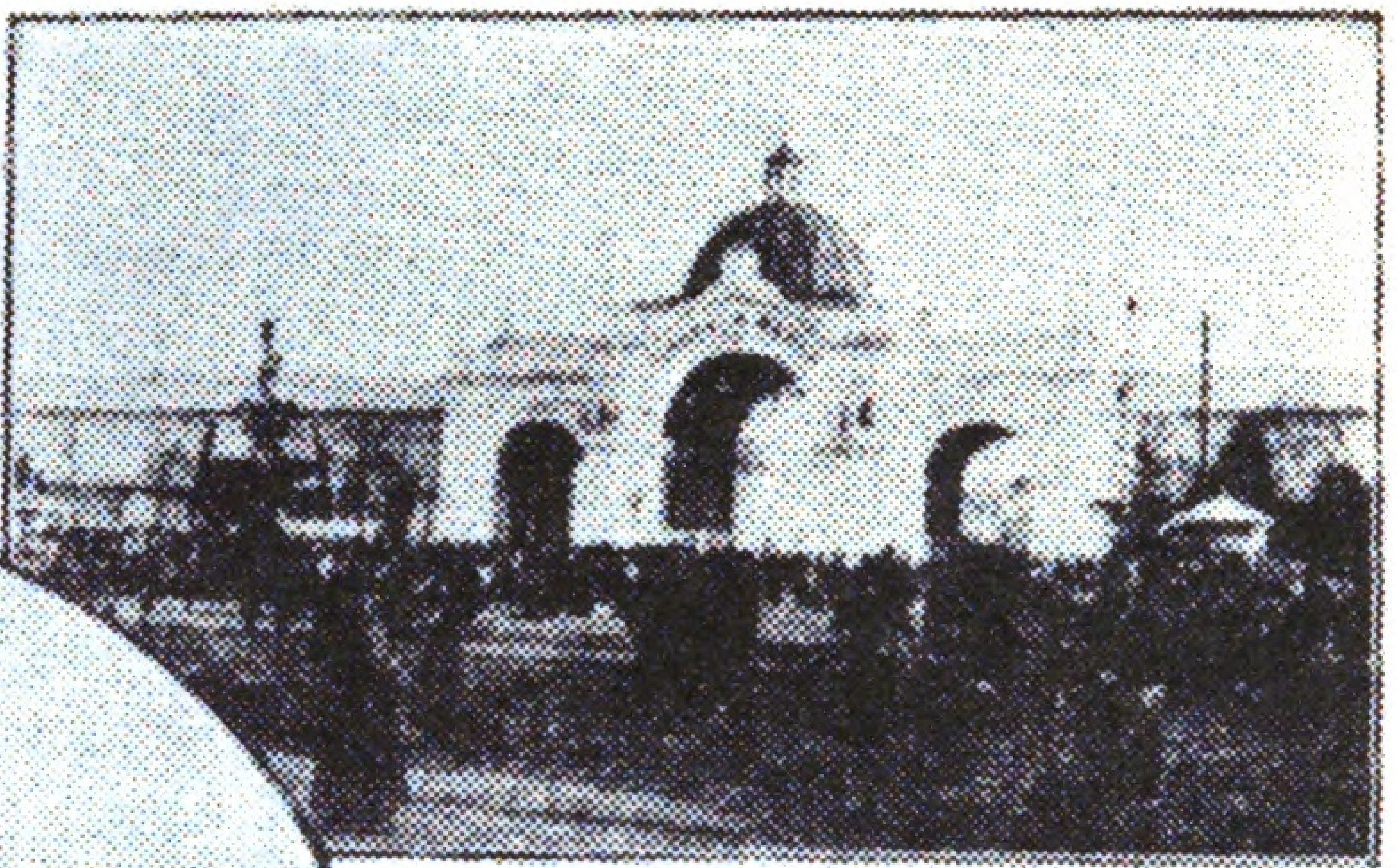
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大阪博覧會の二

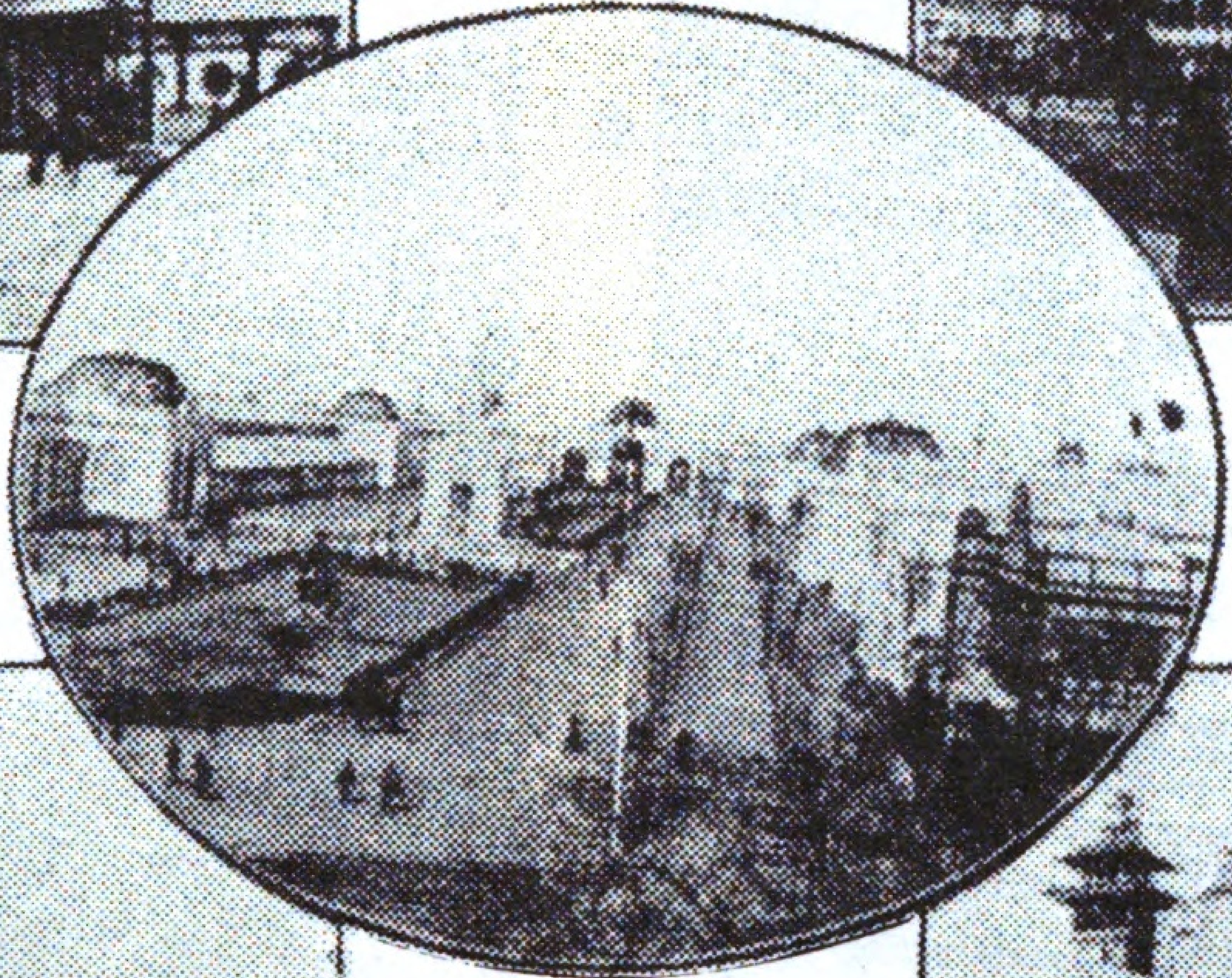
臺灣館

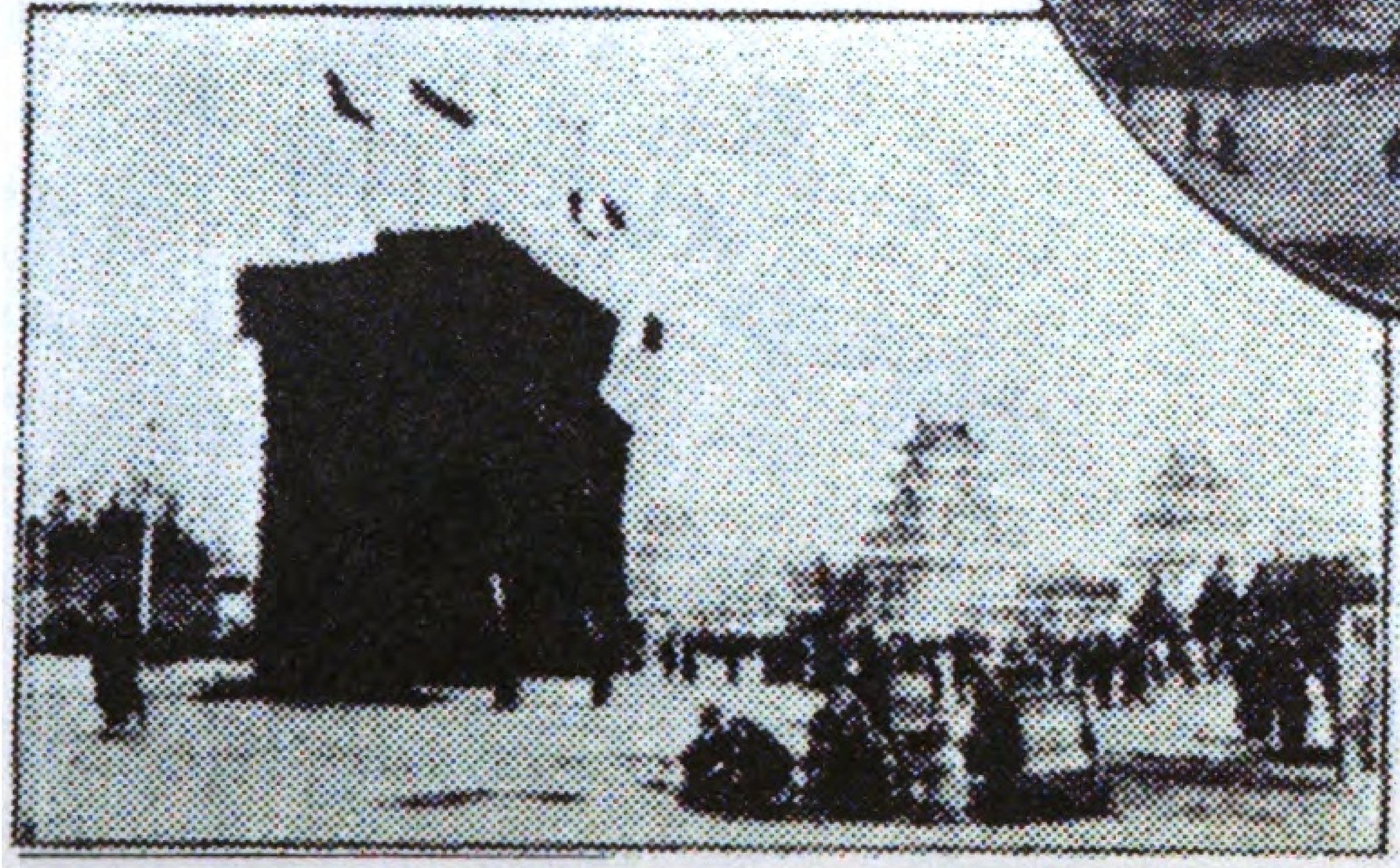


正門



場内の全景





正門外の左傍

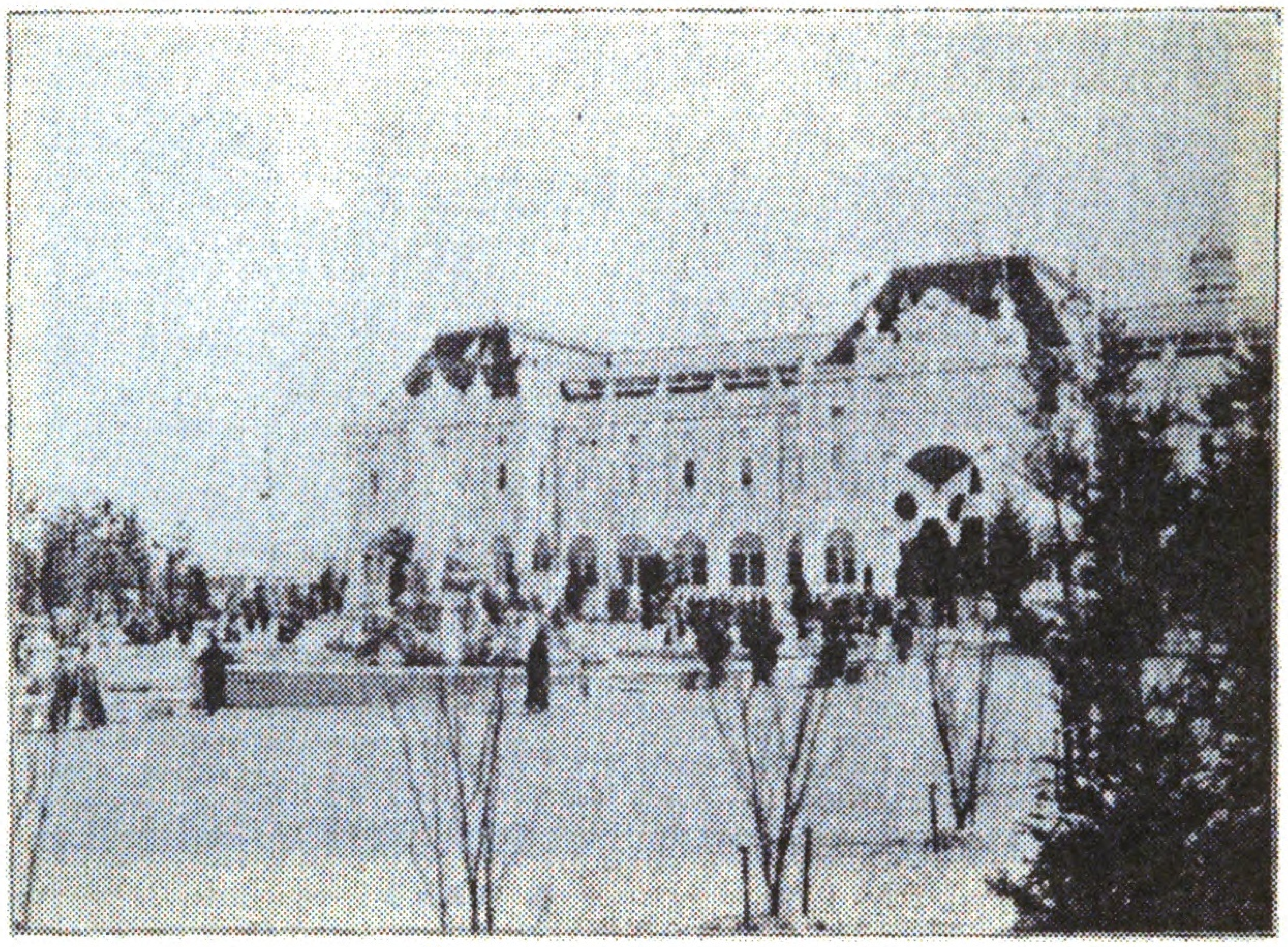


正門外の右傍

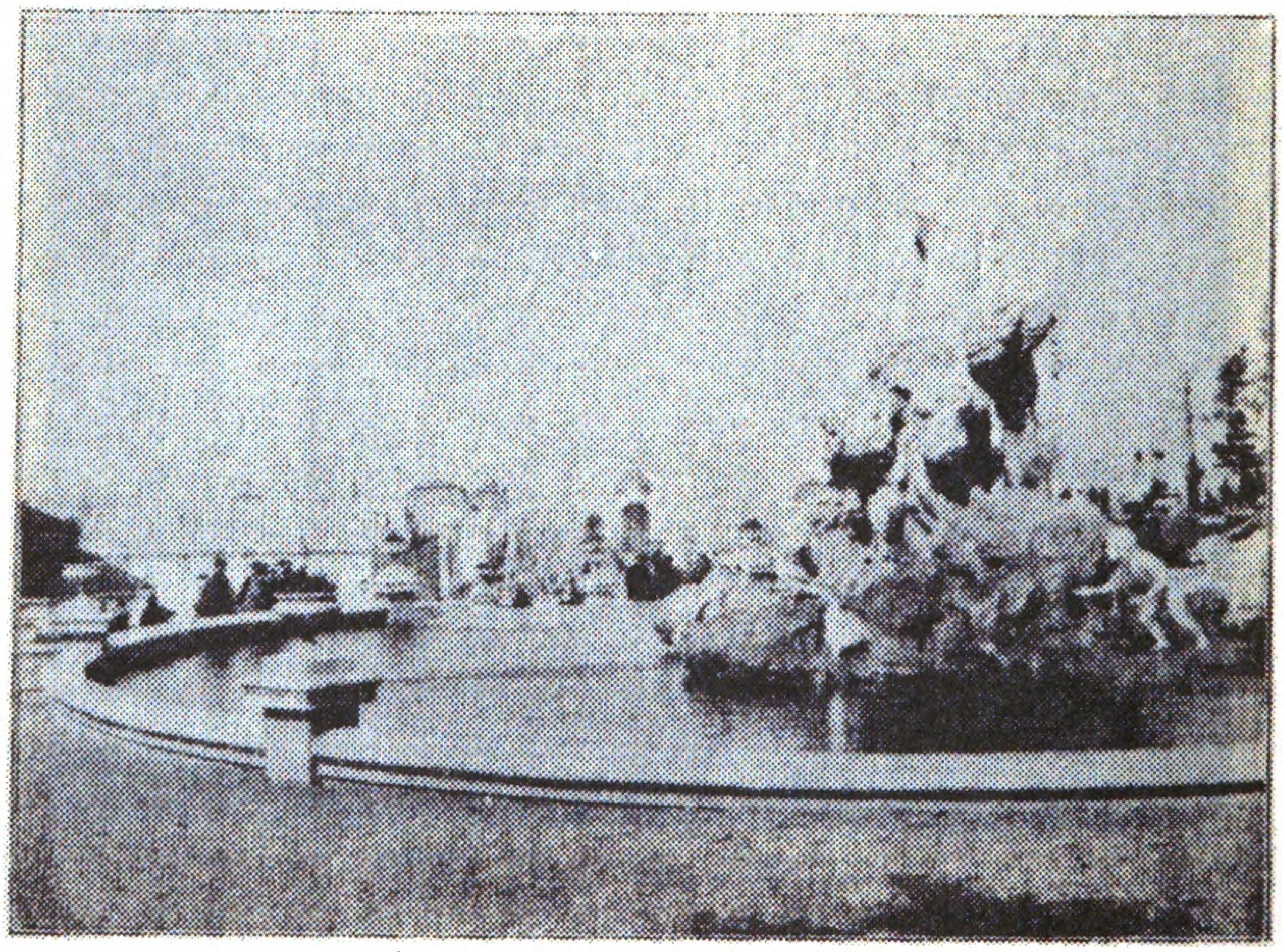
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大阪博覽會の三



美術館

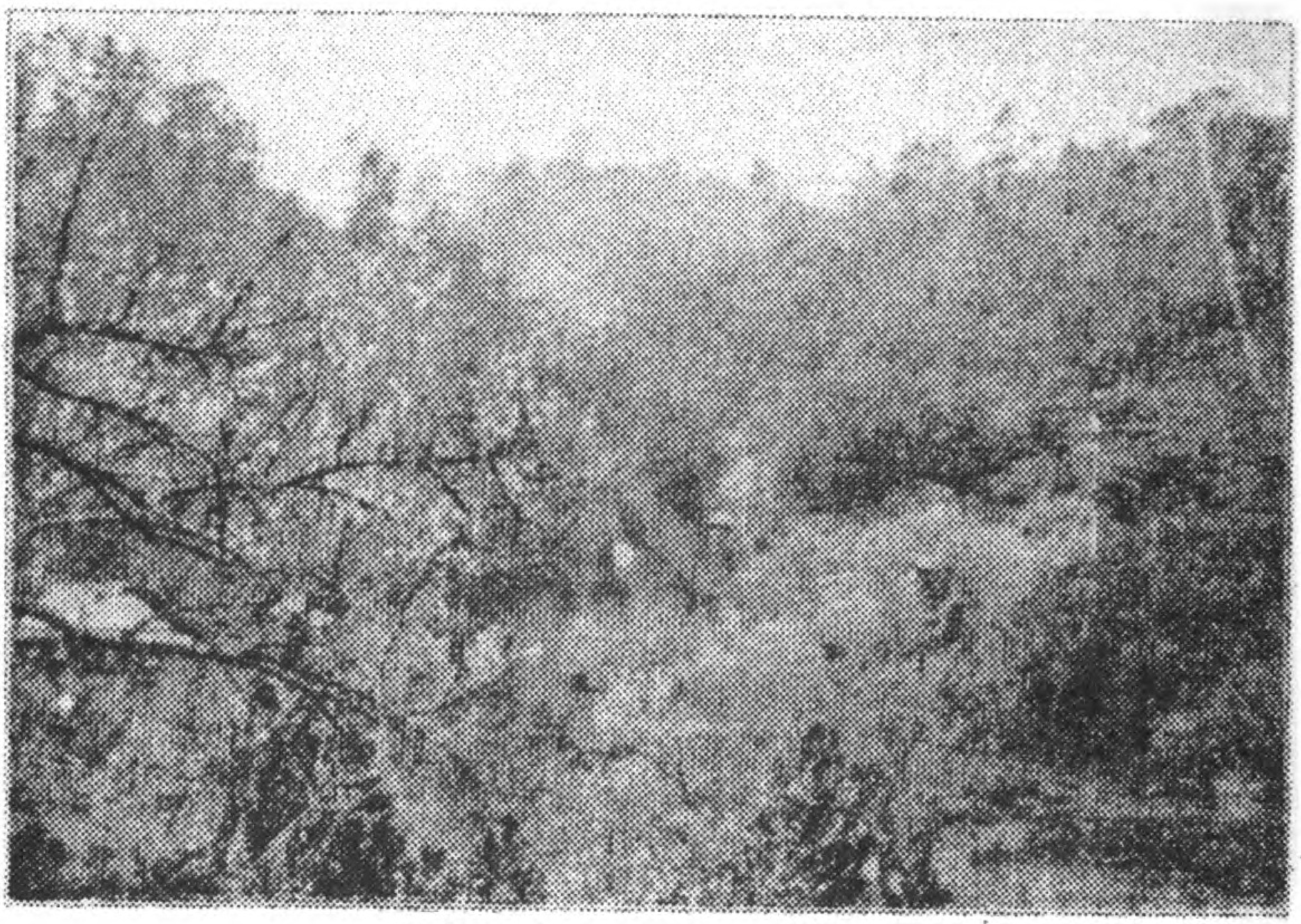


美術館前の噴水池

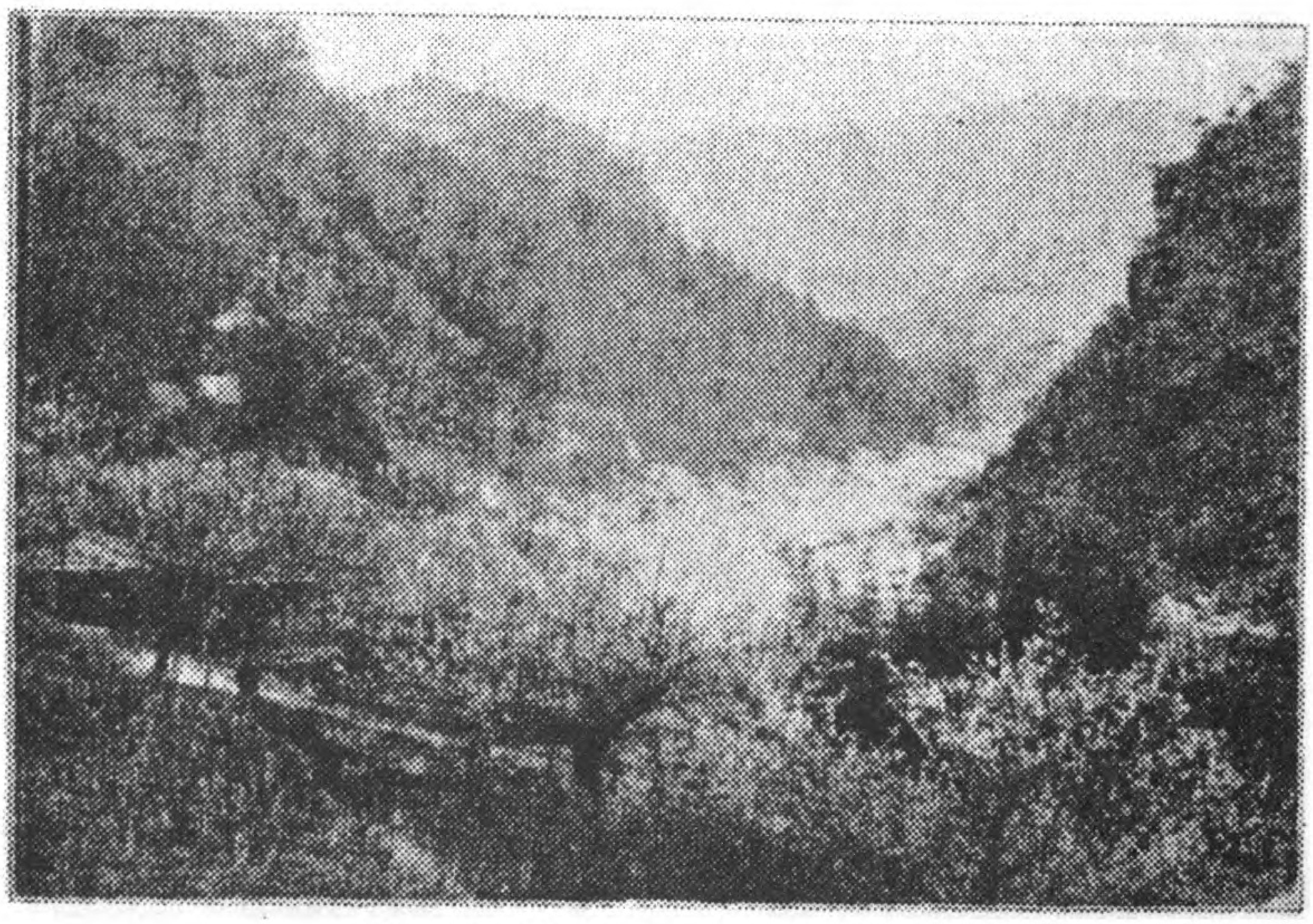
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月の瀬梅景



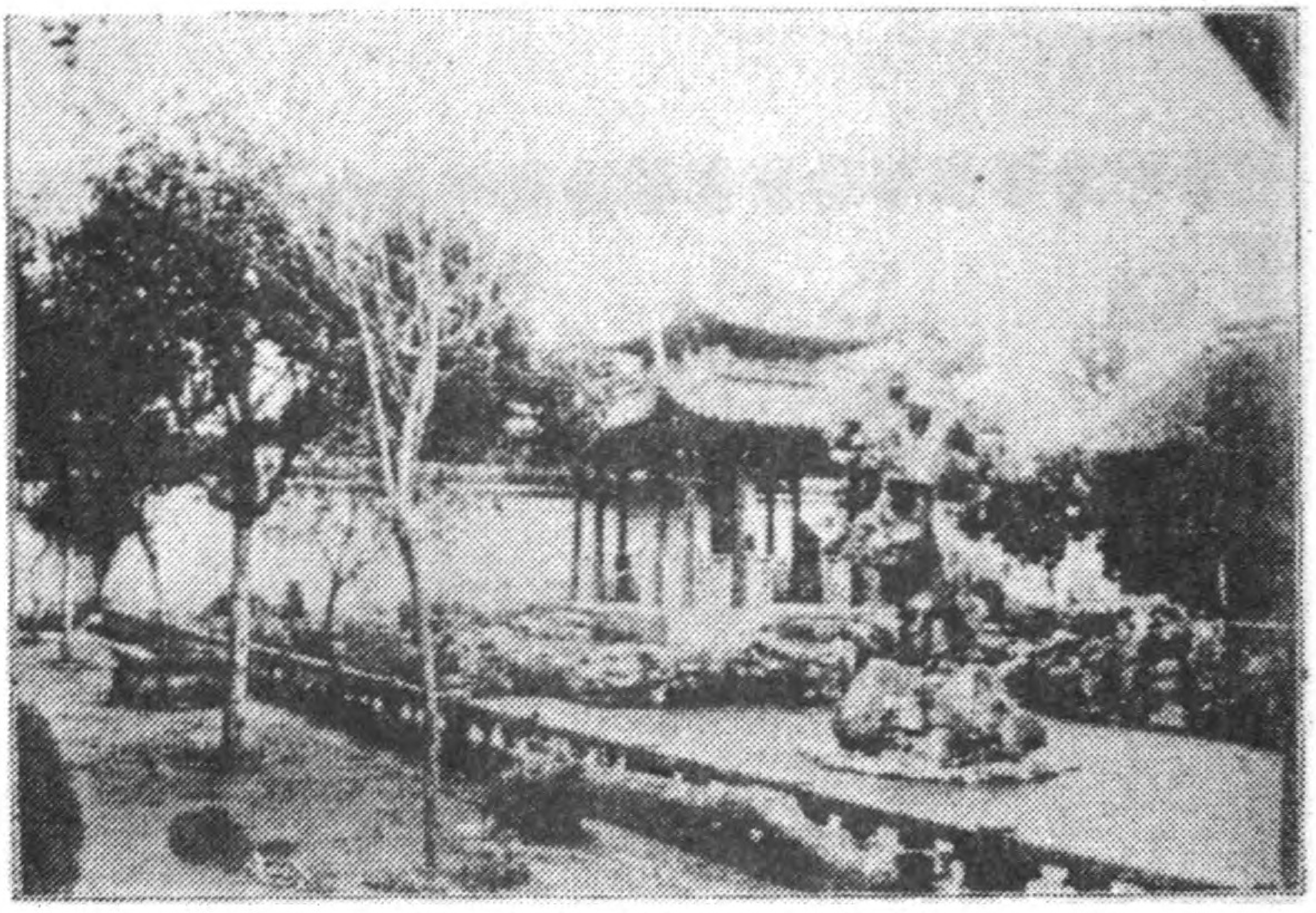
鶯谷（其三）



五月山（其四）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



清國西湖行宮內の庭園



同上錢塘門

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○前警察醫長山根正次先生無害證明



○前警視廳技師古田宗二郎先生發明

名譽白粉

めいよおしろい

煉製　小十五錢　同大二十五錢

特別煉製桃色粉製等色々

○鉛毒を惡るゝ方は名譽白粉をお使用なさい

○名譽白粉はのりよくのびよく皮膚を細かに光澤を増し何れの點に於ても在來の品に立優りて居ります

○名譽白粉の粉製は薄化粧の高尚なるを好せるゝ貴婦人間に流行ります

發賣元　東京芝區南佐久間町一丁目　電話新三千○三十八番　藤村錦水堂

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

日刊明治新報發刊豫告

回顧すれば我が「明治新報」が時勢に感ずる處あり猛然觚を操つて中央帝都の文壇に起ち諤々の堂議々の幟を飄へしてより茲に四百有余日幸に親愛なる讀者諸君の眷遇と同情諸君の温情とに依て社業健全に發達し以て今日の隆運を見るに至る是れ吾等が其見地を商工立國の基礎に立て帝國の商工業を振作し傍ら家庭教育に力を致したる報酬なりと雖も抑又我が親愛なる讀者諸君の眷遇と江湖諸君の同情なかつせば何を以てか此隆運に遭遇する事を得んや、於是乎吾等同人は是等諸君の厚意に對し満幅の誠心を傾注して感謝の意を表すると共に本社業大革新の時機が面前に横はりつゝあるを感ぜずんばあらず、大革新の時機とは何ぞや他無し方今現社會恐く腐敗涸濁の極頂に達し政治經濟教育宗教の各界を通し把て以て解決を加ふべき問題の日に倍々多きを致せるを以てなり正に吾等は新聞記者たるの天職に鑑み々諸君の厚き眷遇に酬ゐんか為め一大革新を行ふの時機到達せり此を以て社議一決一大革新を斷行し從來週間發行を日刊に改め特紙面を擴張すると同時に敏腕の記者を増聘し廣告部員を陸選し更に新計面を開き毅然政黨政派の外に立ち春秋の筆法に則とり以て此の方面に於ける物帶の懶眠を警醒し乾然教育宗教以外に立ち董狐の筆を揮ひ將ちて此の方面に於ける大偽の腐敗を洗滌し以て社會の腐敗涸濁を廓清し所謂帝國戦後の經營は果然我が「明治新報」の本領たる商工立國に在るを知らしめ今や新興國として世界列強中に加はらむとしつゝある帝國の地位と品位とを崇進し一は以て我か國威を海内に支へし一は以て我が國光を海外に宣揚し此成功を擧げて愛讀諸君の厚意に酬ゐむとす仰き願はくば江湖血誠あるの士幸に吾等か微衷の存する所を諒し乃ち倍舊の眷遇と同情を寄與するに吝ならず我か「明治新報」をして雄飛一番先進日刊各社と連驪して進むの餘地を與へ以て圓滿なる成功を見るに至らしめん事を社員一同切に悃禱の至りに堪へざる也

明治三十六年三月

日本橋區通二丁目九番地

明治新報社

明治新報事務局

電話新橋千六〇五番

本紙定價〔一枚一錢▲一ヶ月前金二十錢▲郵税一ヶ月十三錢▲郵券代用一割増▲爲替振込日本橋本局〕

廣告料〔五號活字十九字詰一回一行ニ付金五拾錢特別廣告七拾錢〕

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

大日本女學會發行

毎月一回十五日發行定價金拾五錢全國無遞送料

◎第參卷第參號三月十五日發刊



卷首
山内一豊夫人肖像及び筆蹟

論說
社會と個人との關係　元良文學博士
人種と美術　坪井理學博士

學藝
和書解題　喜田文學士
漢書解題　丸井文學士
日本名媛批評　下田歌子

修身
源賴朝と其家族　大森文學士
渉史餘話　津田黄香
作文批評　今泉定介
作歌批評　大口鯛二

齊家
歐州女德變遷史　本田増次郎
點茶　松浦伯爵
家計收支實況

世務
法制談　岡戸法學士
經濟談　伊藤秋南
各地產業の實況「萩燒」

史傳
岩倉公爵母堂

譚艸
勘違ひの功名　稚松生

詞藻
初春の詞　黒川文學博士
短尺挾に書きつけたろ　大口鯛二
みやび會員詞藻

雜錄
刺繡　木村仲子
養蠶の話　長岡哲三
婦人論梗概
圖案　武村千佐子
内外要報十數件

◎大賣捌　東京堂　東海堂　有斐閣　北隆館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

坪内文學博士校閲

通俗世界文學

全部五十篇〇毎篇定價廿錢郵税各六錢（）六冊金壹圓十四錢〇十二冊貳圓廿五錢廿五冊金四圓六十錢

全部五十篇金九圓

毎篇料判紙數凡百五拾頁●挿畫寫眞版挿入

第一篇 失樂園物語 繁野天來編 ドール原畫縮寫

第二篇 沙翁物語マクベス外一篇 杉谷代水編 英國諸大家原畫

以上新刊發賣●以下毎月一冊づゝ陸續發刊

一、「我か通俗世界文學」は全篇坪内文學博士の監督の下に世界文學の古今の傑作を嚴密なる標準によりて選擇し、而して現時青年の諸名家が最も苦心經營の餘、例へばラムのシエークスピアに於けるが如く極めて巧妙に極めて親切に縮寫し紹介したるもの也且つ博士は、本書の詞藻內容につきても亦叮嚀に校閲添削を施されたれば一章一句悉く皆彫金鏤玉の文字也。

一、隨つて我が「通俗世界文學」は文學に志ある青年諸君が世界文學研究の階梯となるべきのみならず、現時青年以上一般國民の愛翫書として最も高雅有益なるもの也。

發兌元 東京神田表神保町 合資會社 富山房

賣捌 全國各地到る所の書籍雜誌店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明 増酒資料(さけふやすもと)

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法味噌速造法等以上の釀造家及び諸賣營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り無代進呈す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一大有益の秘訣なり是日も缺くべからざる確實ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授産館

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確發す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢 特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

血塊月やく 忽ち下る 確證新藥

本劑(調經丸)は胃腹を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ惡血毒血を一掃すること確證する但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き姙婦の服用を嚴禁すも姙婦服藥せば即座に流產するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

●わきが(腋臭症) 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 (電話下谷二五四六番)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

○工場ハ本邦第一ノ大規模ニシテ蒸氣力ニヨリ精巧ナル機械ヲ使用ス
○機械ハ歐洲ニテ有名ナル佛國最新式衛生洗濯機械ナリ
○消毒室ヲ設備シ一般ニ蒸汽消毒ヲ行ヒテ後洗濯及仕上ヲ爲ス
○乾燥室ノ設ケアレハ雨天ニテモ即日仕上ケ上納ヲ爲ス

西洋洗濯

○機械力ニ由ルヲ以テ洗濯代價ハ無比ノ低廉ナリ

御注意 弊社の集配人には烙印を刻したる番號付姓名記入の雇配札所持爲致居候間時々御検上の御洗濯物御下付被下度候

資本金二十萬圓

東京市芝區三田豊岡町四番地
日本衛生洗布株式會社
電話新橋二三二九

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新刊廣告

文學士白河鯉洋著飯沼珠城畫

立花宗茂

菊版美本
定價十九錢
郵稅四錢

文祿二年正月廿六日朝鮮國碧蹄館の大快戰に於ける立花宗茂の働きは實に天魔破旬も面を向くべき樣なく、遂に大明五十萬の大軍を衝崩したるもの、實に宗茂一條鎗の力と謂はざるべからず、本書は廣く舊記實錄に據りて該役の顚末を詳記し、且宗茂が老後までの言行を細叙したれば、豊太閤東に本多平八あり西に立花左近ありと賞讃せし武士道の眞髓を得たる英雄の面目紙上に躍如たり、

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發兌元　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

天靈泉を降して病者を救ふ

▲病は醫者に非ざれば全快せずと思ふ事勿れ弊堂販賣の靈鑛泉は醫者の藥にまさる大効あり

世の病者諸君に謹告す今日世に跋扈する賣藥の數は實に六万餘種なり而かも此六万有餘の醫藥を以てして僅々四百四病を治する事能はず殆ど無効に等しき者なり又現今醫者の或る部分を見るに所謂仁術てふ美名の下に不當の利益を貪り可憐不幸の病者の膏血を吸收す亦殆ど仁術の賊たるやの感あり諸君は右等賣藥と醫者との爲に年々巨多の金錢を徒費し不經濟不衛生をなしつゝあり速に猛省一番し鑛泉治療を實行あれ

▲藪醫者は靈泉の効顯大なるを妬み病者の服用を沮めども政府が免税せし良藥故必ず服せよ

天下靈泉にまさる良藥無し

病者安心

官山 藥山 靈鑛泉

◎政府免税醫藥之大王◎

効能は無量廣大病として一々全治せざる事無し是を以て他藥の如く効能書を掲載せず

此靈泉は平凡の藥と異なり天然にして有らゆる藥の原素を調合せられし神聖の天劑なれば諸病一度之に觸るゝ時は忽ち平癒す故に輕症は勿論是迄醫師に懸つて効無く長年難儀する病人試みに五瓶服用せば暫つて全治す

三日分金十五錢 ◎内外應用 七日分金卅五錢

◎効驗不思議難病即治◎

見本入用は金一圓送れ二週分發送 照會郵劵封入

全國各地特約店有尙廣く募集す

總本舗 東京日本橋區蠣殼町二の三 宮本龍眼堂

代理店 同 日本橋區上槇町三番地 安川晃榮堂

同 深川區佐賀町二の十一 福田彦兵衛

(取次) 東京下谷池の端 守田治兵衛 ● 同日本橋區横山町 [illegible] ● 同 [illegible] 山崎帝國堂 ● 同京橋區松屋町一 中山濟生堂 ● 同京橋銀座一 佐々木玄兵衛 ● 同淺草並木町 瀧山源左衛門 ● 橫濱伊勢崎町 安川支店 ● 長崎縣平戸 卜部舒夫 ● 常陸石岡本町 [illegible] ● [illegible] ● 長崎市西濱町 今富商館 ● 同京橋銀座二 松澤八右衛門 ● 同神田鍛冶町 大木合名會社 ● 同日本橋小網町 安川支店

女鑑　第拾參年第七號

美術と婦人

美術の眞髓は、天地の粋を拔き、世界の華を攄りて、意匠を神韻縹渺の間に顯はすに在るは、無論なり。

繪畫と、刺繍と、織物と、彫刻とを問はず、その最上の美を表はすに及びては、何人も見て以て感懷を興さゞるはなきなり。蓋し人の性や、美を好む。而して美は萬物の粋なり、華なり。今夫れ美を悅ぶの人を以て、萬物の粋と華とに對す。何ぞ又た其心を感動するものなからんや。シェキスピア曰く美は一の魔術師なり。その誘惑に逢ふときは、誠實も溶けて血となると。美の人に於ける殆ど一種思議すべからざる力を有するや、眞に斯の如きものあるなり。

生ける動物の中に於て、最も優美なるものは、人間なるべし。而して人間の中に於て、女子は概して男子よりも優美なり。婦人の鬢髪は長くして色澤あり。その膚は柔かく、その骨は細く、その容顔は方圓にして白し、されば美目の盼たる、好笑の倩たるは、とてもムクツケキ男子とは較ぶべくもあらざるなり、天は婦人に與ゆるに美といへる特質を以てしたると同時に、美の力を以て、此世に立つべき運命を附與したることもまた殆んど疑ふべからざるが如し、

世界の禽獸草木、魚蟲の中には、其色に於て、其形に於て、人間よりも美麗に見ゆるもの甚だ多し。孔雀の羽根の如何に華麗なるかを見よ。而して人類には此の華麗を有せざるなり。牡丹の花の如何に妖艶なるかを見よ、而して人間には此の妖艶を有せざるなり。其他の魚介禽蟲の屬、野草雜木の類に於ても、みな其の特殊の容色を有して一見人類よりも美麗に見ゆるもの甚だ多し。而も渠等の凡ての美が、遂に人類の美に及ばざるは何故ぞや。

人類には固より孔雀の羽根なきなり。牡丹の花なきなり。されど靚裝炫服したる人間が、その美觀を發輝するに至りては、孔雀の華麗も亡せ、牡丹の妖艶も消ゆるにあらずや。況んや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

魚介禽蟲の屬、野草雜木の類の美に於てをや。而して斯の如く人類をして、他の動物よりも優れたる美麗を有せしむるは、美術の力にして、此の力に據り靚裝炫服して、世界最上の美を占領するものは、洵に婦人たらざるを得ず。

婦人があらゆる萬物の粹を拔き、華を摭りて、其美を以て身邊に集め、他の動物の美を厭する趣は、恰も男子が威力を以て諸の猛獸鷙鳥に敵して、勝利を占むるが如し、虎や、狼や、熊や、鷲や、その牙の一噬と、爪の一搏とは、一時に能く幾個の人類を斃すに足るも、渠等遂に人間を恐るゝ所以のものは、人類が牙よりも、爪よりも優ぐれたる利器を有して、此の利器の動くところ、如何なる銳牙利爪と雖も及ぶ能はざるを知ればなり、故に男兒は世界に於ける凡ての生物よりも强しといふを得べく。而して女子は宇內に於ける諸の動物に比して美なりといふは、當然の言なりと信ず。

男子が、猛獸鷙鳥をも挫ぐべき大勢力を與へられたることに向つて、利器の發明を感謝せざるべからずとせは、婦人は、孔雀よりも、牡丹よりも艷麗なる美を、吾身に授けたる美術の發

達を祝福せざるべからざる義務なからんや。數多の鋭利なる利器が發明されて、益々男子の威力を強うするが如く、諸々の美術は進歩して、愈々婦人をして美麗を加へしむるなり。故に美術の進歩は、天の與へたる特質の美を發揮する所以の途に於ける、婦人最大の恩賜なりといふべし。

されば美術と女性とは、最も深き因縁を有するものたらざるべからず。鼻下に黥みして悦へるアイヌ婦人や、耳に鐶を穿ちて足れりとする蠻婦より、ルビ、ダイヤモンドを飾りて、光彩赫奕たる文明婦人に至るまで、多少と深淺の差こそあれ、みな美術の進歩を祝せざるべからざるが中にも、最も多く美術の力を假りて、その固有の美質を發揮したる文明婦人は、美術に向ひて多大の感謝を拂ひて、その前途の發達を祝せざるを得ざるべし。故に美術の爲に奬勵し、盡力して、遂に天地の粹を拔き、世界の華を摭りて、その眞髓を得るに至らしめむことは、婦人の最も大なる義務の一ならざるを得ざるなり。

吾輩頃ろ大阪に開設せる第五内國勸業博覧會に臨みて我國の工業と美術とが、近來やうや

く精緻巧妙の域に進み殊に刺繡染織等婦人に關する多くの製作品の著しく發達したるを見て、歡喜の餘り、その進歩の益々盛んならむことを望みて、匆々此稿を草す。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



娯樂に就て（つゞき）

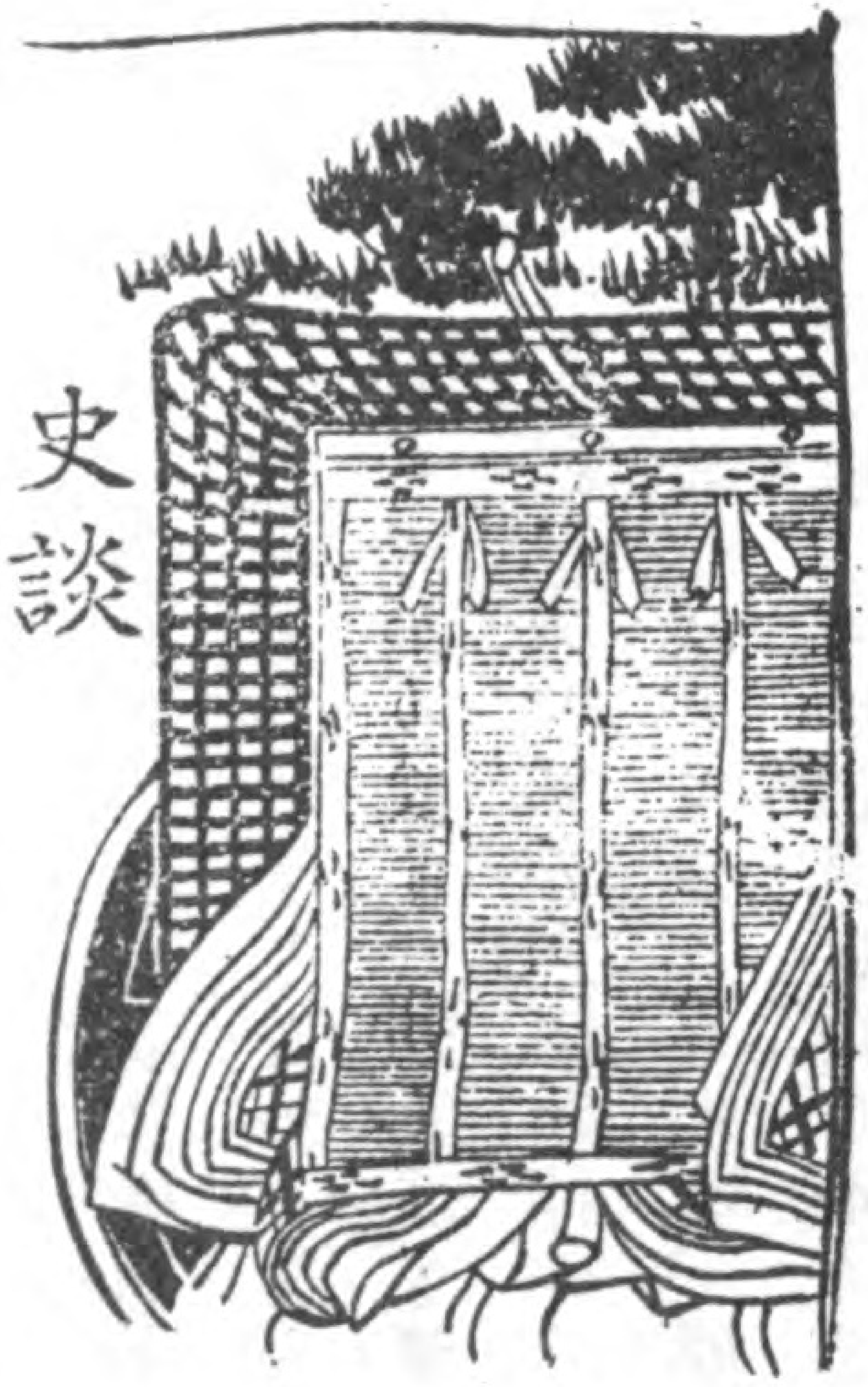
下田歌子

前申しました職務とか義務とか云ふことは、イヤでも泣々でもしますけれども、此樂みと云ふことは、即ち讀んで名の如く樂みであるから、心に面白いと思はねければ出來ない筈のものである、其樂みが眞に高尚になッて其娯樂を人に示して誇ることが出來るやうに進めば、眞に社會が進んだこと丶安心が出來ます、其樂みはドウするかと云ふと、其遊びの種類を選んで研究して行かねばなりませぬ、是も段々階級がございまして、既に學校出身の人などになりますと、多くのお仲間が新しい遊びの種類を知ッて居ります、即ち相互に色々あることに付て遊びを學んで居ります、それから文學のやうなことも段々それに屬するやうなにありませうが、それは遊びではあるけれども、一つの科業として學ぶことであッて、一般の人に皆其遊びを課することは出來ませぬ、又其遊びは一般の人の心に面白いこと丶感ずることが出來ない、今の遊びはまだ階級を履んで居りませぬから、如何ある種類の遊びを以てしたら、年の行ッた人も、年の行かぬ人も、進んだ人も、又今まで家にばかり引込んで居ッて多少社會に後れた人も、皆面白

いと云ふ感じを抱くやうなことは研究を要することであッて、是は一朝一夕には參りませぬ、斯う云ふ娯樂の種類を選んだら、宜いと云ふことはまだ私も見付けることが出來ませぬけれども、要するに先づ此標準を立てねばなりませぬ、總て社會が閉されて居る時、即ち外國との交通が無くして一國の中に居ッて一向出ることが出來ない、即ち出ないのを以て女の本分として居ッた社會が、隨分長く續きました、それでドウしても日本の遊びは動もすると、極く少い人の階級であッて極く小さな、極く靜に、身體を動かさぬやうな遊びが多いのであります、さう云ふ少數の人ばかりが、家に閉籠ッて遊ぶと云ふことは、ドウしても健康を助長するに付て、損の行く結果になります、日本の歌加留多などは、同じ家の中に比較的大勢の人が集ッて遊ばれますけれども、是も衞生と云ふ方から申すと、餘り勸められませぬ、遊んで居ると逆上したり、ツイ夜を更かすと餘計なものを食べなければならぬことになッて、身體の爲に宜くありませぬ、其外碁とか將棊とか云ふ遊びは面白いでありませうが、是も少數の人が時も忘れて健康を害すると云ふことは免れないと思ひます、勿論是も或る種類、或る程度の制限を立てゝやれば別に害もありませぬが、併しながら健康の爲に餘り得な遊びでないと云ふことは知らねばなりませぬさうすると兎に角種々の遊びの中で成るたけ健康の害にならぬもの、モウ一つ進んでは健康の助けになるもの、或は德育智育の助けになると云ふものを選びまして、さうして其遊びの種類は成るたけ多くの人で成るたけ有益なものに向ッて遊ぶといふことを研究したら、非常に宜からうと思ひます、此頃は遊戲に屬する所の書物が、大變出來て

參りました、此種類が多くなッたなら、何もかも段々革進して行かねばなりませぬ、是までの通りでは居られない、是は時勢が促して來たと思ひます、其中には隨分年の行ッた人も、年の行かぬ人も、其事を一ト通り見れば出來ると云ふ遊びが多いやうであります、種々の遊びが出來て參りましたから、段々是から先き益々人の身體は健康にならなければなりませぬ、種々なことに耐へられるやうな健康にならなければなりませぬ、集りが愈愈廣く、愈々大きくなりますと、有益なことにを使ッて戴く御婦人が多くなッて來なければなり腦ませぬから、其集りの有益なことを研究すると同時に、又遊興であるとか、或は集ッて交際を温めるとか云ふ遊びの種類が、又進んで來て皆快よく格別に物も掛らずに誰に聞かしても立派なことであると云ふやうな、高尚な有益な遊びを以て、皆さんが樂むと云ふ感じを抱くやうに進めて參りたいと思ひます、總て遊びなど丶云ふものは、習慣が一つの樂みを生ずるのでございます、慣れない人は面白くなくとも、慣れて居る人は大變面白く感ずる、又面白かッたから、氣が變ッて面白いと云ふことがありますから、矢張り古い遊びでも宜い遊びは存して置き、又新しい遊びも宜いものは採ッて人に知らせて樂みつ丶進める、それを知らないと進歩して宜い結果を得ることが出來ませぬそれで其遊びは今申したやうに、色々な本に書いてあります、即ち東西古今の遊びの歷史を見ても其音樂は最も遊びの種類に重なる力を持ッて居るもので至極結構であるけれども、如何せむ日本の音樂は、古樂と云ふものが一つの鑄形の中に入れたやうなものであッて、進歩を致しませぬ、是は一種の藝式の爲に用ゐらる丶ものであッて、御目

出度きもの丶爲に、用ゐるものでないと云ふやうな習慣が續いた爲に、民間で發達した所の音樂と云ふものは、朝廷とか云ふやうな重たゞしい所に少しも用ゐらるゝ機會が無かッた爲に、極く下賤な者の手に落ちて、其下賤な手で發達するに任せて置た結果、ドウも日本の一般の音樂が、如何なる高貴の人に聽かせても耻かしくないやうな、高尙のものと言ふことは出來ませぬ、まだドウも親子、夫婦、兄弟が立派な席に持出して弄んで歡びを盡すことの出來ないものが、交ッて居ることは、誠に殘念でございます、それ故に維新後は改良々々と云ふ聲も高うございましたが、まだ十分實行が出來ないやうであります、併し是も氣運に促されて段々改良の結果を見る方に近付いて行きませう、それで此音樂など丶云ふものは、娯樂を助けるに少しも爭はれない道具に違ひありませぬが、日本のは一つ斯う云ふ困難がある爲に、立派な婦人が集ッて、他日之を演ずるやうになると餘ほど其種類を選ぶことが必要であります、是は今申しました有益なことを研究するよりは、第二のことでございますが、又寄り〳〵にさう云ふ方に心のある方や、經驗のある方は、樂み半分に研究なさることが必要と思ひます、兎にも角にも、總て女子の手で致しますことは、一歩〳〵進んで參らなければならぬ所の氣運に向ふて居ると思ひますから、チョッと今日は娯樂の御話に付て一口申上げました、今日は御餘興もあると云ふことでございますから、是で御免を蒙ります。（完結）



阿能局（つゞき）

小泉三申

（八）阿能の局

無限の悲哀を胸に包みながら、笑て家兄の門出を送りし後藤が妹は、母に訣れし袖の涙の乾きも果てぬに、今又た新なる愁ひを得て、繊弱はき女性の身の、只だ一人草深き千原の里に淋しき夢を結び居けるが、優れて男々しき性なれば、尋常の婦人の如く、徒らに嘆き悲しむ態はなく、家兄が首尾よく本懐を遂げて、潔く死に就かんとをのみ祈りつゝ、若しや、風の便も有らんかと、人の噂さに耳を傾けゝるに、たま／＼安土城に盜賊ありて宿直の武士に斬り殺され死屍は城外に曝らさるゝ由、この邊土まで聞へけり。

凡そ今の時節に、右大臣家の居城に忍びて物を盜まんとする生命知らずの有るべきや、或は是れ家兄が事成らずして屍を城中に横へたるにあらざるか、生きて歸らんことは夢にだも期せずと雖も、いまはしき盜賊の汚名を得て萬人の誹りを受けんには、亡き人の遺憾は言ふも愚かなり、殘れる我れもいかで本意なく思はざらんや、兎ても角ても彼地に赴き、事の眞否を極むるに如かずと、健氣

にも心を決して、安土の城下に來り見れば、變り果てたる家兄が姿、讀むも汚らはしき捨札の文字悲憤こもごも迫り、痛涙禁じ難し。

○　○　○　○　○　○　○　○　○

織田家の奉行職たる菅谷九郎左衛門は、こゝに至りて奇異なる訴へに接しぬ、ソハ年若き婦人が、此の頃の疑問たる彼の怪しき刺客の妹と稱して、自ら名乘出でたる事にぞある。見れば花の如き美人にして、荒き風にも得堪えまじき嬋姿なれども、其の言ふ所はあくまでも膽太く、親しく右大臣家に拜謁して、家兄が志の在る所を陳述したしとて、其他は多く言はざれば、兎も角もとて此の趣を信長公に訴へたるに、公にも奇異なる事に思召され、直ちに其の乞ひを容れ給ひて一日御直きに訊問あらせられき。

千原の村娘は、今や右大臣家の目前に引き据えられて、家兄の爲めに萬丈の氣焔を吐かんとす、彼は右府公の間に對へ、怖れ氣もなく滔々として、六郎太夫が公を刺さんと欲せし事の始終を陳述し、我が兄は義人なり、御城中を騷がし、尊威を犯したる罪は輕からずと爲すも、徒らに財を盜む草賊と同樣視せられ、汚名を蒙りて死屍を道路に曝らすは武士の恥辱にして、妾か悲み思ふ所なり、仰ぎ願くは此の心を愍れみ給ひ、盜賊の惡名を去りて死屍を收むるとを許させ給へ、妾は固より家兄の罪に連坐する者、いかなる重き處刑を被るとも、いさゝかも悔い侍らずと、言ふ所理非明白にして一點の疑ひを容れず、右府公深く感じ思召し、誠に然らば汝が兄は信義厚き大丈夫なり、事成らずして斃れたるは、信長が武運の盡きざるが故にして、汝が兄の力足らざるにあらず、況や汝はまだ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年若き乙女の身を以て、兄が爲めに志を述べ寃を解くと、其勇氣眞實感ずるに堪へたり、好し、汝が乞ひに任かせ、賊名を削り手厚く葬り得さすべし、まことに此の兄と此の妹と、當世珍らしき義人烈女なるかな、汝固より罪なし、余豈に罪なき者を刑せんや、而も汝若し兄が志を繼ぎて仇を余に復さんとならば、隨意に刄を研いで信長が虚を窺ふべしと、さすがに天下の覇權を握り給ふ名將の、度量海の如き寛仁の言に、左右の諸士も感じ入つて、衆目齊しく烈女の身邊に集りぬ。

後藤が妹は、思ひがけなき恩命を被り、喜び極つて涙を垂れ、誠に有り難き御沙汰を蒙り、夢かとばかり疑ひ侍る、兄が汚名雪かれしのみならず身に餘る御褒美の御言葉さへ賜はる上は、泉下の人もさこそ洪恩を感謝し奉るべし、兄は固より君に對して露ほども宿怨を挾さまず義に由つて已むを得ず尊威を犯し奉れるのみ、まして妾に何の遺恨もあるべきや、若し幸に御赦るされを蒙りなば、故郷に歸りて靜かに亡き人々の菩提を弔ひ侍るべしと、眞實面にあらはれければ、右府公いよいよ賞嘆あり、汝旣に他意なくんば、これより城中に留りて我れに仕へよと、尙は懇に御諭ありき。

かくて後六郎太夫が最愛の妹は、右府公の御侍近く召出され、其名を阿能局と呼ばれ、天性の麗質いよ〳〵麗はしく、昨日までの處女姿にひきかへて氣高き上﨟となり、安土城の大奥にて、名花の一に數へられぬ。

（九）　本能寺

さる程に織田家の武運いよ〳〵盛んにして、關東の北條氏も德川家康を通じて和を講ずるに至りしかば、天正十年二月には、織田、北條、德川、三

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家聯合して、甲州の武田勝頼を攻め滅ばしたるが是より先、羽柴秀吉は君命によりて中國征討の任に當り、連戰連勝の勢を以て備中國に攻入りけるに、同國高松の城主淸水宗治城に據りて堅く防ぎ、毛利氏大兵を擧げ來りて之を援けゝれば、秀吉獨力を以て敵の大軍に當り難きを憂へ、檄を傳へて頻りに信長の出征を促がしぬ。

是に於て右府自ら將として秀吉を援けんとて、池田、堀、長岡、中川、高山等の十三將に出陣を命じ、右府は嫡子中將信忠と倶に、五月二十九日京師に到着あり、右府は本能寺を、中將は妙覺寺を假の旅館と爲し給ふ。

明智日向守光秀も、亦た西國出征の命を受けたる一人にて、五月晦日、部下の將士一萬餘人を龜山城に會しけるが、此時光秀既に叛逆の企あり六月一日の夜、遽かに道を轉じて京師に向ひ、我が敵 四條本能寺に在りと、揚言して、六月二日の早天、先陣明智光春、三千五百餘騎を以て本能寺を圍みぬ。

時に右府に從ふ者僅かに、百餘人時ならぬ人馬の音に曉夢を破られ、衾を蹴つて驚き起つ、乍ち見る水色桔梗の九本旗、本能寺の山門に狂ひて、殺氣天に漲り、喊聲地軸を動かし來るを。

かくて、兩軍の合戰のいかに烈しく凄ましかりしよ、我が兵能く防ぐと雖も、敵は目に餘る大軍なり、勝敗の數は言ふを要せず、あはれ織田家の武運も、今日を限りに盡き果てぬ、本能寺は今方さに猛火を以て包まれたり、時に一人の上臈、白き衣に紅の裳を着け、楚々たる嬌態を、焰々たる猛火の間に置き、纎手に眉尖刀を舞はして縱橫奮戰する者あり、あゝ是れ阿能の局にあらずや。

局は、一旦右府の高恩に感激して、安土の城に留

りけるより、心を傾け誠を盡して仕へければ、右府も局の才色双絕にして、且つ其の氣節の勝れたるを愛し給ひ、この度の出陣にも、御傍近く伴はれたるが、測らざる明智が謀逆に、局はかひ〴〵しく右府を援けて、花の如き姿を陣頭に顯はすに至れるなり。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

猛火本能寺を燒き盡して、織田氏の霸業も亦た遂に一掬の灰燼と化し了りぬ、阿能の局は右府に殉して火中に投じぬ、母には孝を全うし兄には義を全うし、君に仕へては能く其の忠を全うせる局の生涯は、まことに烈女の龜鑑にして、千歲の下尙は生氣の淋漓たるを覺ゆるならずや。(完)

阿能局の事蹟は、事實文編、豹皮錄、太閤記等に記るされ、或は後藤六郎太夫親友福井主水の爲めに光秀を刺さんとして果さず、光秀後藤の死屍を梟す、後藤の妹兄の爲めに寃を雪ぐ光秀其の意氣を愛し、赦して信長に仕へしむともいふ、然れども信長記明智記等の諸書多くは局の事蹟を見ず、太閤記等の記事大に疑ふべしと雖も、史上の事實は輕々しく斷ず可らず、たとへ之を架空の小說談とするも、其の事固より風敎に害なければ、假りに傳說のまゝを錄して兒女一夕の話柄に供するのみ、讀者諒諸。

女俠眞田龜子の傳

林　壽　祐

上總といへば、關東平野の一部であッて、定めし

沃田腴野が、廣漠として連つて居ると思ふ人もあらうが、實際は、中央から、房州に至るまで、南部一面山だらけで、所謂山間僻地の態をなし、到る所が凸凹であります。で上總の中心ともいふべき所に、桐木臺と呼べる高原があります、維新前までは、ヅブ寂しかッたが、明治二年遠州濱松藩主井上氏が、封(六萬石)を此地に移し、新に鶴舞と名け、だん／＼と賑かになりました、其鶴舞の西方即ちもとの桐木臺の麓を池和田といひ、四方山を繞らし、恰度丼の様な地形を爲し居ります徳川は十一代將軍の頃でしたらう、この山里に奇烈なる一女子が、呱々の産聲を擧げて生れ出でました。奇烈なる女子、姓は眞田名は龜子、運の神に見捨てられたのか、搖籃の中既に父母を失ひ、祖父母もなければ、兄弟姉妹もなく、世にも憐れな孤子となッたので、親戚なる人の家で、養育さ

れることゝなりました。親なし子とはいへども、天資の美貌、涼眼隆鼻白膚雪をしのぎ、頑是なき顔貌は、既に十人凡に勝れて居るに、かてゝ加へて怜悧の上に、物に屈せざる氣象に富んで居たから一層麗はしく見えたであらう。

天地の間、たより少なき可憐の孤子も、人凡に生長しつゝ、花の顔いよ／＼本色を現はして來ました。けれども氣象凛々として、世の常の婦女子と異り、苟も道に戻ることあれば、長上權者を問はず、飽くまで正道を以て攻めたてる。何にはともあれ、年頃になッたから、そちからもこちからも、お嫁に欲しいと申込んで來る、親類共も親なし子のことであるから、嫁に行くなり婿をとるなり、早く極めた方がよからうと、口を揃へて龜子に勸めるけれども、仲々應じない「妾は不肖ながら、平々凡々の夫をもたうとは思ひません、理

想にかなふまでは、縦令三十にならうとも四十にならうとも、かまひません、いや〳〵ことによッたら一生處女で通すかも知れません』と、更に花嫁になる氣がない。で敢て身の形を飾るでなく、淫がはしいことなどは、露程も無い。或る時牛久(池和田より西一里余)といふ所の飲食店で、青年共が酒を飲んで居ッたが、一人の美人が通るのを見て、青年共の事であるから、揄揶ふとして、其美人を呼び招いだ、美人は何の臆氣もなく、ツカツカと入り來り青年共の酌する盃を受け、二三杯傾け、さて禮を述べ、還らうとした、時に青年の一人が今一杯と更に注いで進めたので、美人は復も平然として飲み盡した、其青年はこれを見て美人の手をつかまへ眼尻を下げながら『姉さんは佳い女だなア、己れの注いだ酒を飲んだ、私うれしい』と、戯れに艶言を吐いた、所が美人は忽ち眥をあげ、眼をいからしながら『やい、白痴め駄物等め何んと吐かす、池和田の眞田龜を知らないか、清淨潔白身に於て一點の曇もない眞田龜、見損なッたか、女と侮り、聞くも汚らしき暴言、用捨はならんぞ』と、怒鳴ッたので、青年は色を失ひ、ブル〳〵震え出した、他の青年共も、膽を潰し、暫し呆氣にとられて居ッた、それから低頭して、切に其の無禮を謝したので、美人は悠然として立去ッてしまッたといふことです。

さて其後龜子は親戚共の、結婚を勸むること屢々であるから、斷るのを面倒がり、去ッて鎌倉の尼寺に入いり、數年間修業を積み、もう大概嫁の周旋のない頃と思ッてから、再び郷里に歸り、相變らず人道を唱へ、不正不義を犯すものあれば、直に行ッて、ドシ〳〵、理窟を並べたてる、夫故近郷の者共は、非常に怖がッてるが、正理による者

には決して逆はないから、敢て害しやうとするものもなかッた。平常刀をさして、自分で女俠といひ、主として博愛主義を抱いて居ッたらしい。池和田は、戰國の世、里見氏が支城を置いた所で永祿中多賀藏人が守ッて居ッたが、北條氏に攻められ、とう〳〵城を燒いて、討死してしまッたので、今に其城址があります龜子は其城址を見る毎に、往時を追想し、涙を流しながら、嗚呼里見氏が、我房總の民を憐れみ、いつくしんで呉れたこと百八十年、里見氏が滅びてからは、誰一人其趾を祀るものがない、人にして恩義を知らないものは、犬猫にも劣る、嗚呼妾不幸女子に生れ、力微くて如何とも致すことが出來ないと、聲をたてて泣くので、人々狂人と看做し、潛に嘲り嗤つたものもあつた。

其後龜子は、一寺院を建設し、里見氏の冥福を祈らんことを、時の領主に請願して許れなかつた、けれども屢々請願して已まず、村役人が何んといひ聞かせても、道理を楯として抗拒するから始末に困る、遂に邸内に亂入したる科にて捕えられ、庄屋に命じて禁固されてしまつた。それからといふものは、數人の番人が晝夜龜子に附添ッて、ちッとも外出することが出來ない。龜子は性來多藝で、文學を好み、兼て音樂にも巧みであつたから、時々軍書本や繪艸紙など讀み聞せ、或は三味線を彈き、義太夫など語り、番人共の無聊を慰めてたといふことである。で庄屋は平常龜子が理窟ぽいことをいふのを厭ひ、且つ番人を附けて置いては、費用がかゝるから、此機を幸ひ、井戶のやうに地を穿ち、龜子を入れ、遁れられない爲め上の方に格子の樣な木の蓋をつけ、毎日食物を紐につけ、下ろして與えてたそうである、嗟乎龜子

史談

の言行、時に狂氣に類する處ありとはいふものゝ生きながら幽閨の中に投げ込むとは、隨分酷い話ではありませんか、而かも或る日のこと、大雨が降つて、土窟に一ぱい水が滿ちた、堪ッたものじやない。奇烈なる女俠龜子は、無量の恨を呑んで果敢も、黄泉の客と消へ去つてしまッた。慘も慘世是れより慘なることは餘り無いでせう。今其年月を詳にすることは出來ないが、村老の語る所によると、槪ね天保年中の頃で年は四十前後であつたといふことです。

龜子の思想といひ、品行といひ、毫も丈夫に愧づる所はない、其氣慨は、寛政の三奇人の一なる、高山彥九郎に近きもので、女子としては、餘り感服しられない所もあるが、其意思の確固たる、百折たゆまず、敢て權門に媚びず、弱者を賤ます、却て之が慰藉を爲し、一鄉の風紀を正うしたるが

如き、若し今日にあらしめば、またと得難い女傑であつたに相違ないが、惜しい哉、時に逢はず、生を山州の避邑に受け、幼時早く父母に別れ、言ふ所爲す所、田夫野人の爲め、狂と譏られ愚と嗤はれ、唯に埋れ木の世に現はるゝことなきはまだしも、人世類少き悲慘の最期を遂ぐるに至りしは、想ひやるだに遺憾に堪へないことである。

（完）

ちりちらす人も尋ねぬふるさとの
　つゆけき花にはるかぜぞふく
朝日かげにほへる山のさくらばな
　つれなくきえぬ雪かとぞみる
風かよふ寐さめのそでの花の香に
　かをるまくらの春の夜のゆめ
花の色にあまぎるかすみたちまよひ
　空さへにほふやまさくらかな

新古今集

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



學藝

通俗土佐日記（第拾貳回）

北海道廳師範學校教諭 兒玉彌三郎

十九日、日惡しければ舟出さず

○日惡しければ　とは風波の荒きをいふ、翌日の文に合せても知るべし、

二十日、昨日の樣なれば舟出さず、皆人憂へ歎く、苦しく心もとなければ、唯日の經ぬる數を、今日幾日、二十日、三十日と數ふれば指も傷はれぬべし、

○昨日の樣なれば　とは今日も尚ほ風波の止まざるをいふ、されど夜に入りて空晴れたることは、次に廿日の月出にけり云々とあるにて明らかなり。

○苦しく心もとなければ　とは前にもいへるが如く、生憎なることに思ふをいふにて、一日も早く都へと思ふに反して、連日風波荒るゝをいふなり。

○日の經ぬる數を云々　今日幾日とは今日にて幾日ぞといふなり、二十日三十日といへるは日數なり、斯く日數を數ふるは歎きの深きしるしなり、

○およびも云々　和名抄手足類に「指、和名由比、俗云於與比」とあり、故におよびとは俗語なり、於の字を用ゐたれど、小指にはあらで五

指を總稱せるなり、今試みに和名抄より五指の名目を抄出せん、「拇、於保於與比、大指也、食指、比止佐之乃指、第二指也、中指、奈加乃於與比、第三指也、無名指、奈奈之乃指、第四指也、季指、古於與比、小指、第五指也」
○傷はれぬべし　とは日數餘り多ければ、度々指を屈伸する爲めに傷はれんとの意なり、

いと詫し、いも寢ず、二十日の月出でにけり、山の端も無くて、海の中よりぞ出で來る、

○詫し　は前にもいへる如く、思慮もせん術も盡きたるをいふなり、
○いも寢ず　のいは眠ることは更なり臥しだにせずとの心なり、思慮多きときは精神澄みて寢られぬものなればなり、
○廿日の月云々　正月廿日の月は亥の上刻と

て、今の午後十時半頃に出づ、其の頃までも起き居たるを見て、其の遲くなれるを且つは驚き且つは歎けるなり、
○山の端も云々　土佐の海は東南渺として際涯なければなり、
○海の中よりぞ云々　普通の地にては月は山より出づるを常とするに、今は然らざるが故に特にぞといへるなり、

斯様なるを見てや、昔安倍仲麿といひける人は、唐土に渡りて歸り來ける時に、舟に乘るべき處にて、彼の國の人、馬の餞けし、別れ惜みて、彼國の詩作りなどしける、飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける、其の月は海よりぞ出でける、之れを見て仲麿のぬし、我が國は斯かる歌なむ、神代よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り神も讀む給び、今は上、中、下の人も、斯樣に別れ惜み、喜びあり悲みある時には讀むとて、讀めりける歌、

蒼海原振放見れば春日なる三笠の
山に出でし月かも

とぞ讀めりける、彼の國人、聞き知りまじう覺えたれども、言の心を漢字に樣を書き出だして、此國の詞傳へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ愛でける唐土と此の國とは、詞異なるものなれど、月影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ、

○見てや　のやに對する結詞なき樣なれど、下の飽かずやありけむのけむは、飽かずやのやと此處のやと二つの係りを結べるなりと知るべし、斯かる例は間あることなり、一例を擧げんに「高砂の峯の松とや世の中を守る人とや我はなりなむ」(貫之集)の類の如し「燈」には此の見てやの結詞は無しとして、誤寫にてもありしならんとあれど從ひ難し、

○昔安倍仲麿云々　仲麿は中務大輔船守の子なり、性聰敏にして讀書を好む、十六歲の時選ばれて遣唐留學生となり、玄宗に仕へて姓名を朝衡と改め、秘書監兼衛府卿に任ぜらる、勝寶中藤原清河唐に到り還るに及びて、仲麿與に歸らんとす、王維、包佶、趙驊等、皆詩を贈る海上颶風に遇ひ安南に漂泊す、李白、漂沒したりと思ひ詩を作りて哭す、後ち清河と復た唐に到る肅宗、左散騎常侍安南都護に任ず、光仁天皇の元年唐に卒す、年七十八、代宗、潞州大都督を

學叢

贈る、唐に在ること五十餘年、身榮貴と雖も、歸を思ひて止まず、言の鄕國に及ぶもの悉く悽惻ならざるはなし、而かも其の傳はれるもの歸朝せんとせし時の留別詩と此の歌一首とのみなるは惜むべきの至りなり、
○舟に乘るべき處にて云々　古今集羇旅部に、載れる此の歌の左註に據れば、明州の海濱なりと思はる、改觀抄に「明州屬₌江南道₋、開元廿六年、以₃境有₌四明山₋爲₂名」とあり、
○飽かずやありけむ　別るゝに忍びずやありけんの意なり、
○仲麿のぬし　ぬしはのうしの約まりたるなれば、のぬしといひてはのゝ字重複なり、傳寫の誤りなるべし、
○斯かる歌なむ　とは和歌の事を知らざる唐人に知らしむる爲めの詞なり、

○神代より云々　讀む給ひはよんたびと讀むべし、讀み給ひといふを常に斯く音便に言ひ習へるまゝを書けるなるべし、
○蒼海原云々　古今集にはあまのはらとあり、和名抄には四聲字苑を引きて滄溟を阿乎三波良と譯せり、加藤宇萬伎は、天原、蒼海原二つに傳へたる由をいへり、其の他、古くは天の原といひしを後ちわをうなばらとなりしなりといひ或は始めあをうなばらなりしを古今集撰定の時天の原に改めたるにや、將た天の原なりしを此の日記を書きし時改めたるにやなど種々の說あれども、其の精しきことは知り難し、何れにても一首の意は聞ゆべし、
○振放見れば　とははるばる見遣る心なり、其の物を遠く見るといはずとも、振りさけといへば遠き物を見る心とあるなり、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○春日なる云々　奈良の都の春日に在る三笠の山にといふなり、仲麿故郷に在りし時は月は三笠山より出づるをのみ見慣れしが故に斯く讀めるなり、

○かも　とは春日の三笠山より出でし月か將た他處より出でし月かを定めんと欲する心なり、月は本來同じ月と見ゆれど、今は海より出でゝ其の狀況異なればなり、

○一首の意は、此の月は故郷にて見し月と同物か將た異物かと、其の異同を知らんと欲する心のみを表面に讀みたれど、所詮其の異同を知り得たりとて何の益もあらじ、故に此の異同を推究して、若し同物ならば切めて月をだに故郷の物と見て、唯一人此の異郷に居る心細さを慰めんと思ふ心を籠めたるなり、是を明白にいひたらんには年來親しく交りし人々の、折角此處まで送り來て、夜更くるまで別るゝに忍びずして其の情を盡せるに對して冷淡らしく思はるゝが故に、唯海より出づる月の、故郷にて見たる月とは異物の樣に思はるゝ趣を咏みたるなり、但し振放見ればの下に月は海より出で來る、其の月はといふ詞を補ひて見るべし、是は最も巧みに省略せるなり、

○聞き知りまじう　のまじうはまじくの音便なり、是は、日本語なれば唐人には解し得らるまじきをいへるなり、

○言の心　とは歌の意義なり、

○樣を書き出だす　とは和歌を詩に譯せしなり、

○此國の詞傳へたる人に云々　是は通事なるべし、前の詩に譯せるものと原作とを對照して示せしなるべし、

○詞異なるものなれど　とは假字文なるは固とより、動詞の位置の異なるなどをいへるなり、

扨、今、往昔を思ひ遣りて、或る人の讀める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でゝ波にこそ入れ、

○山の端に見し云々　都にては山の端より出でて山の端に入りたる月なれどゝの意なり、末句と對照して考へ合はすべし、

○波より出でゝ云々　前述の如く都にては山の端より出でゝ山の端に入りたりし月の、此處にては波より出でゝ波に入るは別物の樣なれど、斯く出づる處入る處こそ異なれ月は依然同じ月なるべしとの意なり、此の歌は後撰集に入れり、

○一首の意は、出で樣入り樣こそ異なれ、月は嘗て都にて見し月なれば、月をだに都の知己と思ひて心細さを慰むべけれど、月の外には知れるもののなきこと、往昔仲麿が明州の海濱に居し時の心に同じければ、上に往昔を思ひ遣りてと書けるなり、仲麿を思ひ遣るは表面にて、實は我が心細さを思はせんが爲めなり、

○此の一段は、數十日風波に妨げられて、歸期の覺束なさを、仲麿に比して思はせんが爲めに斯く仲麿の事蹟を詳しく書けるなり、故に今の我が身に比較して仲麿を憐みたるが如く書けれど却て仲麿を借りて我が上を思はせんが爲めなり然らずんば仲麿のことを斯く詳しくいふ必要なし、是れ亦土佐の任の歎きより發したるなり、

廿一日、卯の時ばかりに舟出す、皆人々の舟出づ、之れを見れば、春の海に秋の木葉しも散れる樣にぞありける、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○卯の時ばかりに云々　卯の時は今の午前六時なり、昨夜より風波も靜かになりたれば、早朝舟出せる嬉しさを籠めたるものと思はる、
○皆人々の舟出づ　とは屬官等の舟家臣等の舟なり、受領のことなれば舟は數艘ありしあるべし、
○春の海に秋の木の葉しも云々　紀氏主從のみあらず、舟人等も皆天氣を待ち兼ねて舟出せるにて、其樣の勇ましく嬉しくて、此の頃の歎きも、少しは慰みたる樣なるを思はせて、稍陽氣立ちて書けるなり、

朧氣の願ひに依りてやあらむ、風も吹かず、好き日出で來て、漕ぎ行く、

○朧氣の願　とは自分の願望の程を謙遜していへるにて、なみ〲にて勝れたるともなきを形容せる詞なり、
○風も吹かず　とあるにて、雨も降らず波も起たざりしことを思はせたるあり、

此の間に、使はれむとて附きて來る童あり、其れが歌ふ款乃尙ほこそ國の方は見遣らるれ、我が父母在りとし思へばかへらや、

と歌ふぞ憫れなる、

○此の間に　とは此の、天氣も好く舟の進む間といふなり、而して此の詞は次の使はれむとてに續くにはあらで、歌ふ款乃に續くにて、使はれむとて云々は插入文なり、
○使はれむとて云ふ　は童自身の發意よりせるにはあらで、其の親なるもの、紀氏任中の德に感じて之れを慕ひ、我が子の行末を思ひて仕へしめたるなるべし、然れども之れを明白に書くときは己れの德を輝かさんとする嫌あれば、斯

講學

く童自身の心よりせる如く書けるなり、
○尙はこそ云々　此の歌、古くより有りし一篇の半ばより歌ひ出せしが如くも見ゆれど、若し然らずと見ば、歌の前部に當るべきことを意中に思ひつゝ、之れに續けて此の歌を歌ひしものとも見られん、即ち「今は漕ぎ離れて、鄕國も遠くなりたれば、見遣りたりとて甲斐なきことなれば、思ひ絶たんと思へども尙はこそ云々」といふ程の意なるべし、
○在りとし思へば　とは國に我が父母在りと思ふ故にといふにて、末より本に返りて意の調ふ格にて「我が父母在りと思へば尙はこそ國の方は見遣らるれ」といふべきを、倒置法に依りて斯くしたるなり、
○此の歌は、專ら、國に殘れる父母を思ふを表として、實は漕ぎ離れ行く舟中の心細さを述べたるなり、
○かへらや　は前に出でたる舟歌にも此の詞あるが如く、舟歌の曲節に、歌の句間に加へて歌ふ詞なるべし、
○と歌ふぞ憫れなる　とは記者の心を述べたるなり、是れ舟中一同、今日の好天氣に乘じて漕ぎ離るゝを嬉しく思ふに引き換へ、此の童は次第に故國の遠くなるが心細さに、此の歌を歌ふを聞くに付けても、其の心を推量して憫れに思ふ由をいへるなり、舟中一同の喜びに對する童の心細さ、好個の對照抑揚なり、

斯く歌ふを聞きつゝ漕ぎ來るに、黑鳥といふ鳥巖の上に集まり居り、其の巖の下に、波白く打ち寄す楫取の言ふ樣黑き鳥の下に白き波を寄すとぞいふ、此の詞何とは無けれども、物言ふ樣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぞ聞えたる、人の程に合はねば尤むる
なり、

○黒鳥　和名抄に「鵠、久呂止里、黒色水鳥也」
とあり、

○居り　の下にて切ての三字の意を入れて見る
べし、

○何とは無けれど　とは何となくといふ心にて
歌とも詩とも名づくべからざれど、いふなり、

○物言ふ様にぞ云々　詞つきの何となく凡常の
様にはあらずといふなり、

○人の程に云々　人々の身の分際を程といふに
て、揖取の身の分際に合はぬ詞なればとの心な
り、畢竟不相應あるをいふ、

○尤むるなり　とは耳立ちたれば聞き尤むるな
りといふなり、

○此の、揖取の詞を殊更に此處に記せるは、下
文に頭も皆白けぬとあるに對し、又下の歌の白
波に應ぜしめんが爲めなりと知るべし、

和歌評釋　小倉の色紙

神田中學校講師　中川愛氷

春雨のをやみなき一日、つれ〴〵なるまゝに、
物の本を何をがなとさぐるうち、ふと歌がるた
の箱の手に觸れたるより、これの講義にてもし
て見ばやと、順は手當り次第に二十あまりを、
撰びぬ。

持統天皇

第四十一代の帝にして、御父は天智天皇、御母
は大臣蘇我山田石川麿の女遠智娘なり、天武天
皇の皇后となりて、政道を輔佐し奉らせ給ふこ

と多く、天武天皇崩御の後、四年正月に御即位わり、大和國藤原宮に遷居し給ふ、

春すぎて夏來にけらしゝろ妙の
　衣ほすてふ天の香具山

○春過ぎて　春も過ぎ去りて○夏來にけらしいらしは俗にいふ「ラシイ」なり、乃ち夏が來たさうなといふ意○しろ妙の　しろたへは衣の枕詞、妙は栲又は細布の借字にて穀の木の皮をもて織りたる布をいふ、其色白きより白きものゝ枕詞となし、又轉じて、白きことを形容する詞ともなれり○衣ほすてふ　ほすは着る用意に櫃から取出して乾すなり、てふは「ト云ふ」の略詞○天の香具山　大和國十市郡にありて皇居藤原宮に近し、

この歌、新古今集夏の部に題しらずとあり、宮中より見渡したる實景を詠み給ひしなるべし、萬葉集第一に藤原宮御宇天皇御製歌「春過ぎて夏きたるらし、白妙の、衣ほしたり天の香具山とあり、

○一首の意　いつしか春も過ぎて、今年もはや夏が來たらしい、天の香具山に夏の用意にと、白妙の衣をほして居るといふ事であればとなりては月日のはやくうつりゆくにおどろかせ給ひてならん、

小野小町

其出る所の本末を詳にせず、或は謂ふ參議小野篁の孫なりと、父を良貞と云ひ出羽守なり絶世の容色ありて和歌に長ず、紀貫之大に其歌を愛し、數多く自撰の古今和歌集に採り、序文にていたく其歌を賞揚したり、

花の色はうつりにけりないたづらに
　わが身世にふるながめせしまに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○花の色は　花の色の雨にうつらふを我姿によそへて、こゝには花の如き姿との意○うつりにけりな　うつりはうつらふと同じ事にて、うつり變りゆき、すなはち色の褪せたるをいふ、けりなのけりは、うつりにゝうけ、なは感嘆の詞なり○いたづらに　俗にむだにといふに當る、こゝにては爲す事もなくうか〳〵としてといふ意を含む○わが身よにふる　世の中に年を經るの意、このふるは花の色を褪する雨の緣をかけていへるなり○ながめせし間に　うつとりとしてながめて居る間にの意、前句のふるをうけ、眺めを長雨とかけて、句を働かしたる也、

この歌、古今集春下に「題しらず」とあり、

○一首の意　何を一つの思ひ出もなく、むだに年の寄るを歎きて、うか〳〵として居るうちに花のやうであつた我姿も、うつろひ衰へたぞなあと歎きたるなり、

伊勢

伊勢守藤原繼蔭の女なり、仁和年中七條の后に仕へたりしかば、父の官名によりて伊勢といへり後宇多天皇の御寵愛をうけ寛平の末年行明親王を生み奉り、伊勢の御息所とも、また伊勢の御とも稱せらる、和歌に巧にして、三十六歌仙の一に加はる、

なには潟みじかき蘆のふしの間も
　逢はでこのよをすぐしてよとや

○なには潟　攝津國難波の海なり、潟とは海の遠淺の所を云ふ○みじかき蘆の　蘆は草の名にて俗に「よし」といふ、このみじかきは蘆のたけにあらず、次句の節の間をさす、前の句とゝもに次句の序なり○ふしの間も　いさゝかの間もといふ意、蘆のふしの短きにかけたる也○わは

で此世を　ではずしての約りたる詞にて、逢はずに此世の中をといふ意○すぐしてよとや　すぐしては俗にいふ「すぐして」とやはと言ふ事であるかといふに同じ、

この歌、新古今集戀の一に「題しらず」とあり、

○一首の意　難波潟に生ふる蘆のふしの如き短き間も、逢はずに過ぐせといふ事か、そはなかなかに堪へがたき事よとなり、

光孝天皇

御諱は時康、第五十八代の帝にて、仁明天皇第三の皇子、御母は贈皇太后藤原澤子也、天長七年東六條小松殿に御降誕あり、文德、清和、陽成の三帝に歷事し給ひ、階一品に至り式部卿に任ぜらる、陽成天皇御遜位に當り、攝政藤原基經等迎へ奉り、元慶八年二月御位に即かせ給ひ、御在位僅に三年にして崩ぜらる壽五十八、

君がため春の野に出て若菜摘む
我ころも手に雪はふりつゝ

○君がため　君に贈らんが爲にの意、君といふ字は、おのれより上の人をさしていふ詞なれど親しく思ふあまりには、おのれより身分の下りたる人に向ひても君といへり○春の野に出て、若菜は春初めて萌え出づる野菜、正月七日野に出で、之を摘み歸り、人にも贈り、自らも食ひて祝ふこと昔よりの習なり○我衣手に　我袖にの意○雪はふりつゝ　雪は降りつゝの意にて、餘情を味はせて結びたるなり、

この歌、古今集卷上に「仁和のみかどの、みこにおはしましける時、人に若菜たまひける御歌」とあり、

○一首の意　君のもとに贈らうとて、春の野邊

に若菜を摘みに出たれば、折ふし我袖に雪が降りかゝつて、いと難儀して摘みたる若菜ゆゑ、その心して賞翫したまへとなり、

元良親王

陽成天皇第一の皇子　御母は主殿守藤原遠長の女なり、和歌を善くし好色の名あり、三品兵部卿となり、天慶六年七月、御年五十四にて薨せらる。

わびぬれば今はたおなじ難波なる
　みをつくしても逢はむとぞ思ふ

○わびぬれば　思ひ詫びて居ればの意、戀人に逢はれぬやうになりしを歎ぎての餘りなり○今はた同じ　はたは副詞にして「やはり」といふに同じ○難波なる　なるはにあるの約りたる詞○みをつくしても　身を盡し即ち身體をなきものにしてもの意　この句は前句をうけて、難波なる澪標といふにいひかけたる也○逢はむとぞ思ふ　はんは「はう」に同じく、そは語勢を強くする詞なり、

この歌、後撰集戀五に「事いで來て後に、京極の御息所につかはしける」とあり、又拾遺集には「題しらず」として出づ、

○一首の意　密事の顯はれたるが爲に、逢はれぬやうになりて、かく歎きわび居る程ならば、生きて居る甲斐もなく、同じうき事ならば、此上は寧そ身をなきものにしても逢はむとなり、

家政學大要講義（つゞき）

磯部武者五郎

（七）預金の種類

金錢を蓄貯するには預金と保險の二種あり、但し

保險は通常の貯蓄としては少し趣を異にせり、今預金につき其の種類を擧くれば

- 預金
  - 郵便局預金
    - 郵便切手（切手臺紙へ五厘一錢二錢の切手を貼りて預金とす）
    - 貯金通帳（一人十錢以上預くることを得一度に五十圓以上を預くることを得ず）
  - 銀行預金
    - 諸貯預金（一人一錢以上何程にても預くることを得）
    - 定期預金（一定の金額を六ヶ月以上預くるものとす）
    - 當座預金（期限を定めず殘餘の金額を何時にても預くることを得）

（八）保險の種類

保險は貯蓄の一種にして契約に依りて成立つものなり、

- 保險
  - 火災保險
    - 家屋建物の保險（此の二つは萬一の用意にして純然たる貯蓄にはあらず）
    - 財產物品の保險
  - 生命保險（此四つは强制貯蓄といふべき者にして契約の金額は財產の一部と爲すことを得）
    - 終身保險
    - 養老保險
    - 敎育保險
    - 結婚保險
  - 海上保險（船舶物品海員の保險にして業務上萬一の用意とするものなり）

（九）貸付金之種類

貸付金は確實のものなれば財產の一部として算ふべし若不確實なれば、危險のものといふべし、

- 貸付金
  - 信用貸付金（信用ある人に貸付くるならば確實なるべし）
  - 擔保貸付金（擔保品即抵當品を押へて貸付を爲せば確實にして貸付金は財產の一部とすることを得）
  - 留質貸付金（質物を留め置きて貸付くることにて返却のなきときに質物を流すなり故に留め置く質物は貸付金の倍額以上の價あるものたるべし）

（十）物品の種類

物品の種類を大別すれば左の如し、

- 物品
  - 日用品（日用品は外見あしくとも丈夫なる品を撰ぶべし）
  - 來客用品（來客用品は價高くともなるべく外見あしからざるものを撰ぶべし）
  - 贈與品（贈る者の身分と受くるものゝ身分とに應して適當の品にて外見よき者を撰ぶべし）
  - 裝飾用品（價は高くとも外見よきものを撰ぶべし）
  - 娛樂用品（人に依りて異るべけれどもなるべく日用品來客用品贈與品を辨じて金錢に餘裕あらば求むべし）

物品を購求するにつきての心得三條あり

一、現金にて購求すること、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二、必要の生じて後に購求すること
三、時の相場を心得て購求すること

（十一）財産の種類

財産とは土地家屋よりあらゆる室内の器具迄をいふなり、

- 財産
  - 法律上の區別
    - 不動産（土地家屋等土地に固着せるもの）
    - 動　産（以上の類にあらざるもの）
  - 家政學上の區別
    - 基本財産（宅地、田圃、家屋、山林、船舶、牛馬、公債證書、株券、預金證券、器械、商業品の類、）
    - 使用財産（家屋の造作、建具、圖書掛物日用道具、衣服、衣服に關する物品とす）

使用財産を購入するの心得は（十）に述ぶる如し、基本財産、使用財産共に財産目録を作りて悉く記入し置き、一々其の増減を記すこと肝要なり、

（つゞく）



子女の教養（つゞき）

島津公爵家家庭教師　ミスバーワート談

最も愼なければ成りませぬ事は、大人が小供の前で種々無駄な雜談をすることで御座います、一體小供と云ふものは、一寸見た所では、一向物事に注意しないやうで御座いますが、實際は却々爾うで無い、大人が想像したよりも多く物事に注意

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するもので御座いますから、決して無益な談話や他人の惡口なんぞを云つては成りませぬ、何時でも小供の居るところでは教育上に關した話しか、或は大人豪傑の實歷談其他笑談のやうなものでも注意して成る丈け惡るいやうな事は口から外へ出さんやうにせんければ成りませぬ。

小供が誤つて負傷なんぞをした時には、成る丈け其傷を深く無いやうに云つて置かないといけません。其他風邪を引いたとか又は、病氣なんぞをした時分にも、決して其病氣が重いやうな事を小供の前で云つては、いけませぬ。固より陰では充分心配して注意して遣らんければ成りませぬが、小供の前では成る丈け輕いやうに氣に留めないやうに云つて置くのが宜しう御座います。

小供の内から、人を哀むとか同情を表すると云ふ樣な心懸けを養ふ事が肝要で御座います、例之ば小供が每日食事を致す時にでも、この食物は旨く無いとか、嫌だとか云ふやうな事を申す場合には世間の困難な人の話なんぞをして、世の中には、御飯も食べる事が出來ないで、饑えに泣て居る人が澤山ある、而う云ふ人に此の中の一つでも與へたなら、どんなに悅ぶであらうか、夫れを卿等は每日〳〵飽く程食べて居るから而う云ふ我儘な事を云ふが、困難な人の身の上に思ひ比べて見ないといかんと云ふ樣な事を、懇々と說き聞かせて小供の我儘な心を制し、且つ世の艱義なものに同情を寄せる心を養はんと、成人の後大に後悔するやうな場合が往々起ります。

若し小供の朋友なんぞの内に、病氣にでも罹つた人があつたら、其朋友を慰籍する爲めに、物品を贈ると云ふ樣な事を諄く敎へんといけません又其贈るに就ても、眞から、其病友を憐むの情を以て

何か其人の平素好むところのものを撰んで贈ると云ふ樣な事を其小供自身に腦を使つて撰擇させると云ふ樣な仕方は大變に宜しからずと思ひます。又小供が、他から物品を贈られた時分には、眞から悅んで其れを受けると云ふ樣な習慣を付けないといけません譬ひ些細な物でも、充分歡喜の色を顯はして、而うして其御禮狀のやうなものは、自身認めて贈るやうにせんといけません。歐羅巴の皇室では、皇子方にまで、而う云ふ事をお敎へに成つてお置に成りまして、假ひ、どんな下等な人民からでも、物を贈られると、皇子が皆御自身に其禮狀を書てお遣りに成るやうな習慣に成つて居ります。

夫れから、小供が、虫とか動物とか云ふやうな活物を酷い目に合せるなどゝ云ふ事の無いやうに敎へて行かんといけません。小さい時から、動物なんぞを慘酷な取扱なんぞを爲慣けると、大變に其小供の性質を惡るくして仕舞ひます。

小供を育てるに缺くべからざる事は、家庭が何時も愉快を以て滿たされて居る事で御座います。片時でも不愉快の內に小供を置くと云ふ事は、精神の發達の上に於ても、身體の發育の上に於ても大害を及ぼします。夫れから小供に自由を與へると云ふ事は、必要で御坐います。同時に、小供が何か過失があつた時にも、劇く罰すると云ふ事は、却つて宜しく無い事であると思ひます。私は、スペンサーの敎育法を尊重して居りますが、其說に小供が惡るい事をしても決して罰するには及ばない、小供と云ふものは、存外名譽心の强いものであるから、叱言を云はずに、卿は、好い兒であるから、再び斯う云ふ惡るい事は爲なかろうと、云ふ樣に、此方から信用をして總ての事を仕向ける

と、小供は其信ずると云はれた一言に對して、惡るい事をしないやうになると云はれてあります。

小供が朋友同士で遊ぶ時に、若しも止むを得ずして、惡るい友達と一所に遊ばせなければ成らぬやうな場合があつた時には、卿は斯う云ふ惡るい小供と一所に遊んで居るけれ共、卿丈けは賢い小供であるから、決して他の人達の惡るい事を眞似るやうな事は無からうと信ずると云ふやうな、風に小供に言ひ聞かしておけば、小供は決して、惡友に感化されるやうな事は無い。尤もこれは、止むを得ず惡友と遊ばせなければ成らないと云ふ場合のあつた時丈けの注意であつて、固より出來得る限りは、惡しき小供と云ふ事を知つたら、遊ばせぬやうな手段を講ずる事は勿論必要で御座います

夫れから、小供から何か質問を受けた時に、其事柄が、小供の前で充分説明をする事の出來ないやうな事がある場合には、態と他の事を云つて聞かせる事があります。それは甚だ善くない事で、恰ど親が小供に虚言を敎へるやうなものであるから此事は今は未だ卿に説いて聞かせても分らんから他日大きく成つてから、聞かして遣ると云ふやうに實意を以て、言つて聞かせないといけません。其他昔話のやうなものでも、虚言話をしないで、矢張り實地にあつた事を、年に依つて理解の行くやうに平易に話して聞かせるが宜しい。

小供を敎育するには、約束を違へると云ふ事はいかん。譬ひ些細な事でも、約束をした以上は、例之ば、其約束を履行するに就て、損害を蒙るやうな事があつたにもせよ、一反約した事は、必ず其通りにしないといけません。小さい時に、約を重んずる事は能く敎へて置かんと、大人に成つても矢張り夫れが習慣に成つて、社界の信用を殞すや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うな事に成りますから、能く〳〵注意して育てないといけません。

夫れから、人を愛すると云ふ事を敎へんといけません。又秘密を守ると云ふ事を敎へるのは肝要で御座います。例之ば、或る小供から、これは、秘密な事であるからと云つて、話された塲合に、其れを他の小供に又話すと云ふやうな事をしたら、忽ち前の小供から信用を失つて、再び其小供には大事を明さぬやうに成ります。斯う云ふ事も小さい時から、能く注意して諭へて置かんと、矢張り大人に成つて社會に立つて仕事をする時にも妨たげに成るのであるから、これが敎育の任に當つた人は、充分誡めてやらんといけません。

小供には、悲哀と云ふ事を敎へてはいかん。譬ひ自分には、如何に悲しみがある塲合でも、小供の前では、何時も變らず愉快に在る様に見せる事が肝要で御座います、これは矢張り、先に申上げた精神の上にも身體の上にも、尠なからず影響を及すからで御座います。（完）

挿花の話

小畑いく子

櫻　山吹　粉團花

草といはず木といはず、凡ての植物が自ら其天然の季候を花なり葉なりに現して居ります、勿論其氣候を受けて生ずるものであるからとは申しますもの丶實に爭はれない時期の代表であります、夫故これを瓶に挿して樂しむものはよく〳〵注意を要するのであります、まづ苦熱白扇を揺すに煩じともいふべき孟夏には、涼風の通ふ水邊の杜若　川骨或は蓮などをはじめ、多く水草の花期

であります、草露袂を沾す秋に至りましては萩、桔梗　女郎花をはじめ總ての花が皆何となく物淋しき姿を持て居ります、たま〳〵木芙蓉、菊などの如き見事な花にして猶、牡丹、芍藥の陽艶をもちませぬ、そこで氣骨稜々たる梅は其花期が年の前後にまたがりて、所謂霜雪の內に凜然一笑をもらすといふ態度の自ら備りて居りまして又、桃李花披　春酣にして質に陽春の色を現して居るものは、桃、櫻でありますから、其枝ぶりなども長閑に、のび〳〵として居ります、前回に梅、桃の對照をして置きましたが、櫻はまた彼兩者と違ふ處があります、そこで先つ、櫻を挿んとする時は其立枝を見ても分明でありますが、とかく櫻は横に横にと手を擴げた樣に枝が出て居りますから、其心をせねばなりませぬ。

凡て擴げた形の花を挿すときは常に側面を現して細くやさしく、伸〳〵した風に見ゆる樣につとむるのであります、即ち、桃の如き梅の如き山茶の如き。草では桔梗、苅萱、女郎花の如き、皆其例であります、　櫻に至りてはそれらの草木とは、前申た通り、季節の關係、品質の差より致して決して同じ樣に出來ませぬ、可成的枝を廣く挿さねばなりませぬ、さればとて扇を披た如くでは趣味がありませぬ、枝の長短　前後の配置に意を用ふる事は、いづれの花も同樣ではありますが、殊に櫻は、枝其ものが單に左右に廣くて前後に枝が出ませぬから特に注意を致さねばなりませぬ。

殊に櫻は花中の花で、即ち我國では只單に花とのみさして云ふ時は櫻に限ると申す程でありますから、先づ花中の王であります、それ故梅の隱逸なるが如く、桃の艶麗なるが如くにのみ變せず、其帝王たるの品位を保たしめ、所謂細事に關せざる

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「大やうなる」處を充分見するやうに致さねばなりませぬ、又此櫻は散りやすき花でありますから、事忌して或は挿終りたる後豫め一輪の花を水上に浮べ置くなどいふ事を申す人もありますが、それは余りに俗説で、所謂散り初むるといへば心地がよくないが散り積るといふ時は同じ事でも耳さはりがないなどとの取るに足らざるいひならひでありますから、それは用ひませぬ形式は本花は勿論「低ながし」などには至極適して居ります。

櫻

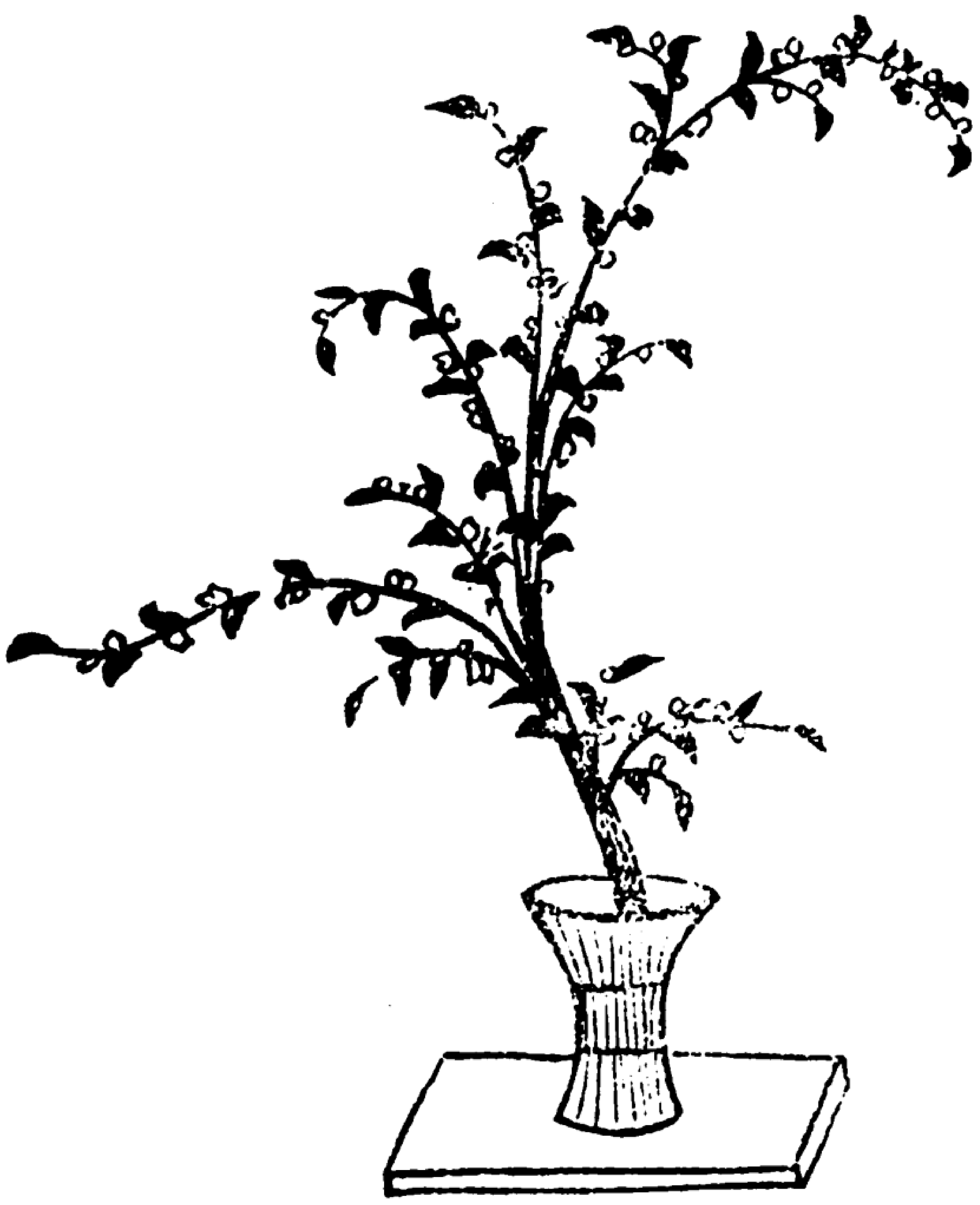
七本



さて山吹に至りましては所謂、行く春にしがらみかくる岸の山吹、など丶歌にもよく申てあるやうに水邊に頭を垂れて何となく落花の水に流る丶を惜むかの如く見ゆる面影がありますそこで、かやうな花を挿すには、又上に〳〵と立ち伸びました枝をさすやうなのとは大に趣がちがひます先づ枝しらべをして花の長けを定め鋏を用る時に、普通の草物、木物などよりは余程腰を高くしなければなりませぬから、其心得にて花の長短を定めねばなりませぬ又「二」の枝など

は少しも矯めを用ぬやうに致しませぬと枝先きが挿上るまでに漸々と下ります「一」の枝も腰を低く矯め過ぐれば頭重く、後に倒れて立ち兼るものであります、元來莖細くて先重きものでありますから其根のとめ難き事は一通りではありませぬから枝先きよりはまづ「根」に注意をして矯めかへしを充分して置くのと「根」の切り合せに餘程心を用ひる必要があるのであります。然して姿勢に依つて見惡い者が出來ますから、枝の配置に最も注意せねばなりませぬのは、凡て

山吹　九本



垂れ物は枝先きの垂るが本性であるからと申ましてそればかりでは勢は勿論、形をなす事が出來ませぬ、そこで先づ「一」の尖端が垂れますならば「一の分れ」を花はなくとも勢のよいのを強く上にむけて使ひ「二」なれば「二の奥」に強き枝を用ひましていはゞ垂れたる枝を引揚るやうな樣子を見するやう致しませぬければなりませぬ、又「心」の枝には是非確な強いのを用ひませぬと總体の上に及します。

粉團花一名を雪ながし、とも申しますが、大體の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

形式に於ては山吹と少しも變りはありませぬが只其莖が山吹の方は細き上に、するく\として居りますため、前に申しました通り、ため樣に困難があります、粉團花の方は枝が硬く花が輕き爲め其邊は大に山吹よりはよろしいが、また此木には矯めのきき難いといふ困難があります、然しそれも急に矯んとするから折れ又は矯めもどる等の事もありますが、徐に矯めますと案外樂に矯まるものであります、特に此木には花時に若き芽が伸び〳〵と生じますが、特に是を



「心」などに用ひますれば木の性質を見するのみならず、雪をあざむく花の中より青き葉を見せて大に趣があるものであります、さて此二種とも頗る水の下り易きものでありますから水揚法の必要があります、即ち次に述べて置きます

山吹は切り口をよく打ち碎きまして、一寸程を凡そ十分間ほど酢にて煮て後に水につけ置きて挿します。

粉團花はきり口をあつ灰或は炭火にて、よく〳〵いぶして、水に移し置きて用ひます。

だいどころ

石井泰二郎

魚酢漬拵やう

何魚にても酢漬になさんには、酢を煎じる時に其鍋の中に鹽少しを入れて煎じて、直になべを下して冷しおきて、魚を切たるを漬るのです。

異製でんがく拵やう

豆腐をなみの田樂の如く切て、串にさして燒いて芥子を水にてとかしたのを、うすくぬりつけて、ざつと燒て、串よりぬき取て、椀にもり付て、上より葛溜りをかけて出すのです、葛溜とはだしの汁へ醬油みりん食鹽を入れまして加減をした所へ葛粉を水でといたのを、汁の能く煮立つた上からかきまはしながら、片手に葛粉の器を持て夫よりむらなく入れるのです。

蕗の葉和物拵やう

ふきの若葉を、水にて洗ひ、湯煮をよくして能くしぼりまして、切方して、胡麻味噌にて他の獨活などの湯煮したのを入れましてあへて出します。

味噌汁の一種拵方

味噌汁をたてます前にまづ、味噌を摺盆ですりまして、馬尾篩でこしまして、夫へ玉子を摺ませまして、煮ます時に豆腐のからを少し油にて煎ておきましたのを、其汁にいれます。

我家の笑顔は眞に秀美なり、互に和合するは眞に愉快なり、純潔なる愛情の充滿する家は、四邊到る處歡樂ならざるはなし。　クーパー



雜錄

當世 一言芳談

幸田露伴

◎かゝるべき子も持たず、賴もしき親族も無き身の是非無く、人に使はれて長く歲月を過したる女のおのれに對つて申しける。わがみは人の出入りの少からぬ家に長々しき月日を經ける間、それぞれの人のさま〴〵に變り行けるを見おぼえて、今はおのづから若き男女などを見るごとに、我が心の中にて私に此の人の行末は好かるべきや惡しかるべきやなどゝ思ふに至れり、君は何とおぼしたまへるぞや。彼の松山といふ若き人は、いつも出入りするたびに他人の脫ぎ置ける下駄などを或は蹴散し或は踏み亂しなどするほどの無作法なる人なれど、少しく懷中の豐なる時は、直に物物しく光り照る衣服を引纏ひて、さも鷹揚に振舞ふなり。あのやうなる人、若し富まば、妻子を家の奥に棄て置きて、おのれは絕えず路の花を問ひ、よその柳にあくがれて日を送るべく、若し貧しくば幾度と無く舊き妻を去りては新しき妻を迎へ、舊き友を賣りては新に友を求むべし。又梅山といふ人は、おのれの下駄をばおのれ自ら手を下して沓脫場の一方に寄せ置き、かりそめにも人に踏まれなどせぬやうになすを常とし、衣服は取り出で

て可否を云ふべきところも無きほどあるを着るなり。あのやうなる人は、甚しき立身もせぬ代り落魂れて袖に涙のかゝるやうなる目にもあはぬなるべく、少し吝嗇のところはあれど、人に不義理などはせぬ人なるべし。また櫻山といふ人は、けばけばしき色の鼻緒など付けたる下駄の左まで價高からぬを取り替へ引き替へて穿き、しかも其下駄新しき時は、やゝ叮嚀に行儀能く揃へて脫ぎ置けど、少し古びの付きたる頃には、埒も無く脫ぎ棄て置くなり。此人心の中に毒は無けれども、世にいふ浮氣者にて、かゝる人の妻となるものこそ口惜しき目にはあふなれ、たゞ此人の取りどころには、負けぬ氣聊か强ければ、惡しき友にだに狎れずば、行末は次第に宜かるべし。栗山といふ人を見たまへ、おのれの錢をもて買ひしこととありや無しや、いつも彼の人の下駄は古びに古びて、世諺にいふ上潮に浮きて流れしものにも似たり、前壺の緒を紙撚もて自ら繕ひたるさま拙く可笑しく、横鼻緒の斷れたるを、礫を塡めて僅に保たしめたるさま、いよ〳〵拙く愈々をかしく、彼の人の下駄を見れば時々失笑する事のあるほどなるが、それには似ず書物なんどをば買ふ事は多き樣子なり、それのみならず言葉少けれど人に高ぶるにはあらず、起居田舍びたれば物に斟酌あり、彼の人は必らず業成りて名を成し、富みて古を忘れぬ人なるべし。君は如何にや思したまふ。すべて我が履物にて人を觀定むるは、事甚だ鄙しけれど、却つて占卜なんどよりは能く中るなり。

◎或人申しける。むかしの女は、領元の見よげならんことを欲して、領足を拔き搖へなどしけるが、今の女はもみあげの見よげならん事を欲して細工はすれど領足には心を用ゐぬやうなり、人皆

前の高にのみ心を付けて後を遺るゝとおばし、世は進みたりといへど、猿のやうなる人のみ多くなれる事よ。

◎ある身から賤しくして心たくましき女の申しける。滊車に乘るに、座るべき席をさへ見出し得ぬほど人多き時は、女は殊さら困じ果つるなり、さる時は女の同伴者も無き若き男を見かけて、聊か笑を作りて、さて困じたる面色しながら近づくに、おほかたは其男、我がために席を讓りくるゝものなり。されど我が衣見苦しく我が髮容みだれて我ながら淺ましなんと思ふ折節は、或は人の我がために席を讓らんともせで知らぬ顔つくること無きにあらず。こゝをもておのれは、波風强き世を經るに、自ら恃むべきものを有つこと少き女の、如何に髮容をつくろひ、衣裳を飾らざるべき歟を悟り知る。特に身の老いゆくについて。一トしは身だしなみの忽にすべきものならぬをおぼゆることおほし。何とて世の賢き人たちのこゝに心を付くること疎きや、いといぶかし。

◎ある小賢しき女の申しける。手の小指の爪を長く伸ばしたる男は、人と相爭ひても打ちつ打たれつする迄は得爭はぬものなり。小指の緊しく縮まらねば手の力は無きものなれば、小指の爪を長々と伸ばし置けるほどの者は、人と摑み合ひなどする時におのが、小指の爪の長きが如何ばかりおのが爲に不利を與ふべきかといふことをもかつて覺えねばかりの弱き氣性の男なるべきにや。針を運ばせて物を縫ふは、左まで力もいらぬことなれど、ある時小指を傷けてより、大に小指の日頃人知れず縫ひ物するためにも働き居るものなる事を悟り、そのゝち不圖心づきて小指の爪の長き人の氣性を推測るに十に一つも過つ事無し。

雜錄

蜃氣樓の話

橘村生

美なる哉碧空錦繡の活畫圖、奇なるかな瀛海絶妙の大幻景。『日初出時、城門樓櫓宮殿、行人出入、日轉高則滅、但可ニ眼見一無有實、名健闥婆城』。余が今說かむとするところの談話は、此健闥婆城の話で、是れ則ち海市、世に所謂蜃氣樓のヿである。

で此の蜃氣樓とは如何なるものでありますか、聊か故人が遺された此種の記錄に就き、春の夕の物語、一場の閑話を試みて、與に相樂しまうとするわが一片の風流心。

偖此蜃氣樓でありまするが、此れは、獨り我邦にのみ現れるものでは無い、隣國の支那は勿論、遠き熱帶地方の沙漠、或は靜穩なる海上の航船等に於て屢々諸人の經驗する所でありまする、從てこれを記述したものゝ本なども折々散見するけれど、然し一般に蜃氣樓とは稱けて居らぬ。土地の異なるに從つて、夫れ〳〵相異なる所の現象と名稱とを持つて居りまする、が外國のヿは暫らく之れを他日に期し、今は唯我邦に於ける迷景のヿばかりて述べて置くので、先づ其第一は我隣邦の支那です、支那では秦の時の道士、某日海上を望んで、蓬萊宮が見えると言つたとやら、而て其最有名な所は登、南海あたりでも屢々之を見るヿがある、蘇軾といふ人が、嘗て海神廣德王の廟に祈り、曉晨、此幻景に對し、欣喜で歌つて曰く

東方雲海空復空。群山出沒空明中。蕩搖浮出生ニ萬象一。豈有ニ貝闕珠蕊宮一。心之所レ見皆幻影。敢以ニ耳目一煩ニ神工一。歲寒氷冷天地閉。爲レ我起蟄鞭ニ魚龍一。重樓翠阜出ニ霜曉一。異事驚却有ニ歲翁一。人間所レ得容ニ力取一。世外無レ物誰爲レ雄。信我人厄非ニ天窮一。潮陽太守南遷歸。喜見石廩推ニ祝融一。自言正

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

直動ニ山鬼一。豈知造物哀ニ龍鐘一。信眉一笑豈易レ得。神之報レ汝亦已豊。斜陽萬里孤島沒。但見碧海磨ニ青銅一。新詩綺語亦安用。　相與變滅隨ニ東風一。

次は熱帶地方の沙漠に於て、太陽直下する眞晝中、駱駝の鞍に跨つて、熱沙を渡る商隊が、渴を想ふの時に於て、忽ち見る青々樹林の影、これだ。然し知り給へ、此の熱帶地方に在ては、地上に低く俯瞰して視るけれど、溫帶寒帶の域にありては、縹緲たる天空の高きに仰視することを、左に其理由を畧記せん乎。

一幻景の現るゝは光線の屈折及び全反射の理による。

二沙漠等にありては地面熱せらるゝ時、地上に接近する空氣膨張し上層の空氣より反て密度を減ずるを以て樹木等より下方に發射する光線は上弦月形に屈折して其方向を變じ遂に全反射をなして上方に向ふが故に其光線人の眼目に入りたる時(猶平易に云へば樹木の影は斜に地に落ち再び上に反射したるものが目に入りたる時人は直線にこれを認む)

三海上にありては海水蒸發の爲め空氣の下層は上層より密度を增加し下弦(月)形に屈折し遂に全反射をなして人目に入る。

我邦の內でも、越中の魚津は、毎年の出現を以て有名なる土地で『笈埃隨筆』と云ふ書に

我國北海に多し、中には越中魚津浦を最上とす、三四月の間、天氣長閑に少しも風なき時海面に現す、或は二時三時、又は半日一日も見ゆ、風少しにても吹く時は忽ち消ゆるなり。海邊の人、立つべき日を知りて出で見る、土人は狐の森と云ふ。

と其妄誕憫むべし、されど其事實に至りては異な

り、次に橘南谿が記する所に至りては、能く其妙を描いて取るべきもの多し、即ち曰く。

初は幕を引くが如くなりしが、暫く見る間に城郭の如く、矢倉高樓やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫くする間に松原の如く、繪に畫ける天の橋立などのやうにみえしが、夕暮に及び風少し出たれば漸々消失し跡方もなくなりしなり。

と更に其發現の理由を説いて曰く。

余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃氣樓は大洋にある事にて陸地近き入海にはなきとのやうに心得しが魚津の地理を見るに左にあらず、魚津は北海に臨める地なるに向ふの方七八里と思ふ程に能登の山を屏風の如くに見る、魚津の海は東よりの入海なり、海中に登る蜃氣向ふの山に映じて色々の形を觀る也、向ふに當なく數千里見晴したる大海にては陽氣のはるといへども向ふの當なければ映することなくして人の目にはみえ難しに覺ゆ。

と科學が未だ進歩しなかつた昔日、南谿は既にこの先見があつた、實に偉とするに足ります。夫でこの蜃氣樓でありますが、これを今一言で盡さうならば、『水蒸氣と太陽光線と交渉せる一現象』にすぎないのです、即ち『水蒸氣の現象』でいゝのです、が更に之を詳説すると我邦に於ては、水蒸氣の多量なのと、岬灣の出入の多々なのと、高山の海岸を圍繞せる國土であるのとが種々交渉した結果、この趣味ある一見不思議の幻象を見まするので、其證據には越中魚津浦の迷景であるが、これは先づ富山の所在を見ると、富山灣は山岳を以て環繞せられ、特に東南の一角には萬古の氷雪を堆積する立山の連峰、劍嶽の大山系を背負つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登錄商標

赤十字石鹸

●富士印は最上の品にして洋風バイオレット、ムスク入
貴顯貴孃の御使用に適し体裁最も優美なり

●博愛印は麝香入リスリン煉にして馥郁たる香氣を保ち
体裁は桐箱にして高尚なり

富士印
博愛印
須磨印
●各壹號より三號迄

●須磨印は容積大にして品質は尤も堅
御使用上最經濟品なり

●賣捌内地は勿論
支那朝鮮にあり

製造元 東京本所區
柳嶋梅森町 井村整興社
電話浪花五十參番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

一女子部（普通科）五拾名 卒業者は東京府に於ては甲種検定に出願し得べく授業は毎日午後三時より始む本人の希望に依り一科若くは數科を修むることを得

右募集ス志願者ハ四月十日迄ニ願書（無試驗入學の資格あるものは當該官衙若くは學校の證明を要す）ヲ差出スベシ規則入用者ハ郵券貳錢ヲ送レ

四月 東京牛ケ淵 日本體育會體操學校

女子計算員募集

廿五歳以上 卅五歳以下 貳拾名

卒業期四ケ月卒業後會社商店ヘ紹介保證ス

東京市神田區裏猿樂町四番地

私立 女子計算員養成所

◎年中半ゑり帯揚類

半ゑりは御婦人様方の最も御風氣を保持す品なれば第一地色又は意匠に御注意肝要に存上候

夏は中形ゆかた地品

粋て人から

◎御まげ入（ゆきとも形）

御小うり 芝之櫻田本郷町 久保町 芝之公園勸工場 ゑりきん

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御記入被下度候

若松賤子女史遺稿

櫻井彥一郎君編著　武内桂舟君意匠畫



三宅花圃女史序　片川殘花君序　木村熊二君序
島崎藤村君序　湯谷紫苑君序　巖本善治君跋
肖像（寫眞版）中島湘煙女史追懷書畫（寫眞版）

若松賤子女史異材を抱いて白玉樓中の人となりしより春風秋雨既に七星霜文界落寞の今日女史を追懷する無き能はず生前の述作今にして編輯せずんば散逸に歸せんことを憂へ。彼『小公子』と共に永く我文學史上の珍たるべきもの收むる所左の如し。

○忘れ形見○離縁○せーら、くるー物語○我宿の花○波のまにく○いなつく、おーでん物語○入學前○ふろひ兒○林のぬし○鼻の鰭○邪推○榮公の誕生日○淋しき岩○病味と小悴○砂糖の隱所○着物なる木○けんつく跡○黃金機會○ろーれんす○女房演說○お向い離れ○おもひで以上

○新○刊○發○賣　製本既成

（四六判）紙數六百餘頁
洋裝全一冊總クロース
金彩色表裝、製本優美

正價○金○壹○圓　郵便稅拾四錢

若松賤子女史著書

◉小。公。子。

全一冊　正價卅五錢　郵稅八錢

◉英。文。集。

全一冊　正價三拾錢　郵稅四錢

北村透谷君遺稿

星野天知、島崎藤村君　平田禿木、戸川秋骨君　共編

透。谷。全。

上製壹圓卅五錢　郵稅廿錢　同並製壹圓　郵稅拾六錢

明治の異材、透谷君の遺香、文學論、隨筆、戲曲等あり皆以て此の不幸短命なる詩人の高志淸想。

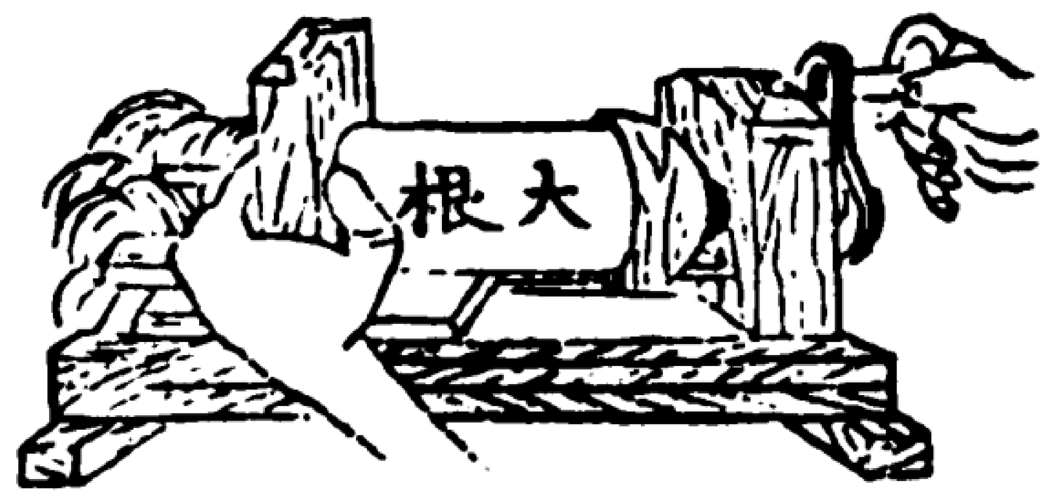
元良博士評論　白澤文學士譯述

小說　愛。と。心。

訂正第四版發賣
正價金參拾五錢
郵稅　四錢

希臘神話中、エロス、サイケの愛とふとい至美なる情話を基として心理的小說に結構したるもの。

發兌元　東京日本橋本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂



◎新發明大有益 輕便御料理用褄切器

●定價金八十錢▲送料拾五錢●輕便手劍卅錢▲送料四錢

本器は男女を問はず小兒と雖も熟練を要せず大根人參胡爪等其大小を論せず二分間を出でずして自から皮を去り見事糸の如く切る事を得る新發明大有益大輕便の器械なれば街々褄を使用する營業者にして爾來本器を使用せば實に斯界の一刷新を見るべし尚官吏商家に拘らず自宅調理の塲合に使用すべき方法を採り輕便手劍の分を製しあれば晩酌御手料理には缺く可からざる發明器なり乞ふ兎に角一個を御求の上御試しを願ふ

●但し切干用ナマス用の味噌汁用の荒切器は同製にして同直段に御座候

◎三浦專賣 輕便野菜早そぎ器

定價金 甲 一圓二十錢 乙 九十錢 送料十五錢

本器は牛蒡人參胡爪甘藷大根等を細く太く巾も廣く狹く其他そぎに困難なる牛蒡の如きも極めて薄くそぎ得る器にして使用法至て輕易なれば小兒にても少しの熟練を要せず負傷等の憂なく一二分間にして極めて見事に山の如く切り得る輕便有益の器なれば御試用の上御賛與あらん事を偏に希上候

◎三浦專賣 輕便鼠器捕

定價金十七錢 送料十錢

此の捕鼠器は在來の者と異なり一度器械に掛りたるのは決して捕へ損ふことなく如何なる老鼠と雖も容易に捕へ得る完全なる器械なれは必ず備へ置くべき必要具たる事は申までもなし兎も角御試用あらん事を希上候

各府縣下に三ヶ所宛の特約發賣店を設く望の方は至急御申込あれ

製造元 三浦商店

京市淺草區松葉町五十
合羽橋際諸器械製造所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

袖珍名著文庫

饗庭篁村先生　芳賀矢一先生
幸田露伴先生　藤岡作太郎先生
關根正直先生　尾崎紅葉先生
校訂

第一編　近松淨瑠璃三種　近松門左衞門作　饗庭篁村氏校訂

第二編　芭蕉翁繪詞傳附句集　蝶夢作　幸田露伴氏校訂

◎煩擾なる人生に絶好の慰安を與ふるものは本書也。實業家も讀め軍人も讀め、官吏、學者、教育者、會社員、神官、僧侶皆讀め。讀んで高尚なる娯樂を取り、以て眞誠の紳士淑女となられよ。

◎詩歌あり、小說あり、戲曲あり、史傳、紀行、隨筆、雜論皆あり、苟も日本文學の精髓を味はんと欲するものは讀め。

◎校訂者は現今第一流の名家也。正確嚴密、正文として責任の十分なる蓋し未曾有の飜刻書也。

◎先づ一本を手にして印刷釘裝の如何に優美にして堅牢なるかを見られよ、以て室内の裝飾となすべく以て旅行の最好伴侶となすべし。

◎本書一たび出づ。獨のレクラム誇るに足らず、英のカッセルまた好敵手を得たるを悦ばん

◎たゞ價の至廉なると驚き賜ふあるのみ

◎**全部百册** 縱五寸横三寸三分（毎月二册發行）洋裝美本●毎篇紙數約二百頁寫眞版又は木版口繪挿入 **正價** 毎篇金廿錢●六册金壹圓拾四錢●十二册金貳圓廿貳錢●廿册金四圓六拾錢●五十册金九圓●百册金拾七圓五拾錢●郵稅一册に付金四錢宛

上製 金文字入クロース一册 **美裝** に付 **金八錢增し**

發兌元 東京神田裏神保町 合資會社 **冨山房**（賣捌所）全國各地の書籍店雜誌店にあり

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御付記被下度候

新刊廣告



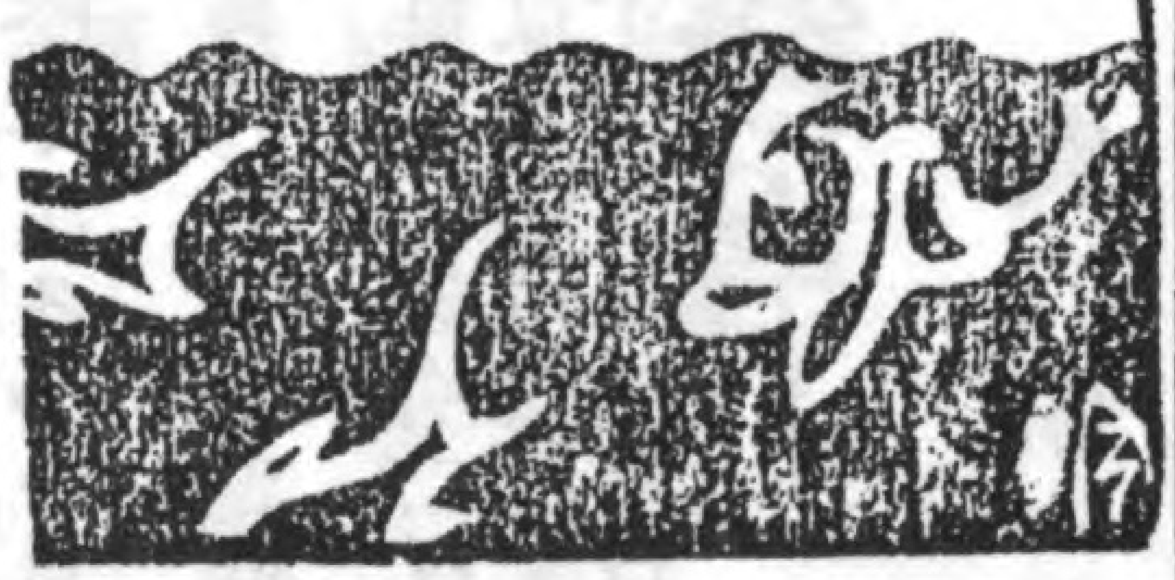
紅葉山人著

小説 芝さかな

桂舟畫 松洲畫

定價五十錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區竹川町二十番地 エックス倶樂部



大賣捌 東京日本橋東仲通 文祿堂 大坂南區鹽町四丁目 誠進堂

劇壇之好珍書

市川團十郎

坪内逍遥君序 森鷗外君序 伊原青々園君著 鏑木清方君畫 落合芳幾君畫

製本寸法縦六寸五分横四寸五分●紙數四百餘頁●總クロス金銀文字模様入頗美本●進物適當品

定價九拾錢 一部 郵税十錢

▲附録▲九代目團洲自作紀行文及俳句和歌▲九代目壯時現時寫眞コロタイプ美術摺●九代目書畫寫眞銅版●初代より九代目歌舞伎十八番九代目家族家庭寫眞數種●九代目演技寫眞百餘●八代目常時の錦繪●●

材料の豐富、趣味の饒多なる如何に著者が苦心經營に力めたるかに至ては蓋し讀者の一驚を喫する處ならん

發兌元 東京々橋區竹川町二十番地 エックス倶樂部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

關藤次郎先生編

家庭衛生

普通臨床 看病法

精圖插入◎正價參拾錢◎郵稅四錢

「篇中目次」（精圖數十入）看護婦の責務◎病室◎病牀◎冷罨法◎吸入法◎（巴布）作り方及應用◎外用藥用法芥子泥◎飲食物の與へ法◎食物と病理◎服藥の與へ法◎老人小兒藥品の杯量◎尺度比較◎皮下注射法◎體溫計測法◎呼吸を計る事◎灌腸洗滌法◎浣腸用法◎て必要なる事柄◎腰湯及（坐浴）◎發泡劑應用法◎御湯法◎人工呼吸一覽表◎止血法◎打撲及手當法◎水蛭使用法◎出血及其止血法◎繃帶及使用法◎按摩法◎手當法◎中毒及其手當法◎産科看護法◎乳母◎外科看護法◎婦人科看護法◎乳母の選擇及乳兒の攝生◎病室の觀察方法◎傳染病の取扱方法◎傳染病看護法◎傳染病看護婦の注意◎其他熱性諸病看護法◎肺結核、麻疹、回歸熱、窒扶斯、間歇熱、肺炎、肋膜炎、腹膜炎、盲腸炎、腦膜炎、癩病、腳氣、貧血、武留篤氏病、腎臓炎、耳下腺炎、破傷風（たゝ）強直症、鵞口瘡、百日咳、喘息、咯血、精神病看護法◎患者使用法◎夜中看護法◎死体取扱方法◎食用品分析表及び消化時間◎水及牛乳試驗法◎牛乳及び人乳分析……◎溫度表

醫學士馬島珪之助先生閱　關藤次郎君著

普通衛生 病療新書

附 處方調劑術　正價六十錢郵稅六錢

本書は普通一般の疾病を網羅し一々詳細叮寧に治療の便法及處方を指示せしもの讀者一度之を手にせば醫治の法忽ちにして已れが掌中にあるを得て山間僻邑醫なきの地と雖も常に醫士を招聘し居るの思ひある可し加之醫士は之に依て治療の捷徑を得るの便あり故に學校教員會社工業家旅行者航海者産婆看護婦及家庭の衛生等に取りては治療並救上日常庶人の欠くべからざる効力顯著の寶典也

產科婦人科楠田院長 楠田謙藏先生閱並序

第七版 普通妊娠論

（ふつうにんしんろん）

附り 妊婦の攝生

本書は久しく産科婦人科に從事して經驗に富める專門醫渡邊先生の著にして生殖器の解剖、生理、衛生を始めとし生殖に影響する全身の疾病、婚姻並婚姻後の注意妊娠並妊娠後の攝生に至る迄廿三章、百廿項を設け悉く網羅して平易簡明に説述し如之精巧なる石版畫數十葉挿入し振假名を附せられたれば苟も自己の注意し系統強健の子孫を得んと欲する諸君は男女を問はず必ず一讀せざる可らざるの好著述なりを蕃殖し一たび此書を繙かば多病なりし夫婦壯健となり不和なりし間熟し不妊なりし婦人は可憐の兒を擧ぐることを得ん大方の諸君乞ふ世にありふれたる此種の著述と同一視するこ となく一讀其不幸を癒せらる可し

產科婦人科專門醫渡邊光次先生著

續編 小兒養育法

一名「兒を設くる法」

全二冊紙數二百五十頁石版精圖四十個入
ぱけつと入 正價二冊金六十錢 郵稅六錢
密封小包送八錢 百里外十六錢

發兌元 神田區今川橋通鍛冶町四番地 （電話本局九四九）

誠之堂書店

●賣捌全國有名書店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

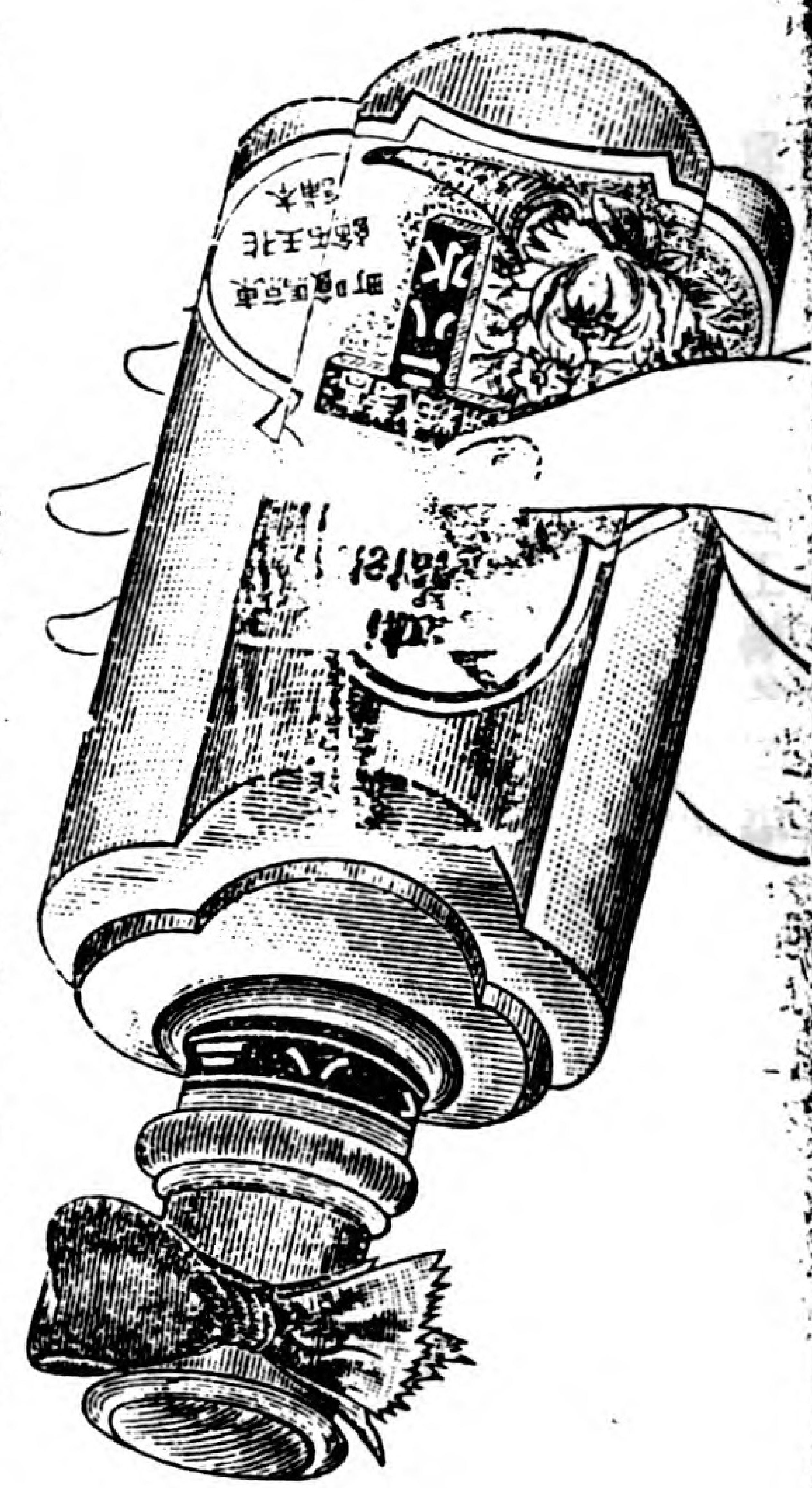
一二八水は肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしろい下に用ゐて尤もよし

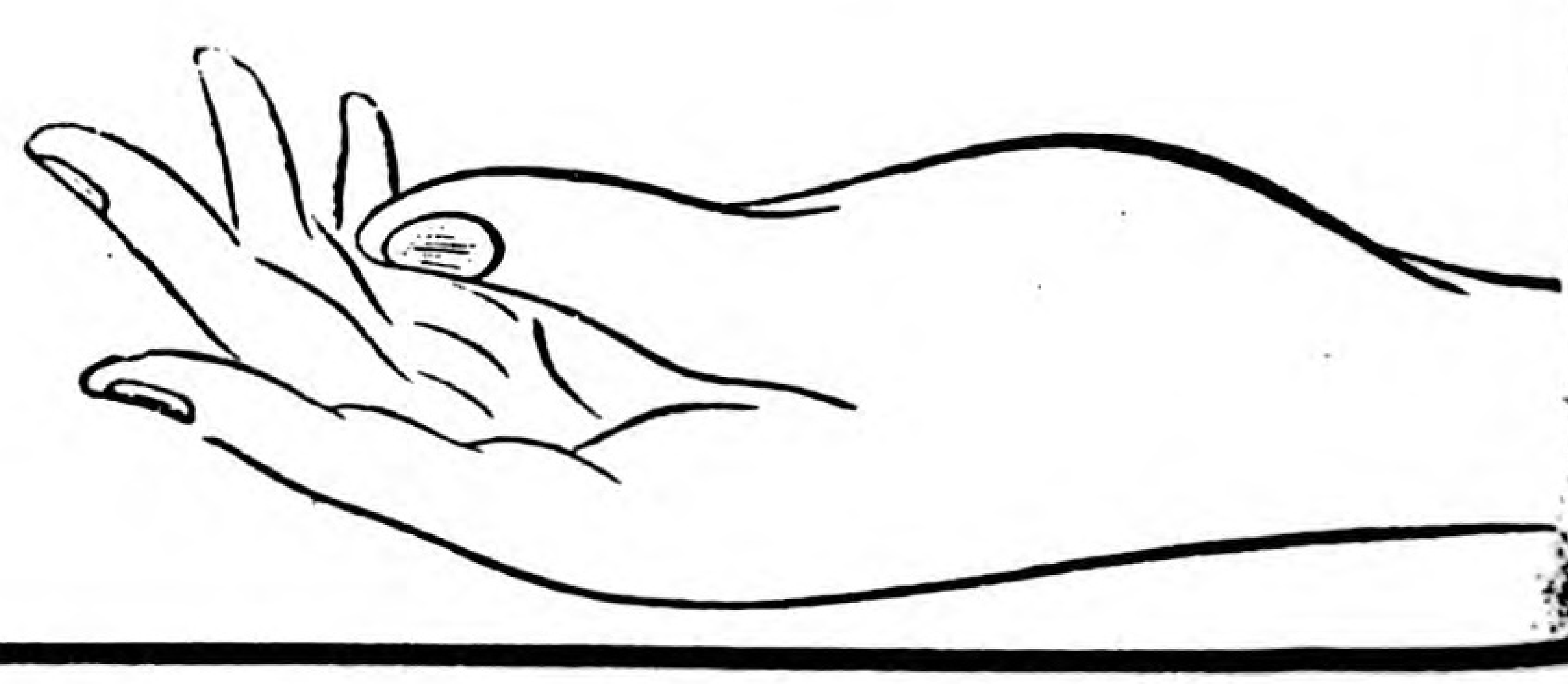
又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）

登録商標



本品縮圖





花王石鹸

●品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ

發賣本舗

東京日本橋區馬喰町二丁目

長瀬富郎

（電話特浪花九二二）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞銀牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレット煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい

すみれ白粉は、歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり



●ねり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢



錫栓附乳白硝子壜入

ヴワイオレット水製

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞贊する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔ろ病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮わらい粉



製造本舗

東京東兩國
横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

化學的色白くなる藥

名藥 白ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴女紳士粹客間に大に高評を博し最新流行化學的新劑にして日本無數の無効藥品と異り本劑を塗擦すれば

主成性分は皮膚のグランド氣孔より吸收せられ藥力に依り皮膚の新陳代謝を盛ならしめ色素を漂白するとともに皮膚を改造するが故に如何に色黑き人も一瓶で性來の天質白色に變化し且●にきびふきでものを去り秀美艶麗なる容貌となるを確證す●藥價乙式貳圓甲式濃厚特製參圓五十錢二種類共送料十四錢

らい病新治療藥ダービン

本劑はコンメルス大博士が數十年間研究の結果レフラ菌に就て一大成功をなし遂に之が新治療藥を發見し數十萬の患者に實驗し一人として全治せざる者なし之に依り醫學界は一新紀元を開き

癩病は必ず全治すべき者

不治の病たりしと斷定せられたり依て弊館は先し初めて患者諸君に用て天賦の幸福を全くせしめ本劑は効驗顯著なるか故に一劑にて大効あり三劑用れは最も用れは誓て全治確證す

價一劑參圓二劑五圓三劑七圓郵税三十錢(實費)

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

定價 壹袋壹錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

登録商標 せいざう元 むいそてい

東京淺草區黑船町 梅素亭謹製 電話(浪花貳千貳百參拾四番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

（大祭の翌日外年中無休刊）

日出國新聞（やまとしんぶん）

●論說 面目を改善し議論該博筆力精透

●小說 山田美妙の筆に成り艶にして精

●講談 金神辰五郎の一代記漸く佳境に入る

相場 確實にして迅報導最迅速言

畫解 每月一回多趣味なる問題を掲げ其解答當籤者へ貴重なる懸賞品を贈呈す

雜錄 社會の多方面にわたりて趣味ある雜錄雜纂を收め

記事 公平にして機敏僅々四頁の中に小天地あり

定價 一ヶ月二十四錢 三ヶ月七十二錢

發行所 東京市京橋區三十間堀一ノ一

やまと新聞社

電新（千百番）電新（千八百十番）

居、北越の地春まだ淺く花も開かぬ時、其絶巓より吹き下す勁風は、此灣の水面を吹き拂ひ、水面上の空氣をして上層よりも數等寒冷ならしめ、而して空氣は下層と上層と密粗の差違が生ずる、此時太陽の光線は魚津近傍より反映して地平線下より來り、屈折して稍上方に於て其影を現はし、直ちに其對岸なる能登半島の連山の側面に反射し、遂に迷景を生ずるので(前理に同じ)その空中に現はれた城郭人馬は、何ぞ計らん皆地上物體の倒景であるぞ。蜃氣樓の理又分明、筆を投じて野外に出れば、滿城滿地花又花。

（完）

歐米婦人界の新事實と新思潮

天風子

◎婦人の權利問題

婦人に參政權を與ふべきや否やの問題は、數十年來の宿題にて、今猶ほ歐米諸國の評論界に喧すし、最近の英國「評論の評論」に、又之れに就ての有力なる一議論あり、其言に曰く、進歩せる國体は、婦人に男子と同樣なる公權、即ち參政權と諸種の特權とを與ふべきものなるや否やは、元より重要なる問題に相違なきも、漫に、之れを與ふべしとなす論者は、男女兩性間の關係を觀察するに於て、宛も色盲患者の如し、詭し婦人が男子に服從せる、永年月の堆積せる不正當なる慣習は打破すべしとするも、之れは女性が男性と同一の能力あるに至りて、始めて實行すべきものにて、其時に至り、參政權や特權を與ふるは、極めて公平なる事なり、然れども立法に、行政に、男女協同の盡力を與へて、始めて完全なる成功を遂ぐべしとの所論は、是れ現社會の趨勢と相反するものなり、惟ふに、總ての世界の内部の實質が、家庭の如きものとならば、婦人も男子と共に、社會の兩親として代表の位置を占むるに至るべし、されど國家が戰爭の機關たる間は、婦人は宜しく其權利を望む事あるべからずと、至當の議論なるべし。

◎撒遜國妃殿下逃走の後聞

墺太利のアーキダッチス殿下は、撒遜の皇太子殿下と結婚せられしが、昨年其兄弟及びジロン博士と、自由生活を試みんが爲め、其夫と其兒とを捨てゝ外國に逃れし事は、既に諸新紙の傳ふる所なるが、其後歐洲新紙の云ふ所によれば、原因は、全く妃殿下が多少精神に異動を生ぜられたるにありといふ、尤も同朝庭にて、妃殿下が不幸なる生涯を送られしといひ、又常に非常なる束縛を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

受けられしといふは、或は幾分かは眞に近しとするも、一種の精神病者たる妃殿下には、さらぬ事をも、かく感ぜらるゝ事もありしならん、兎に角、妃殿下の云はれし如く、女子は戀愛を以て生命となし、戀愛の爲めには、世界をも喜んで捨つべし、との原則にして果して眞理なりとせば、吾等は女子の爲めに、養育院を擴大するの要ありと、彼地の記者はいへり。

◎エレーネ、バカレスコ孃の論評

伊國のエレーナ、バカレスコ孃は、恐らくは世界に於て最も多く諸國の皇帝及び皇后に面會せし事ある人なり、孃は大膽に諸國の皇后を論斷して、彼等より地位と裝飾とを奪ひ去らば、世に彼等ほど不幸なるものはなかるべしといへり、随分思ひ切りたる結論といふべし、孃は更に諸國の皇后に就て種々なる談柄を傳へたり、第一に

◎獨乙皇后

ジアーマニー陛下オーガスタとは、始めてコブノニッツにて謁見したりと云ひて、當時の狀態及び皇后陛下の性質を傳へて曰く、皇后オーガスタは、自巳一家の精神と觀念とを有せらる、皇后はジャン、ジャック、ルーソーの愛讀家にて、又彼れの賞讃家なり、シルラーに至りては、皇后の最も好ませらるゝ處にて、其物語的の史詩の如きは、殆んど其溺愛する處なりと、而して孃の謁見せし時、皇后の態度は何となく老衰を表はし、手は震へ、凄痩たる細身は、事なきにすら、何にとなく座に堪へ得られざるが如きものありきと、而して來の面前にて談話せらるゝは、何となく心配氣なる樣子に見受けしと、されど皇后は、皇后陛下が獨り立ちて世界の敵となる如き場合に於ては、常に之れが慰藉者となりて、敎化訓練に、力を盡くさるゝ由なり、孃が次に擧げたるは、

◎ルーマニヤ皇后陛下

なり、バカレスコ孃は曰く、伊太利國皇后陛下なるトヴエージヤーは、秩序を好み、儀容を作り、最も禮式を愛せらるゝ人なり、會話の折すら、皇后は決して人の批評などせらるゝ事なし、故に帝王神權は、本質に於て皇后が嚴格に把持せらるゝ處なり、然るにルーメニヤ皇后陛下カルメンルバは、全く之れに反して、裝飾、虛禮、儀容、を敵となし、自由を愛し、素朴を好み、全く平民的なりと、一日ハカレスコ孃　、皇后とツエールスに旅行せし際、頗る趣味ある出來事は起りたり、孃は皇后に陪乘し、公園を過ぎりて停車場に行かんとせしに、皇后は忽ち御者に命じて、車を止むるのみか、元來し途に歸さしめ給へり、孃は其何の爲めなるやと知らずして、之れを皇后に問へり、皇后は答へ給ひて曰く、意外にも、妾は女子の監督者エッチ孃に、別れの言葉を云ふを忘れたり、されば、もどりて之れ謝せんとするのみ、かくして皇后はエッチ孃の許に歸り來りて、平身叩頭して、妾は御身に別を告ぐるを忘れたり、されば御身よ、妾は決して永遠に御身を忘

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るゝものに非らずと、之れを聞けるエッチ孃は、涙に暮れて皇后の手に接吻し、其意を用うる甚だ深きを感泣せり、然れども斯の如き趣味ある話は、猶ほ甚だ多くあることにて、皇后は實にバカンスユ孃の見たる多くの婦人中、最も同情深き、最も深物なる人なりと、唯だ其宮中及び臣下の爲めに、不幸なる事多きは、氣の毒なる次第なりといふ、

◎其結論

バカレスマ孃は、諸國皇后を批評して、最後に結論して曰く、彼等は幼きより傲慢なる教育に馴れ、彼等の觀念は一生此厭ふべき惡僻より脫する事なし、而して其驕奢と外部の裝飾は、決して彼等の胸中を滿足せしなるの期なく、煩悶輾々、實に憐れむべしと、如何に自由なる歐羅巴の婦人とはいへ、諸國の皇后を批評するの斯の如く、大膽なるは殆んど驚くべきなり。

雜錄

俳人園女

內田茂文

詩情に富む者の浮世の俗事に疎いのは當然である、此點に於て古來詩客俳士の多くが畸人とし偏人として世の中から指さゝれて居つたのである、殊に女性の詩客に至つては、別ても此畸人偏人の稱を強く蒙つて居つた、それは何故かと言へば、婦人の凡ては浮世の俗事に關係する事が比較的男子よりは多くて、世間へ表はさぬ家庭の瑣事細件も、婦人に於て處理し、男子の氣注かぬ世間の交際、浮世の義理を尠からず掌つて居るのであるから、若も之を放擲して顧みなかつた時は、其無頓着といふ事は男子よりも、より多く感じらるゝので、從つて畸人偏屈の評は男子よりも、強く蒙るのである、是は古來女性の俳人に徵しても明かである。

園女と言へば、誰あらう元祿の俳壇に隱れない俳女、智鏡尼が前名である、園女が女性の俳人として當時に仰れて居つた事は、其吟める句の慕はれて居る上にも知られると倶に、彼が又劬る世事に疎かつた事も傳へられて居る、彼が袂の八口の紅

絹を引裂て下駄の鼻緒を拵へてスゲたり、或時は張文庫の蓋を勝手元の水流しに代用などした擧動を、一般社會から見たら殆んど常識を缺て居りはせぬかと迄に思はるゝであらう、又必ず畸人偏人として斥けらるゝであらう。

併し、彼は畸人でもなく、偏人でもない、又決して常識を缺て居るのでもない、充分に人生の快樂にも悲慘にも出會ひ、辛酸の風にも揉まれ、浮世の義理とも戰つたのである、嘗ては溫き家庭をも作つたのである、彼が『ある程の伊達仕盡して紙衣かな』の句は、如何に其經歷の程度をも窺はるるであろう。

彼は伊勢の國松阪の生れで長じて浪華の醫師岡西惟中に嫁し、良人に死別れた後、江戸に登つて眼科醫を以て生計を立てゝ居つた、營業の　ら芭蕉翁に就て俳諧を研究し、翁の沒後は其角の門に入つて益々此道を樂んで居つた。

彼は良人の沒後、獨身とあつてからも、尚且つ彼の心には良人と倶に家庭を作りつゝあつた當時の窘みは存せられて居つた、彼は常に俳筵に臨んでも、決して男子と並び座す事は無かつた點から考へても、彼が平生を知る事が出來る、その『別れても夜の有丈は碪かな』の句の中には、自ら彼が亡き良人に拂ふの情が含まれて居るものではあるまいか。

彼が浮世の俗事外に超然たる中にも、又決して女性たるを失はなかつた、『花の前に顏耻かしや旅衣』の如何に優しき婦人の品性を示して餘りある事よ、『負ふた子に髮なぶらるゝ暑さかな』、『寢ぶたがる人には見せず朝櫻』の二句は倶に家庭に於ける警句であろう、尚『衣更自ら織らぬ罪深し』に至つては、柔弱にして親が脚のみ嚙り毫も自活

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の道を知らぬ婦人をして正に慚死せしむる好警句である。

世人、俳女と言へば秋色、千代尼をのみ稱し揚げて、彼れ閨女の事に及ぶものが尠い、否、彼を忘れたるものが多いのは、特り彼の爲めに恨事たるばかりでなく、一般婦人社會の爲めにも遺憾であらう。

續新しき古蹟（つゞき）

文學士　濱田紅於

（九）護良親王の御末路につきて

護良親王の御最期は、古蹟之碑に、「親王死生之際當時已有二信僞難一レ判者一」と云へど、高辻氏の所謂舊史なる者は何を指せるにや、おもふに太平記の如き歷史小説を云へるにあらざるか、正確なる舊史を閲するに、親王の御最期は瞭然として疑なきなし。

即ち梅松論によれば建武二年七月二十二日足利直義これを弑すとなし、市小路記には二十三日に係け常樂記に二十五日の事となす、其日子に於て撞着あれども、三書倶に當時の記録として信據するに足るものなれば、要するに親王は二十二日より二十五日までの間に、横死し給ひしこと明なり、焉ぞ信僞難判と云はんや、加之この後十二年を經て正平二年に至り、常樂寺僧桂親王の爲めに塔を建てぬ、古墳之碑に正平元年　親王實薨二于此地一と云ふは、蓋しこゝに附會せしにあらざるか、而してかゝる傳說の起原については、諸書これを記するものなし、奥羽觀蹟聞老誌もその妄を論ずれど、亦これに及ばず、漫遊文草を讀むに及んで、初めて之を明にすることを得たり、これに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よれば陸前國志田郡三本木天性寺僧宏海なるもの天保十一年、其境內に祀れる八阪神社の緣起を作りて、この傳說を揑造せしなりと、其文に曰く、淵邊伊賀守介政（義博の誤）足利直義の命により、土窖に至りて親王を弑し奉り、出でゝ檢する黃金製の牛頭天王の御首なりければ、驚いて窖內を覗ふに、親王は依然として便坐し給へり、仍て他人の首を携へて直義に示し、躬ら親王を擁護して石卷に隱れぬ、牛頭天王の御首は即ち八阪神社の神體にして、神王は正平元年九月石卷に薨去し給ふと、天下何人か斯の如き怪談を信せんや而して古墳之碑の記する所と大に異るものあり、高辻氏これを知らざりしか、知て世人の信用せざらんことを恐れ別に太平記に據てこの文を作りしか要するに八阪神社緣起、古墳之碑、倶に荒唐無稽の妄誕なり、兩者偕に親王の居所を土窖と云ふ、現に鎌倉にその遺蹟あり、然れども其の後人の僞作なることは一度目擊せし者の覺知する所なり、親王は實に鎌倉二階堂藥師谷東光寺の境內におはせしことは、梅松論鎌倉大日記の記する所にして二階堂は當時牢獄の在りし所、宛も德川時代の江戶傳馬町の如し、而して土窖の傳說由來あり、太平記卷十二「兵部卿親王流刑の事」の條に「二階堂の谷土〇〇〇の籠を塗りてぞ置き進らせける」、同卷十三「兵部卿宮薨御の事」の條に「闇の夜の如くなる土〇〇籠の中に朝になりぬをも知らせ給はず」とあるを誤解せしなり、土籠とは塗籠の謂にして、土牢の義にあらず、直義親王を東光寺の一室に幽し奉りて、警固の武士を置き、出入を禁せしに過ぎず、後醍醐天皇が華山院に幽せられ給ひし時もこれを牢御所と云へり、親王の塲合もこれと異らず、足利氏太逆と雖、豈竹苑の侍を土窖に置く

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものならんや、而して人類豈に地下に棲息し得んや、又理論に於ても首肯し難きものあり、東北の地勤王の士に乏しからず、仙臺の伊達行朝の如き磐城白河の結城宗廣の如きあり、親王の東行する必ずこれ等の地を過ぎ給べきに何を苦しんで故らに石卷の僻遠に至らんや、況んや岩代國伊達郡靈山は親王の看過すべからざる地なり、何故とならば、元弘三年十月二十日、陸奥守北畠顯家は、其父准后親房と共に、義良親王を奉じて靈山に鎮す後足利尊氏の鎌倉に叛するや、顯家の追討の詔を承けしは建武二年十一月十三日にして義良親王を奉じて出發せしは同十二月なり、而して護良親王が果して石卷に逃れ給ひしとすれば、顯家等が靈山に在りし時なり、抑々護良義良兩親王は、其生母こそ異なれ、倶に後醍醐天皇の胤なり、且つ護良親王の御生母は權大納言北畠師親の女にして嘗て龜山天皇の後宮に入りて一皇子を擧ぐ、後西園寺氏東宮妃となりし時、侍女として奉仕せり、是時後醍醐天皇（この時は未だ登極し給はず）これを寵して、遂に一皇子を設く、是れ護良親王なり、かの師親は親房の祖父に當るを以て、親王と親房とは從兄弟の緣あり、困頓顛沛の際、萬里の異境に間關して、兄弟從兄弟の地を過ぐ、親王これに倚賴せずして、故らに石卷に潛在するの理あらんや、故に護良親王の潛匿は全く妄誕となさゞるべからず、奧羽觀蹟聞考誌に曰く、建武中後醍醐帝親王避二寇于此地一。北朝莫二敢知一レ之者一。親臣日野日下某從二親王于此郷一居レ焉、故土人推二尊稱之御所一後人指二其遺蹤一曰二御所曲限一と、但し後醍醐帝親王と云ふも別に詳かなるにあらず星野文學博士は元來南朝皇胤の墓なりしを、護良親王に附會せしと云ひ、坪井文學博士は南朝將士の遥

拜場として設けしものなりと云へり、この説似すべきか、かの菊章旗の如きも、十六瓣あるを觀れば、或は南朝方の將來せしものと想像し得べきも護良親王潛伏の證左とはならざるなり、噫かくの如き虚説を捏造せし僧宏海の罪や恕すべからず、而してこれを妄信する岡崎氏の愚直や憐むべし、古墳之碑文作者高辻氏の如きに至りては、吾人亦何をか謂はん。(未完)

今樣歌の沿革

文學士　宮崎鳥府

今樣歌は唱歌の一種なり。神樂歌、催馬樂等の古風なるに比して、その調べ、すがたの今めかしければ今樣とはいふなり。

古へぶりは、おほかた五七調なりしが、青丹によし奈良の時代を經て、平安の都となりしこのかた世のさま變りて、よろづ唐ぶりをまねびにたれば異やうなる風儀起りて、和歌のさまも一變したり從ひて唱歌もまた變化して、その調べを詩句に倣ひ、五七の調をさけて、多く七五の調に從へり。嵯峨天皇の御代、眞言宗の始祖弘法大師出でゝ、四十七音の假名を以て、名高き色葉歌を作れり。

色葉匂へど散りぬるを　我が世誰ぞ常ならむ
有爲の奥山今日越えて　淺き夢見し醉もせず

こは、當時もて囃されし詩句の調にして、もと四敎法文の意を容易く知らしめ、かつは、國音の限りなることを普く人に悟らしめむとせしなるべけれど、古へより、唱歌には句數の定まりなかりけむを、これより後は、はゝこの躰を用ゐて、喜怒哀樂の情を叙ぶるに至りつれば、この色葉歌を今樣の模範といふも、無下にはあらざるべし。されど、間もなく詩文旭の勢にて世に行はれしから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に唱歌なさむ時も詩を誦せしかば、かすかに曙光を放ち初め今様歌も、さすがに世に捨てられて一時その跡を絶てり。かくて延喜年中、紀貫之出でて、假名文もて男もすなる日記をものし、また此御代、古今集さへ撰ばれたれば、いたく衰へし和歌再び興りて、花に愛ひ、月に泣くのみか、遂には之を朗詠し、或は佛の言葉を和げて讀誦したりき。かく和歌のさかりに行はれたるに乘じて、源信といふ僧都、かの色葉歌を稱へ、根來の覺鑁上人等も、之を賞める　ほどに、高倉天皇の頃には今様合せといひて、各〻その技を競ひ、その言葉の優美なるを爭へり。

降りて、源平時代に至りては、今様歌最も隆盛を極めつゝ、雲の上人は更なり、いやしき白拍子の類ひまで、こよなき娛樂の具として、はては唐樂に合奏せり。試に、祇王が、平相國の歡心を買はむ爲め、西八條殿にて、その壽のかぎりなきを祝ひし今様を引かむ乎。

　蓬萊山には千歳ふる　萬歳千秋かさなれり
　松の枝には鶴巣くひ　いはほの上には龜遊ぶ

さても浮世の榮花を一身にあつめたる平相國、もはや祇王にも、あき果てぬ。一たび佛を見てしより、煩惱の絆止めがたく、未だうら若き少女子の花顔露をふくみ、柳姿風に靡きたる風情をあはれに思ひて、すげなくも祇王を殿内より逐ひ拂へり敗履の憂めに遇ひし祇王、いかでか堪へむ、泣く〳〵この無情なさをみて左の今様を歌ひけり、

　佛も昔は凡夫なり　我等もつひには佛なり
　何も佛性具する身を　隔つるのみこそ悲しけれ

蛭が子島より起りて、平氏を西海の波に沈めたる賴朝こそゆゝしけれど、骨肉の兄弟をころさむとせし心はおろかなりけり。天が下に身の置き處な

く、吉野の奧深くわけ入りし夫義經を慕ひし靜が心やいかなりけむ。一首の今樣に貞操をあらはし滿身のなさけをこめしかば、さすが手荒山伏ばらも、竊に鎧の袖を濕しぬ。あはれ後德大寺は、古き都に歸り來て、淺茅原となりにけるを歎き康賴は權現に法樂して神佛の示現さへ今樣を以てなせしにあらずや。かくの如く、めでたきにも、物うきにも、今樣を唱へて、喜怒の情をのべしかば、催馬樂、朗詠等をもおし倒し、遂に歌謠界の覇王となれり。されど足利氏季世に至り、世は刈菰と亂れに亂れて、雲の行かひたゞならず、戰ひの塵巷を蔽ひて、安き時とてなかりければ、その發達を妨げられ、辛うじて命脈を保てりしほどなりしが、こゝに一轉して小唄となりぬ。（小唄の事は別に述ぶべし）されどかの輕妙なる七五調は、德川時代に至りて、謠物はさて置き、純然たる韻文の上に用ゐられし元祿の頃、近松、馬琴などの文豪つぎ〳〵にあらはれて、戯曲、小說等に應用せしかば、七五調はかれこれのけじめなく、なか〳〵に勢力を逞しうしたりき。

鶴ヶ岡の一曲

藤野天城

予曾て鎌倉に遊び、一夜涼風颯として、月光庭の松ヶ枝に懸る時、思を鶴ヶ岡の祠前に馳せて、坐ろ憑弔懷古の涙に袂を濡ほしたる事ありき。

鶴ヶ岡八幡宮は、鎌倉字雪の下に在る國幣中社なり、應神天皇、神功皇后、大仲媛命を祀る、康平六癸卯の歲、伊豫守源賴義の建立する所にして、爾來數百年の星霜を經過し、治承四年、源賴朝祠を今の地に移して、大に社殿を造營せしより輪奐の美を極め、棡や欄や結構頗る壯嚴にして、坐ろに當年の豪華を想はしむ、境内茂林あり、蔚然半空を蔽ひ、地は幽清閑邃にして、而も淨ふして寸埃なし。鎌倉停車場を下り、徒歩して一の華表を潜れば、赤橋あり、一路直に祠前に通す、池あり、清冽千古の紺碧を湛ゆ、夏時は紅白の蓮花露を含むで清馨を送り、金鱗朱尾其間に唼喋す、池畔陰石と島

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石とあり、誠意之に臨すれば容易に好配を得るといふ、鼓胴に似たるが如き石橋を渡りて、往くこと數武、正面に神樂殿あり、數十級の石磴突兀として、社殿の背後より起る、是を登れば即ち上の宮なり、八幡を勸請す、此磴前の東に方りて、仁德天皇を祀れる若宮又賴朝を祀れる白旗宮あり、之を下の宮といふ、無双の英雄蟠太閤が、嘗て其背を撫し、肝膽を披きて滿腔の豪氣を吐きたる右府の木像は則ち白旗の宮に在り、若宮は人呼で靜の舞殿といふ、瞑目して懷へば、古烈婦が俤今猶眼前に髣髴として、嫣然美笑を含めるが如し。

靜は元と京師の白拍子、嘗て御鳥羽帝の時に當り、天下大に旱す、朝廷勅して高僧に雨乞の法を修せしむ、然れ共効驗毫も顯はれず由て更に美姬一百人を召し、神泉苑の池畔に於て舞踏を爲さしむ舞ふて九十九人に至り、猶驗なし、時に白拍子靜も亦召されて此中に在り、終に立て場に登る、垂雲の髻、嬌花の態、加ふるに一種凜乎たる氣象は、實に當時白拍子中の最たるもの、滿座の客みな其美に打たれ、恍として茫然たること多時、帝御簾を揚げ、靜を召して手づから御衣を賜ふ、靜乃ち拜跪して之を受け、慇懃に被り起て舞ふ翩々たる仙袂風に飄蕩して、蘭の麝薰り滿座の人を模つ、實に是妙神に入り、至誠天に通ずるもの、一陣の冷風は嫗て颯然として吹起り、滿天忽ち陰雲重疊し、大雨遂に滂沱として濺ぐ、爲に舞れざること三晝夜、天下始て穀く、萬民生氣に蘇せしといふ、時偶ま源義經に知られ、意氣相投合して、是より姑らくも相離れず、扨ては太刀打の響、矢叫の聲に幾多の武士があたら少さき膽を冷やして、故郷百里を隔つる修羅の巷に、魂を驚かす幾所の戰場を巫ともせず、而も日頃は禪の種にも怖づべき柔弱なる婦人の身を以て、男性的俠骨を有するの彼は、一片寸毫の恐怖なく、常に義經に許すに三寸の胸底を以てして、死生の間を往來したりき。

然るに時は是ならず、驕る平家は爰に憐れの末路を晒て、一門西海の波に沒するや、由來殘忍酷薄の情性を有して、猜忌只是自身を守るの外、敢て他を顧みるなき頭大將軍は、明に個人主義を標榜として、其族人に臨めるが爲に、讒搆忽ち其隙に入り、而も常時戰場の花、弓矢の神、武士の棟梁とまで仰がれ、曉に鎌倉天下に非常の潛勢力を有し、世の譽れ類ひなかりし千古の英雄、九郎判官源の義經は、ついに兄賴朝の忌む所となり、赫灼の功成つて併も身を當世に容るゝ能はず、狡兎死して走狗煮られ、飛鳥盡きて良弓藏れ、敵國滅びて今や謀臣を失はんとす、當時義經が心中の感愴それ幾許ぞ、遂に東鎌倉に入るを容るされず、腰越狀の一篇に物の憐れを留めて、悒鬱として京洛の間に逍遙ふ、罪なくして見るは只配所の月のみかは、菅公が筑紫の昔を偲び、退之が潮洲の當年を懷へば、蓋世の俊雄豈一滴の涙なからずや、茲に於て彼は遂に止むを得ず、吉野の里の雪を踏み迷ひぬ、靜女性の身を以て、而も彼が有せる一片の俠骨は、自巳に許すの人を措て、眼中また富貴なく、功名なく、流離顚沛、窮迫困頓の間、能く婦節を守りて未だ暫らくも郞の傍を離れず、偶ま堀河の第土佐坊昌俊の襲ふ所となりて、義

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經此處にも居溜らず、遁れて將に奥州衣川の舘に奔らんとするや義經篤く諭して之を去らしめ、且つ一双の鏡を取出し之に囑していふ、是我の平生用ゆる所、今や汝に附す、時々見て以て別後の情懷を慰せよと、靜歔欷命に從ひ諾ふて曰く。

見るたびにうれしくもなし十寸鏡
戀しき人の影もとめれば

と、遂に相別れて一人吉野の雪に彷徨ふ、偶ま山僧の爲に捕へられ强て藏王權現の祠前に淡舞せしむ、靜辭する能はず且つ舞ひ且つ謳ふ曰く。

ありのすさびのにくきだに。ありきの跡は戀しきに。
ありて離れし仲な。何時の世にかは忘るべき。
別れのことに悲しきは。親の別れ子の別れ。
すぐれてげに悲しきは。夫婦の別れなりけり。

と、之を聞く並居の衆僧坐ろ惻隱の情に堪へずやありけん、翌日人をして之を京に送らしむ、後ち北條氏の捕ふる所となり、遂に鎌倉に送らる。

賴朝召して九郎の足跡を問ふ、靜固く知らずと陳ず、然れ共其身めるあるを以て之を留む、賴朝の夫人政子、嘗て靜の歌舞に堪能なるを聞き、一度び之を觀んと欲す、靜病と稱して至らず、且つ哀訴して曰く、妾固賤流自ら惜むに足らず、然れ共身旣に豫州の後房に充つ、今豈耻を稠人列座の間に現さんや、妾今日豫州と離別の悲みに堪ねず、寧ろ歌舞に意あらずと、政子頻に請ふて止まず、旣にして賴朝、政子と鶴ヶ岡に詣づ、靜を召して再三之を强ゆ、靜即ち嘗て穿つ所の錦袍を被り起つ、猛面の貔貅、將軍の四方に環座し威儀頗る嚴然たり、而も見來れば往日皆是判官の頤使に從ひ、犬馬の勞を取りたるもの、今や主從其位置を異にし、君は零丁轗軻を極め、臣は却て金殿玉樓の人となる、靜の胸中殆んど燃ゆるが如けん、錦腸空しく寸斷せられて、嬌容寂寞涙を呑みて舞ふ、工藤祐經鼓を擣ち、畠山重忠銅拍子を拍つ、靜徐ろに謠ふて曰く、

賤や賤しづの苧環繰り返へし
昔を今になすよしもがな

と、聲態嬌絶、正に是れ紅扇雪を拂ひ、綿裙霞を罩むるもの、衆皆感愴涙を垂れざるはなし、何ぞ知らん烈婦が心中殊更に郎を愛慕するの切なるを訴へ以て將軍の凜烈たる權威を愚にし、虎を擣ち獅子を殪すの勇士を翻弄して、心窃に慰むる所あらんとは、ア、彼が一片男勝りの俠骨と、三寸の胸底に充ち滿ちたる愛情此血も涙もなき、巨頭の無情漢を、叱責して怨を散せずんば止まざるの慨ありき、賴朝其己を諷刺するを察し、怒色面に溢る、然れ共靜の眼中尊貴なく、權門なく、威武も屈する能はず、勢力も枉ぐる能はざる也、況や殘忍酷淋の人に於ておや、彼は賴朝の憤姿を冷笑に附し再び並居る諸侯を尻目にかけて、更に謳ふて曰く。

吉野山みねの白雪ふみ分けて
入りにし人の跡ぞ戀しき

と、果然賴朝は怒れり、咄この小比丘尼、神前に我を呪咀するか、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

而も其叛臣を裏ふて我を蔑如す、殺人の一劔將に汝が頭上に加へんかなと、アワヤ席を蹴て躍り懸らんとす、夫人政子爭ふて之を止め、辛に身を以て免るゝを得たり、梶原景茂一夜醉に乘じ、靜を其客舍に訪ふて之を挑む、靜大に其不禮を叱責し、景茂を罵つていふ咄この阿呆漢、今漂零寄るなきの姿を翫弄して、我が判官公を辱めんとするか、若し公をして罪を家兄に得ざらしめば、汝が輩又妾が面を見んと欲するも豈得べけんやと、彼遂に政子の誼により、京都嵯峨の奥深き所、庵室を結びて念佛三昧に其日を送りしが、義經と遠く相距るの情に堪へずやありけん、婢琴柱を拉して遂に奥州に奔る、途偶ま野州栗尿橋在を過ぎりて、勝鹿村の大堤に架せる橋上に至り、遙に義經の訃音に接し、高館の敗報を耳にす、靜茫然自失殆んど爲す處を知らず、悲哀胸を衝き、慟哭すること數晝夜、遂に身を破りて死すといふ、時に年十九。

嗚呼吹けば散りなん、一個巾幗者流の身を以て、六十四ヶ國の總追捕使なる源右府の面前に、功あつて罪なき漂浪人の爲に其寃を訴へ、その無道を痛罵したるの快女子、義經が同情の化身たる節婦、白拍子靜の俤今や何處にかある、予一夜鶴ヶ岡祠畔に詩を探ぐるの時、鎌倉山の月影は冷やかに照り渡りて、ざんざめく濱の松風も聲を潛め、小川の響きのみ只末世の輕薄を喞つを聽きぬ。

米國の女子拂底

わが國では男よりも女の方が多いから、嫁がほしいといへば、すぐに候補者が出來る、若し年が若くて、才智があつて、學問も先づ相應に出來るのであつたら、其處からも、此處からも細君の申込があつて、本人少々迷惑に感ずる位なものである。娘一人に婿七人ではなくて、婿一人に娘七人と來ては、甚だ恐るゝ譯であるが、兎も角此點に就きては、吾國の男子は、仕合せなことであるといはねばならぬ。

所が米國では、全く之と反對で、女の數の少き爲め、立派な男子も妻を得るに困難する位の有樣であるから、立派ならぬ男子は終生妻を娶らずに過ごすものも少なくないとのことである。最近の米國身分登錄簿に就い調査したものを見ると、カリ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

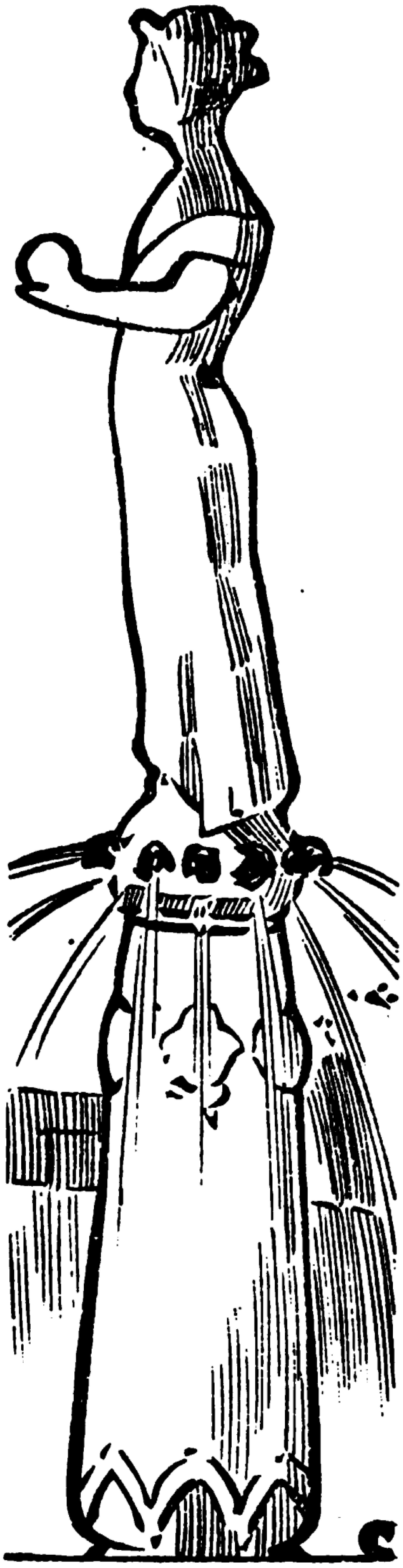
雜錄

ホルニヤ州では壯年の男の數が二十三萬九千五百四人で、女の數は八萬八千七百五十五人であつて、アイダホ州では、男は二萬三千四百二十一人であるのに、女は僅かに三千五百五十六人である。又モンタナ州では成年男女の比例は七と一、オレゴン州では四と一、ワシントンでは五と一、ヨーシングでは九と一との比例であるさうだ。此んなに相違があつて見れば、成程細君の容易に得難いのも尤の次第であつて、女尊男卑の風が盛んに行はるゝのも、無理ならぬことの樣に思はるゝ。細君に衣服を着せてやつたり。靴を穿かせたりして可愛がる米國人の風習も、叱つたり、小言をいふたり。又た出て行けがしに、虐待することのある我國の風習も、畢竟詮じ詰むれば、需用と供給の上の過不足から出で來たことであつて、孰らを見ても、決して不思議はないのである。

其處で或る記者は女學生諸君に向ひ、是非亞米利加に渡つて、碧眼有望の美男子と結婚してもらつたら、人種改良の上にも、外資の輸入に就ても、至極便利であらうと云つたが、若し記者の目的通りになつた日には、我國の方で、追々女子の數が減じて來て、女尊男卑の風が行はれる樣になるから、マアそれは男子の側から見合せてもらつた方が善からうといふ人もある。

よきはよくあしきはあしきは、うたひもの、やめる女、風流も其のうちなるべし、わがほどをしり、なすべきことをなしてこそいはめ、しひて古をこのみ、月花をめづるとて、いかでいはむ、よすがら月みんよりは、日を惜むにしかじ。
おほきをいむものは茶器、酒のさかな、遲さくら、りうたんの花、ほとゝぎす、すゞむし。うたてきものはみな月の燃、落葉の風にさわぎたる。
あるもなきにおとるは誠なき人の才、女のさゑ、いなづまのかげ、あふとみし夢。

白河樂翁



大阪博覽會見物

大阪に於て

水主青眼

三月の一日に開會されてから、半月立たない位であるから、十二分の設備はまだ行屆いて居ないとのことで、機械館や、教育館や、參考館などの陳列がスッカリ整うて、全く大設備の完了するのは來月の十日以後であらうとの話である。されど機械が未だ運轉を始めぬのと、參考館などに多少の空地が殘つて居るのは、誰れの目でも分るが、兎も角空前の大仕組であるから、今設備して居る丈けでも、中々二日や、三日や、五日で、見盡すことではない。それもその筈で、陳列場の延長哩數が十二哩以上で

あるといふことであるから、素通り丈にも、三四時間はかゝる算用で、之に目に付いた品物を立留まつて見て居る時間を合すれば、如何に急いでも六時間位を費やすのは當然のことである。

それにまた少くとも楊柳觀音の前か、音樂堂の邊りのベンチに腰を下して、場内の全景を瞰下すの必要もある。一寸息休めに臺灣館の喫茶店に、臺灣の少女が酌むて出す烏龍茶の出花を喫むも面白い。餘興のメリーゴウラウンドや、ウオターシウトも縦ひ載つては見ぬまでも、兎も角暫く見物する底の價はある。況てカアマンセラ孃の不思議館は、お土産話に必す見物することゝしたらば、素通り丈でも一日は優にかゝるものと見て置かねばならぬ。



勿論諸方に門があつて、入るも出るも、自由であるから、一時間でも、二時間でも何時でも退窟したらば、直ぐに外に出ることが出來るが、併し二時間か五時間で見物して來たといふ人があつたなら、それは工業館の一部と、美術館の油繪位を一寸見た位で、決して全體の素通りをも終らなかつた人である。

美術館の樓上で、十八九歲位と十五六歲程の姉妹と見ゆる、頭髮から衣服まで、殆んど同じ風采をして居る兩人の令孃が、互に手と手を組み合せて、頭を低れ、眼を瞑して、立ちすくんで居るのを見たが、此處には腰懸くべき椅子は勿論、寄るべき柱もないので、此の姉妹は目の續く限り、足の續く限り、熱心に工業館から、敎育館と見物して、美術館に來たのであらう、處が最早や眼も勞れ、足も

勞れて、見ることも、歩むことも出來なくなつたので、休息すべき椅子も柱もないから、成らうことなら、此處に横になりたいのであるが、流石に人目を耻ぢて、據ろなく、互に杖とも柱ともなりて、斯く立ちすくんで居るのである。大勢の男女が込み合つて居る料理店とか、茶店などに入るも耻づかしい氣持がするし、庭園のベンチは、微醉の紳士や、地方出の見物人に占有されて居るから、ヨシ空席があるにしても、兩親か兄弟にでも連れられて居たら格別、左もなくば其中に割込むで、腰を据ゆる勇氣のないのも、姫御前としては尤のことである。故に此の兩人の令孃は、會場に入つてから、少時も憩はずに、陳列場を運行てのみ居た結果が、斯うであつたので、その辛勞の程も察せられて、甚だ無理か



らぬ次第である。

工業館でも、農業館でも、水産館でも、みな女性の監守人が、就いて居るからこんなことのあつたときには、女同志のことゝて、女の監守の椅子を借ることも出來やうし、又は庭園に連れて居てもらうことも出來るが、美術館は監守人が居ぬのみか、階樓が廣くて、婦人の目に付き易い織物や、繪畫は多くは此處に陳列してある、そうして觀覽の順序として、一番終末に當るから、美術館の樓上に來た時には大概の人は最早スッカリ草臥れる時であるから前記した樣な出來事は、多くは美術館に出來さうなことで、又た出來たときの仕末に甚だ困る譯であるから、見物の令孃等は豫め注意さるゝが宜しい。

右は筆の序でに、注意旁したのであるが、

會場の廣大であること、陳列品の多いこと、又た婦人の目を惹くべき品物の澤山なることは、これに就ても分明るであらう。

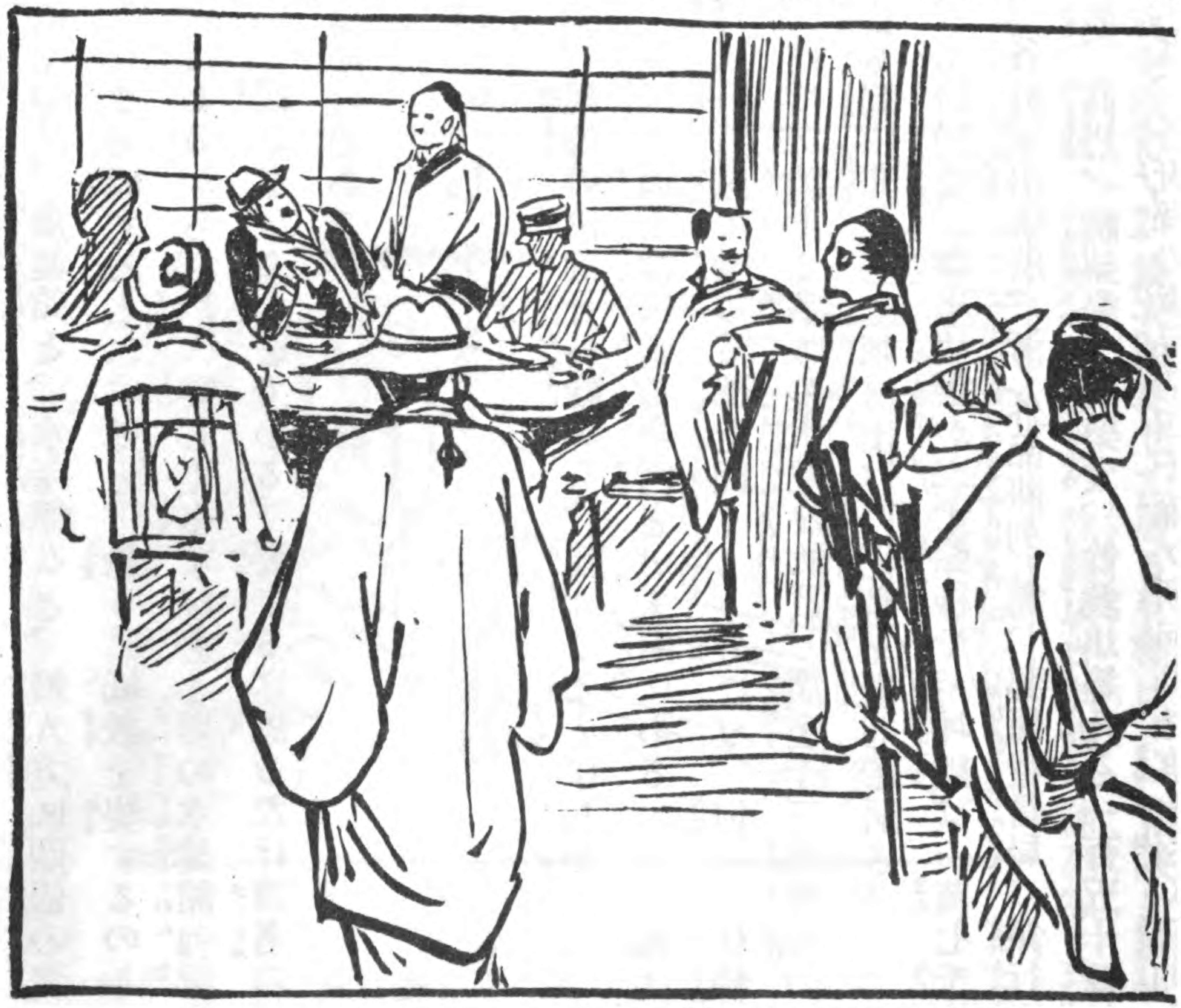
そこで婦人の爲めに、巡覽のしをり、則ち博覽會見物の仕方を書いて見るのも無用ではないと思ふ。固より吾が女鑑の讀者諸孃が、悉く博覽會見物に行かれるとは思はない。否な行かれる人は百人の讀者中に二人か



臺灣喫

三人の割合であらうが、行かれぬ人の爲にも、この道案内とも云ふべき見物の仕方を讀みて、會場の概況が判つて、多少の興味を催ふさるゝことであらうと思はれる。何にしろ此の博覽會は、東京と大阪とが、位置に就て大競爭をして、遂に大阪方が勝を占め、幾百萬の大金を擲ちて目出度い凱歌を天王寺畔に揚げた程のことである。又た一昨年の佛蘭

西の大博覧會を見た後のことであれば規摸の世界的なることは云ふまでもなく、條約改正後初めてのことであるから、わが日本の精粹を此に拔きて、國の光りとも誇りでもしやうとの意味を含むで居る、そこで見物が行かぬ方には、尙更ら、會場の設備の概念と、國家の進歩の有樣とを承知してもらひたいのである。但し吾輩が博覧會場に出入したの



茶店

は、三月の十二日から、十七日までの間で、僅か一週間足らずの日子であるから、十分の觀察ではないとは、勿論で一々物品に就て、批評などするは專門家の業務であるのみならず、却つて讀者の厭倦を來す許りであるから、先づ見物の仕方から始めて、それから各館の婦人の目と心とを引くべき品物に就きて記し、終りに餘興に移るとする積である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

又一つ御斷りをして置くのは、農業館と、水產館など、婦人方に關係の淺い分は、多少記して興味のないでもあるまいが、それまで記すことにすると、餘りに紙數を要するのみならず。有體に言へば實際の觀察も屆いて居ないのであるから、別に委しく書ないとと堺の水族館の記事は、巡覽のしをりの中に一切を書いて、是れも別に記さないこととである。要するに成るたけ讀者の倦怠せられぬを目的としたものと、御承知をねがひ度のである。

巡覽のしをり

先づ說明の順序として、建物の位置と外觀から、陳ぶることにしやう

さて博覽會の位置は、大阪の西南端に當る今宮といふ處にあるので、春は聞たる茶臼山に椿花の落つる音を聞き、秋は阿部野に百舌鳥の囀づる聲を聞くより外には、何一つ仕樣の無い荒凉の地であつたのが、今は急劇の變化を受けて、瞻上る許りの大建築物は、廣袤十三萬餘坪の內に、幾十となく建て連ねられたので、其趣は恰も獨山兀として阿房出づの光景を現じて居る。

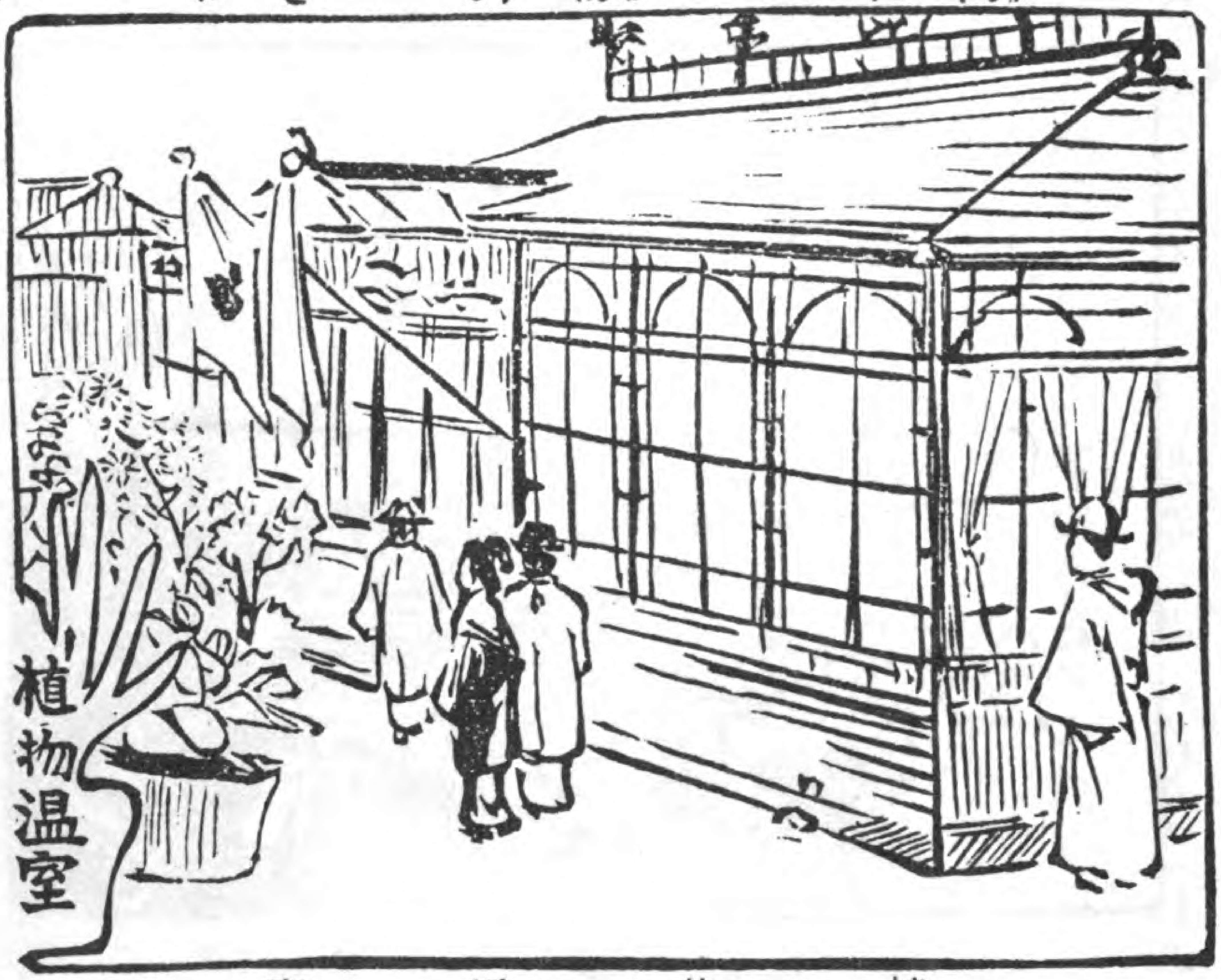
式場、各館、附屬室、事務局及び雜事場等が二十餘棟で、坪數は一萬七千餘坪である。其他御料局、海軍省、大阪砲兵工廠、各社團出張所、海外品陳列館、郵便電信局、銀行出張所、新聞雜誌縱覽所、廣告所、休憩所、飲食店、高塔、眺望臺、奏樂堂、餘興場等凡そ一百五十餘棟の建物が到る處に散在して居る又、正門外右側には、各府縣の賣品店四十餘ヶ所何れも客を引く目的を以て、樣々の工夫を凝ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、紅白又は紫などの旗を樹てゝ、鱗次櫛比して居る有樣は、一見眼を驚かす許りである。而して其の後背には、人類館、世界一週館、薩摩踊りなどの餘興場と其他の陳列館とがあつて、その中には巍々として雲を摩するかとも見ゆる高塔も聳えて居る。

門内なる本館は、西北に向つて建てられてゐるので、右方は農業、林業、水産の三館、左には工業館がある。

林業館の後部に當り、動物館に連りたる家禽室は、花卉盆栽陳列所の側に建てられ、植物温室は南向の日當り好き處に在りて、且つ蒸氣室があつて常に暖氣を送るが故に、紅黃紫白の花は、玻璃越しに今を盛りと咲き揃うて居る。



植物温室

臨時停車場は此邊りにありて、二條の鐵路は場内に分岐して、機械館と、通運館とに通じて居る。各鐵道會社の出品にかゝる出品物は、いづれも其のレールの上に横はつて居るのである。

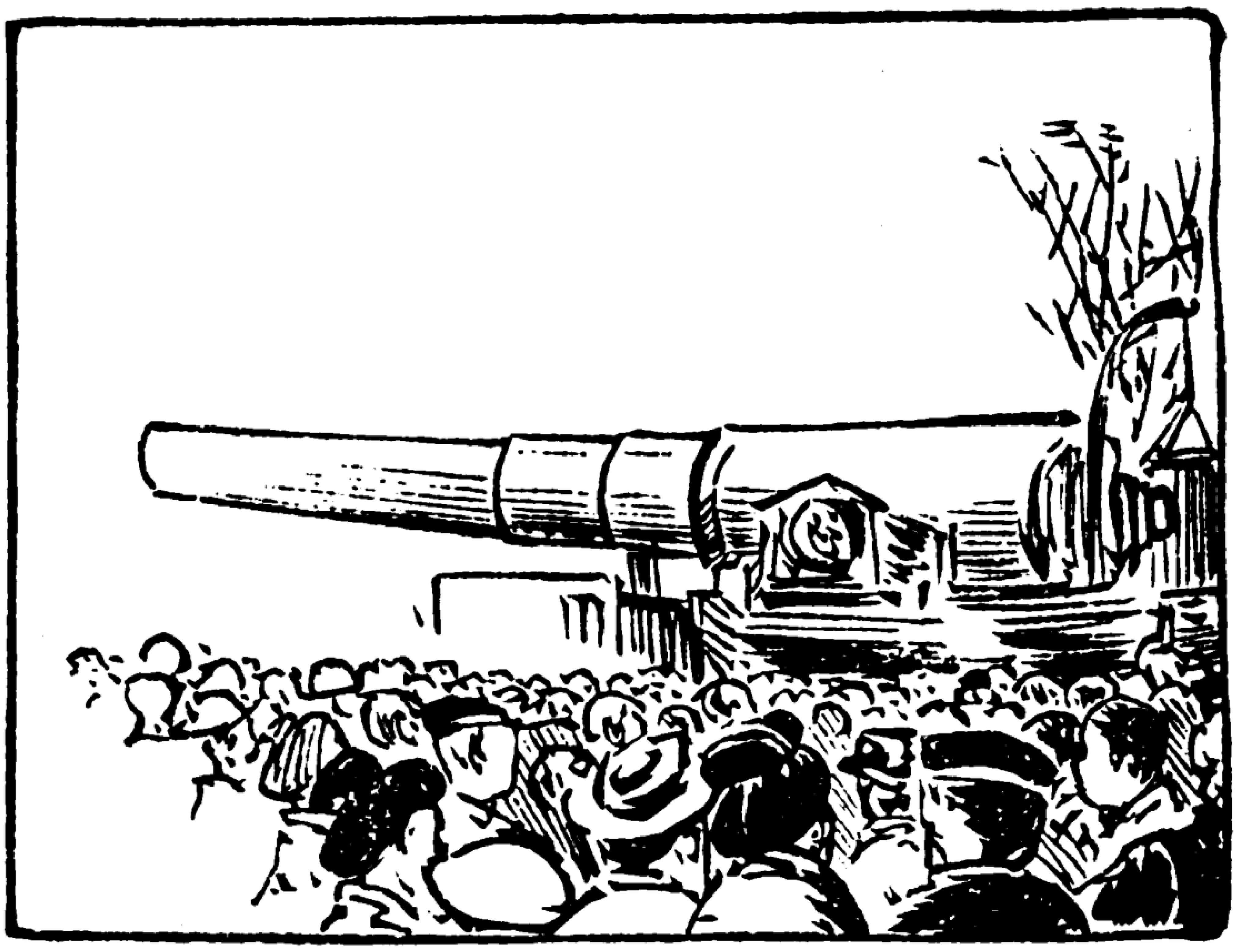
參考館は凹字形を爲し、門口の屋上左右に地球儀を置き、foreign Sample bulding と刻してある。

教育館は中央大墳水塔に面し、工業館に隣りて建てられ、アンドルス館其の右にありて、外國の陳列品の甚だ多いことは、小萬國

博覽會といふも、可なるべしと思ふ位だ。

美術館は丘陵の上にありて、麓より登れば、右に碧瓦朱楹の喫茶所、又左には、奏樂堂などがある。正面なる楊柳觀音は、慈顏うるはしく巖上に踞し給うて居る。而してその迸出する噴水は、下なる小童が手にもつたる貝の中に入り、溢れて大地に落ち、更に溢れ又溢れて、次第に第五の盆池に入る仕組になつて居る。

臺灣館は美術館の後背にあつて、是れが東南の行詰りである。



海軍省出品

場の内外の光景は、これでザット判然つたとして、さて是れから各館順覽の次第を記るさんに、開館は毎日午前八時で、午後五時には閉館するのであるから、先づ八時卅分前後には。正門に到着するとして、賣捌所からでも、賣子からでも、入場券(平日は五錢一枚を買へばよいが、日曜日に限り、二枚を買はねばならぬ)を買うて入り、庭園などを眺めて、目を場内全體の景色に注ぐ時には、彼れ是れ九時になる。ソコデ緩歩して工業館に入り、製作工業の部より始めて、染織物に移ると、目に付く品物が甚だ多い、それから一廳陳列場を拔け出で丶、東京府の單獨工業館に這入つてから

かた其處を見て了つた時には、大分眼も勞れるから、一寸茶店か、ベンチかに休息する、又た歩み出して、大阪砲兵工廠や、海軍省の出品物を見て、今度は裏手から復び工業館に這入ると、採金冶鑛の陳列所がある。それから化學工業の部に移りて、陶磁器の部に出ると目に付く品がある。此處を通り過ぎて塗物の陳列品の處に行くと、又々奇麗なものが澤山ある。それを見て終つたなら、工業館を出で、教育館に入るので、塑像や、寫眞や、繪畫など色々のものを見て、庭園に出るとモー十一時過ぐる頃となる。晝の御飯は何にしやうか、西洋料理の看板は其處にも此處にも掲げてあるが、それよりも淡泊した會席の日本料理がよからう。御手輕ならば、御鮨でも、鰻丼でも、茶碗むしでも、御蕎麥でもなんでも御望み次第である。御婦人のことであるから、御酒は勿論拔きとして、一人前二十錢から五十錢を投ずればそれで澤山である。兎も角一時頃までに晝食を濟まして、食後の散歩の積りで、ソロ〳〵茶店や料理店の前を通りて、餘興のウヲーターシユウトを見るも面白い。それから又た休憩所や、料理屋の軒先きを傳ふて、いろ〳〵の廣告などを見て、美術館を目當てに、阪路を上りて、楊柳觀音の噴水池の處に行くと、場内は云ふまでもなく、場外の景色も一眸の下に集つて、氣も晴れ〳〵する、さうして、直ぐ其側にある音樂堂からは、斷えず洋々たる音樂の聲を運ぶのであるから、此處で暫らく遊んで美術館に入ると、流石に美術品丈けに、織物でも、染物でも、刺繡でも、目ぼしい品々が夥多しい。それから樓上に昇れば、洋畫と、和畫とが、一面に陳列されて居る。又階下に下りて、もろ〳〵の繪畫をながめて、外に出ると三時過ぐる頃になる。そこで復び楊柳觀音の池をつたうて、大阪喫茶會

茶店の邊りに行くのもよいが、すぐに美術館の裏に出で丶、メリーゴーラウンドの餘興を一寸見るか、又其側の大日本體育會の體操などを見て、暫らく休息みて、此度は臺灣館に入るので、此處は日本の新領土丈に、凡てが一層意を用ゐたものか、中々美事に陳列されて居る。それから臺灣料理店の前を過ぎ、喫茶店で喉をうるほして、館外に出れば、定刻の五時近い頃になるから、今日の見物はこれまでにして、體育會と臺灣館との間を東に向つて阿倍野門に出で、一二丁許行けば、天王寺の停車場である。

名高い茶臼山は此の停車場から四五丁位の處であるから、序でに雲水寺に詣りて、精進料理で夕飯をすますのも一興であらう。殊に此の雲水の幽邃なる



教育館內

景色といつたら、紺緑の池水を距て丶、前丘の深林に對して居るので、雜沓熱鬧を極めて居る博覽會場を去りて、此の清閑の處に來たときの心持は、恰も仙境に遊ぶや

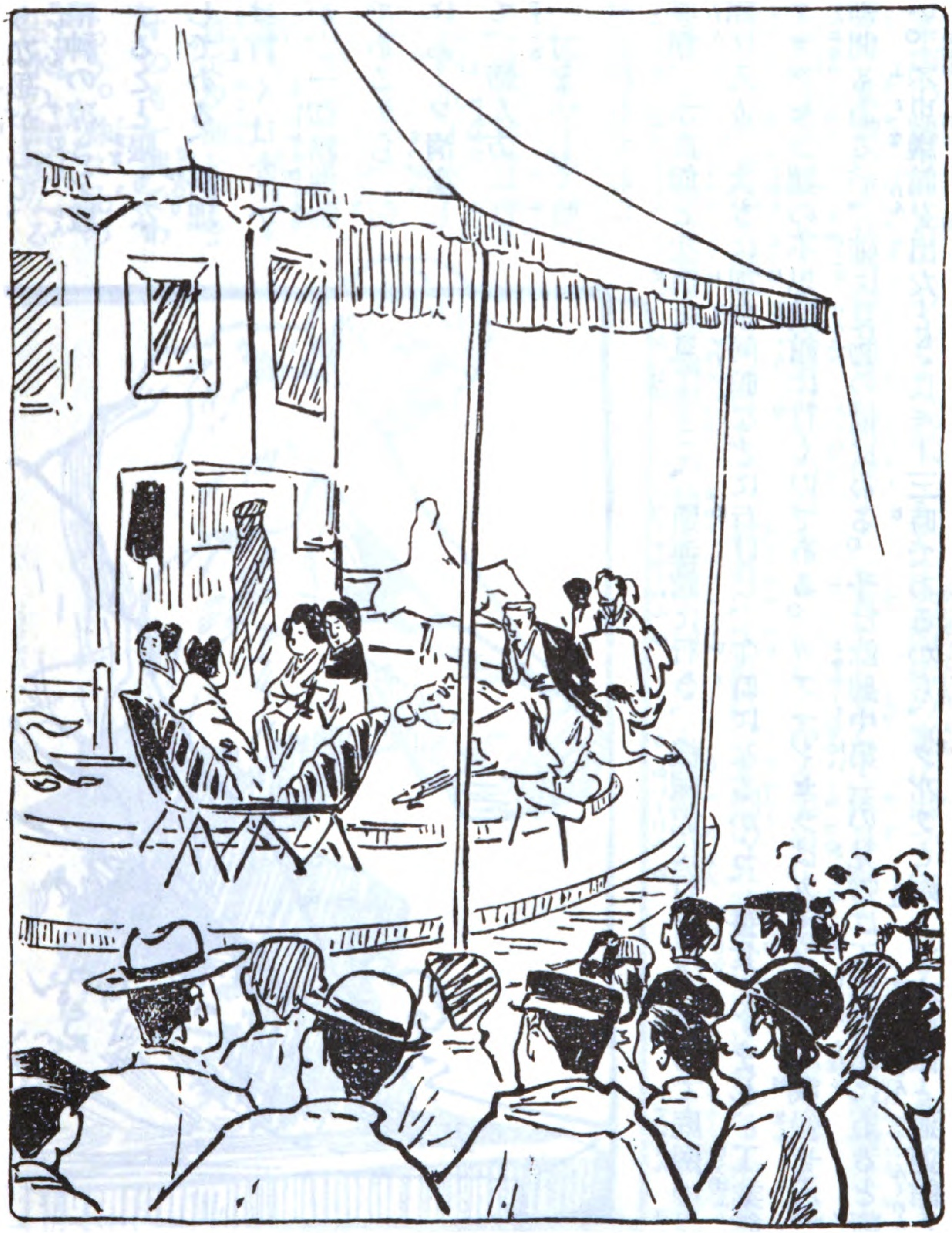
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うな思がして、精神の涼さを感ずること限りなしである、料理は旨くはないが、一切精進物であるから、何にやら清潔して、婦人方には一寸をいしく喰べられるであら



の陳列品

うと思ふ。此度は二日目の巡覽で、昨日の通り、九時頃までに會場に入りて、御婦人方には工業館や美術館ほどの興味はなからうが、正門の右方なる農學館、林業館、水產館と次第に見了りて、通運館に行き、機械館に行きて、暫らく庭園の邊りに休息して、參考館に入り、次ぎに加奈阿館などに行けは、午時になるから、晝食をすまし、工業館の外側を週りて、カアマンセラ孃の不思議館に行くのである。カアマンセラはガマンセロ（我慢せろ）だなどと惡口をいふ新聞もあるが、確に見物の價はある。予は餘興中第一の見物は不思議館にあると斷言することを憚らない。不思議館を出たときはモー三時であるから、クルリと廻りて水產館と通運館との間を通つて、植物



メリーゴーラウンド　（次號說明）

室に行くと、種々の花が咲いて、異香馥郁として居る。其處をまた通り過ぐると家禽室がある。それから花卉盆栽苗用地を過ぎて、西第二門から博覽會を出ると、各府縣の賣店がある。こゝで御土産物を買ふのもよいが、それよりも賣店の前を通り

拔けて、坪井博士の考案に成つたといふ人類館を見なければならぬ。朝鮮や、臺灣や、琉球や、アイヌ人などの人种が、別て稀らしいといふではないが、各々其家居の模樣と、風俗を、そのまゝに寫し出し



不思議館　（次號說明）

たものであるから。一寸面白味がある樣に思はれる。追々は天竺からも、新嘉堡からも、二三の土人が來るといふことであれば、益々賑ふことであらう。

呉々も注意して置くのは、餘り慾張りて、すべての品物を見やうとするときは、唯だ氣と心があせる許りで、却つて見落しのあるものであるから、それよりも己れに趣味のある品物に氣を留めて、その他の趣味なきものは、大概にして見過すがよろしい。これが恐らく、大博覽會を見物する秘訣である。

次に半日を費やして行かねばならぬのは、堺の水族館である。難波停車場又は今度新に設けたる博覽會停車場から、南海鐵道に乘車すれば、二十五分間たつかたゝない内に堺の停車場に着くので、それから凡そ七八丁程行けば、海邊となる。此處が則ち大濱公園で、水族館は其内にあるのである。さて三錢で入場券を買うて、園内に入れば、前は渺茫たる大海で、後には小丘が左右に控えて居て、一望快濶明瑩にして、頗る壮快の思がする。園の中央には神女の噴水器があつて、其傍には種々なる花卉草木を植込みて、路は其間を通じて居る。その道を傳うて行けば、白堊の洋風の建築物があつて、これが則ち水族館である中に這入つて見ると、第一槽から、三十槽までの間にいろ〱の



温室内の花卉

魚族が浮かんで居る。仕掛けは浅草の水族館と同様であつて、玻璃越しに横から見るのであつて、常に上から細管でもつて、鹽水を送つて居るから、喰喁浮游の様は勿論、抱き合ふて横臥したり、グル〳〵と一團になつて、砂中に潜り込むだりして居る様が明かに見ゆる。殊に手長蛸が岩角から逆立ちをして、妙な目付で見物人を凝眼む風情は、一種の愛嬌である。海驢と、膃肭臍とは何れも二疋づゝ、隣合せになつて住むで居て、時々妙な聲を出して、見物を驚かすが為に、まだ見たことのない人の為には、めづらしく見えるが、膃肭臍の方には臭氣があつて、長く立ち留つて居るには堪へられぬ位である。外面に出ると天然の丘もあれば、築山もあつて、其處此處に四阿やベンチがあるから、暫らく休息して、海の景色を眺望する時の心地は、實に言ひ難い位に愉快である。

堺にも名所舊跡が多いが、妙國寺の蘇鐵を見て、それから歸途に住吉驛に下車して、たゞ青々と松ばかりと歌ひはやされたる住吉の濱邊を散歩するのが、先づ一番であろう。

これで博覧會全體を通つて見たとして、それから婦人方の目に付き易き工業館や美術館の陳列品のことと、おもしろい餘興の話は紙面の都合もあるにより、次號に掲ぐることにする。

（未完）



小說

櫻人

柳川春葉

（上）

かゞなへば五年の昔とは成りぬ、此身が十五の春も四月の此頃、一期の大事ときそひし小學校の卒業試驗も終り、曉の免狀授與式も漸く濟みたる其翌日なりき。

父と兄とが家業の桶造る店先に、立派なる車のはたと止りたり。誰も來べしとは思ひも寄らで、妾は縫物の手つだひに氣を取られて居たれば、父樣慌だしう中仕切の障子明けて「お組、其方のお客が見えたぞと、喚かるゝ。何人かと驚きながら立出でゝ見れば、中谷の勝子さま「やれお懐可しや」と驅寄りて手を取らぬばかりに喜ぶに、彼方も同じ心か、女氣の先づ涙さしぐまるゝこそゆやしけれ。さるは幾年月を逢はで暮らせし友達の、稀に訪れ來しにもあらず、昨日まで同じ學の窓に机を並べし人

の、顔見ぬ一日も無かりけるものを、など斯ばかり心の立騷ぐらむ。先づ此方へと奥の間に導きて、埃に衣や汚れむと、そゞろ恥入る家の家業ぞかし。

「さて貴方も妾も今日の嬉しさ。お祝にとて參りたり。」と彼の勝子さまは言も自と改りて、昨日に變る擧止の、何時か大人び給ひしも憎かりき「それなれば此方よりもお邸へお訪ね申すべきに、何くれ取紛れて先を越されしが口惜し。」と云へば「貴方は元來忙しきお身、妾は用も無き人なれば、今日は遊びに來まして、お邪魔に成らずば夕方までは長話を爲るつもり。」となり「何の邪魔などゝは思ひも寄らねど、お遊びにとならば如恁いぶせき家の興なさ。それ御承知なら夕が夜中までもお引止め申すべし。」と笑ひぬ。

勝子さまと妾とは同じ七歳の時學校に登りて、今迄八年の春秋を、變らぬ交は何時も人に羨れぬ。數多き友達何れも親しからぬは無く、勝子さまも妾も話する對手に事缺くにはあらねど、如何なる前の世の契かありけん、妾は彼の君程慕しき人は無く、彼方も亦妾に勝る友は持たずと常に語り給ひぬ。されども心苦しきは、中谷といへば此區内に一と云はるゝ素封にて、殊に勝子さまの父君は久しき前より代議士に撰ばれ給へば、その譽も世に高く、何事も知らぬ小供さへ、其愛子の君に親むをば、身の榮とは思ふめり。然るからに妾が取分け睦じきを、人の蔭口に惡しう沙汰するを聞く事あり。又自らも身を顧れば、我は賤しき桶屋の娘にて、なか〳〵然る際の交際を爲べきものにはあらじを。それ是思ひ合せて、時には此方より遠ざかる事もありしが、何時も斯る折には勝子さまの方より訪れ給ひて、我身のつれな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さを怨み給ふぞありがたき友の情なり。

八年の月日は長かりしかど、我等が中には一度も言爭ひし事だに無く、昨日卒業の免狀まで、席を並べて授けられしが、さて是より後は二人とも立別れたる身の程、彼方は中谷代議士の三の姫君、妾は猶且桶屋の娘なりけり。

斯うと思へば今日の物語も自ら悲しう成りて、左右に聲もうるむに、彼方も同じく滅入りて「此年月は貴方もわれも一日逢はねば心安からざりしものを、今は右左、一足づゝに隔るべき岐とは成りたり。」と淚拭ひ給ふ。勝子さまは妾が小學校を卒へたれば、はや學問に別るゝ事を知り給へばなり。

「又それを言ひて泣かせ給ふか、何れ生涯一所に暮す事も成らぬものを、一度は如恁思ひも爲ではかなはじ、それも百里二百里の遠い處へ別れ行くではなし。つい目と鼻の間に居て、戀しく成れば何時でも逢はれるものを、貴方は學校へお通ひなされ、妾は家に居るも自からな境涯、如何に一所に行かうと云うても、妾の身では此上の修業は用なければ、父も母も許す事はなし。又許されても望はあらじ。人間は程々のものなれば。」と心強く言うては退けしが、妾とて文讀み字を書く味を覺えしものを、何で學問を捨て度しと思はう。出來る事ならば此先途も同じ方にと、それとは無しに勝子さまの手を取りて泣いたりき。

此時の事思ひ出せば今に悲しや。五年の昔の我に今一度は歸りてむものを、あはれ月は圓に、花は紅き其頃の樂しさよ、人の世の春は又返らず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（下）

人の身の春は返らねど、花咲く年は五度めぐり來て、その間の世の變遷こそ驚かるれ。中谷の主は我十六の年の暮、未だ五十を多くも越え給はぬに世を去り給ひしを、知る人は皆足ずりして惜みあひぬ。斯くて後の彼のお家は語るも悲し、惡き心もてる親戚の人々寄集りて、世繼の君の年若きを幸ひに、然しもの大家を形も無く爲て退けつと聞く。其翌年の夏の初、お家は四谷の奥とやらむに引移り給ひぬ。其頃までは日毎には往來もせざれ、土曜日曜には彼方より迎もて呼び給ふ事あり、妾より推して遊びに行く折もあり、琴の温習、歌留多の會と昔に變らぬ交誼なりしが、嵐の後の世は淋しく、四谷に籠り給ひしよりは、如何に浮世を辛しとや見給ひけむ。あるは今の身を耻しとてか、勝子さまはさまでに親しかりし妾をも見捨て給ひぬ。見捨てられても此方より訪れて慰めまゐらすべきが定にはあれど、斯くまで世を狭く爲給ふをば、なまじひに昔を思出させ申さむも心無き事なりと、彼方より音信なくなれば、妾は心ならずも其まゝに打過ぎたりしが。

其年の暮十二月、縁ありて此家に嫁ぎし折、あはれ勝子さまに知らせばやと、たど〳〵しき筆に文まで認めしが、其時は久しう中絶し上なれば、今は彼君の心も測りがたく、又己の幸ひをば是見よがしに吹聽するぞと思さむも辛しと、言はでかなはぬ此事さへ、遂に告げずに了ひたりき。

それより三年の間は、去る者の日々に疎き譬、何とは無く身にかまけて、思ひ起す事も無くてぞ過ぎぬる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今日は卯月中の日曜、上野隅田の花も見頃とあれば、何に就けても騒立つ都人の常とて、一年の遊樂は三日の櫻と種々の興を盡して、西より東より集ふ人は、彼の蟻の觀音まゐりするにも似たり。竈の前にあたら二十年の春秋を燻ゐる世話女房も、せめて一日は花見る群に出でよと、夫の心附のうれしく、去年生れし初子のお梅を連れて、隣のお絹さん、從妹のお道さん誘ひ合せ、早晝食認めて家を出でぬ、花曇とはこれか、空は一面に薄色の幕もて蓋たるやうなるに、少し歩めば頭の痛むさへあるに、先刻方より吹出たる風強く、大路の砂を捲きあぐるも心地よからねど、同じ方角へと急ぐ人は益〻多く、花見る頃の天氣變らぬ間にといとゞ勢ふも面白し。

上野の一重はやう〳〵散り初めて、清水堂、大佛のあたりは寒からぬ吹雪に行なやみしが、百眼懸けたる醉人の角樽を肩に櫻翳して躍るを、頑是なきお梅が手を打ちて喜ぶに、人の親の何時か子供心になりて、彼方此方とそゞろあるきの、時も移りぬ。落花の御山に夕暮の鐘かう〳〵と鳴響けば、花には憎き鴉が人に怖ぢてか梢々を飛まはり啼くも心忙し。

家路は遠し、春の夕の風寒ければ、夜の來ぬまにいざ歸らむと言合せて、お梅をお道さんの脊に賴み、三人打連れ動物園の前より竹の臺へ出れば、其處の廣場に旗樹て、幕張まわして、七八歳より十四五までの少女ばかり幾百人運動會催しゐたるが、今しも散會すると見えて、種々の花摺衣二列に並び、敎師の命ずるまゝに、三橋の方をさして歩み出さむとはしぬ。

それ見ても可懷しや。妾も一度は彼樣した春もありしものと、佇みて見送る行列の中程に、束髪に白き

リボンを結び、海老茶の袴着けたる二十年ばかりの美しき女教師が、一人俯きがちに行くを、妾は一目見るより呀とばかり打驚きつ。

それよ彼君、慕しき勝子さまと驅寄らむとせしが、萬一や他人の空似かと、又行過ぎし後姿を打目成れば、あはれ昔に變りて窶れ果て給ひしが、擬ひも無き彼の君なりき。

さては稚き折、末には音樂の道に名をも揚げむとありしが、其後の御不運に今は小學校の唱歌敎ふる身とはなり給ひしか。妾が此處に居るをば知らず、氣の所爲か悄々として行き給ふ。呼かけて名乘らむと二足三足驅出せしが、又思ひ返せば、彼のお育ちがらゆゑ、彼の御氣性ゆゑ、今の落目に古朋輩に遭ふをば、定めて耻かしと思ひ給ふらむ。殊に多くの人を護りたまふ身の、如是處に立話も如何と、其まゝにて本意なき別れ。

戀しや彼の君。今日を他にして又何時か逢ふべきと、其處に立盡して泌々と泣くを、連の衆は怪しみて何くれ尋ねらるゝも氣疎ければ、唯彼の稚き人達見るにつけ、妾が昔を想ひ出されてとばかり、見送る方は花の雪、木の下陰は何時しか暮れて、今日は十六夜の空朧々と、月に成り行く櫻人。

（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



柳　徳大寺實則

あたゝけき風になひきて糸やなき　春日とゝもになかくなりぬる

樵路春草　津輕承昭

しつの男かかよふ山路も雪きえて　青みわたれりはるのわかくさ

森若草　竹屋光昭

稲荷山もりのしたみちわけくれは　あまたすゝなの生いてにけり

河春風　宗重望

六田川かはそひやなきもえいてゝ　そこもみとりの春かせそふく

朝春風　宮地厳夫

此あさけそらうちかすみさく花に　さはらぬほとの春かせそふく

路柳　荻原厳雄

うちなひく柳のいとのなかなはて　末はかすみのたちかくしけり

春風寒　小出粲

武藏野の名殘なるらんみやこ大路　はるなほさむきにしの風ふく

閑庭春草　植松有經

さとの子か來て摘ぬ日は無りけり　我かくれかのにはのわかくさ

湖邊柳　大口鯛二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

朝妻のかたやまきしのやなきはら
うみのみとりにつゝく春かな

江上春風　近衛貞子

のりすてし入江の岸のやかたふね
ひとりなかれて春かせそふく

短艇競漕　須蜂賀隨子

後れぬとみれは先たつきそひふね
いつれか急くかひはあるらむ

濱霞　前田朗子

貝ひろふあまのうなゐの聲はして
はまへのとかにたつかすみ哉

春雨　本多芳子

二日三日ふりつゝきたる春さめに
をかの早わらひ萌むとすらむ

垣若草　小池道子

散つみし木の葉はくちてこしは垣
小草あらたにみゆるころかな

落梅風　保科節子

きさらきの空さえかへる山かせに
雪とみたれてうめのはなちる

車中春風　中村禮子

花すみれもちつゝ眠るみとり子か
くるまのうちに春かせそふく

賴山陽　小川直子

つくしかた雲か山かとたとりけむ
言の葉ひろくよにのこりけり

新井白石　服部磯子

一すちに三のいましめ身にしめて
かきつくしたる水くきのあと

早春柳　三宅龍子

あしかきの柳のいとのめにたちて
日影とゝもにのひしはるかな

四月十五日兼題歌作例　雁歸

撰者　黒田清綱

何となく旅おもほゆる此のごろの
春日に雁もおもひ立らん

山岡良旗

ふるさとを思ひ出でゝや咲く花の
都をよそに雁の行くらむ

月清き秋の夜半、南を指して渡り來し雁の、彌生の空の花盛り頃、北へ行くものなれば、故郷に歸る、常世へ行く、越路へ歸る、花を見すてゝ行くなど詠むなり。今は昔、漢の蘇武、虜となりて、胡の國にあること十九年、坐に故郷の戀ひ慕はるゝ餘り、雁の足に文をつけて放ちけるに、其の文途に故山に屆きだる故事より、雁の玉章、雁の使ひ玉章なかけて行くなどゝも云ふ。偖は、又彼の寂蓮法師が

今はとて田面の雁も打ちわびぬ
おぼろ月夜の明ぼのゝ空

と詠ぜられし如く、此の題、必しも歸ると云ふことなくも何にまれ、春の歌だになれば、苦しからずかし　（超舟子）



四月一日兼題

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

（先生今尚伏蓐し居らるゝに付門弟子の代撰に係る）

行路花

天

いそかすはなはてのさくらゆふ月の
かけふむまても見てましものを

三河國室飯郡下地町　永井さい子

地

さきつゝく花よりはなのしたかけに

東京下谷區谷中清水町十九番地　河合象子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いくたびこまをとめて見つらむ
麹町區元園町一ノ六　戸塚てつ子

人

甲之部

何處よりなかめゝつらんゆくさきを
いまこしみちもはなのしろたへ
東京　伊能りう子

宿からんこともわすれてゆくみちの
はなにゆふへのつきをみしかな
肥後　田代艶子

ちきり置し友かりいそくみちなから
こゝろそとまるはなのしたかけ
東京　安井きやう子

道のへのはなのこかけにやすらひて
のりおくれぬるわたしふねかな
三河　服部萬子

ゆく道のさくらをみてもよし野やま
こゝろにかゝるみねのしらくも
若松　川島謙子

友かきはいかにまつらんと思へとも
ゆきすきかたきはなのしたみち
東京　金原玉城子

さきみちてにほふさくらのした道は
くものなかゆくこゝちこそすれ
名古屋　瀬木せき子

乘りてこしくるまもいまは歸さまし
こゝよりさきはさくらなりけり
札幌　山田靜子

朝な夕なゆきかふみちにはなさきて
わかころもてもにほひぬるかな
三河　服部正子

こゝろなき人や手をりしみちのへの
はなのさかりはまたすきなくに
東京　松本さく子

をくるまの前にうしろにさきにほふ
はなのなかゆくをかこえのみち
東京　後藤きよ子

いそくなる旅ひとさへもてまとめむ
はるかせかよふはなのしたみち
札幌　澤　鈴　子

うす雪をふみていでしかみやこ路に
かへればはなのにしきなりけり

乙之部

ゆきゝする人のたもとにかゝるまて
ちるやゝまちのはなのしらゆき
東京　椎　野　鋭　子

はるの日はなかき旅路もあかぬかな
はなよりはなにゆくこゝちして
若松　會　津　常　子

きゝすてゝいなむも惜しゝ路の邊の
はなのくもまのいりあひのかね
東京　敷　島　うた　子

もゝとりの聲もかすみてきこゆなり
かへるいへ路のはなのさかりは
肥後　佐　々　小　琴　子

春の日のうれしきものは行くみちの
はなより出てゝはなに入るなり
出雲　岩　倉　より　子

うくひすもあひやとりせし花かけは
あめはふれともいてうかりけり
東京　三　好　珍　子

春の日のなかきもあかてゆきくれん
さくらつゝきのはなのしたみち
埼玉　前　野　壽　賀　子

みちの邊の花にこゝろのさそはれて
かへさも知らすなりにけるかな
東京　平　尾　あ　さ　子

過きかてに花のしたみちたちよれは
おなしこゝろのひともありけり
東京　内　田　き　み　子

けふこそはとくかへらんと思ひしに
またもくらしぬはなのしたかけ
遠江　藤　田　は　な　子

をちこちの花にひかるゝこゝろより
かへるいへちもわすられにけり
山形　玉　生　照　子

いそきゆく旅路わすれてひとことに
たちまよふらんはなのしたみち
下野　芦　谷　りう　子

ゆきかへりいそく旅路もわすれけり
こゝろひかるゝはなのしたかけ
大隅　久　留　ひ　ろ　子

入あひのかねにこゝろはいそけとも
おりてゆかましみちのへのはな
大隅　久　留　春　枝　子

さして行く路をわすれておもふとち
なかきはるひをはなにくらしつ
大隅　古　城　へ　い　子

たちとまりみぬ人もなしみちのへの
さきのさかりのやまさくらはな
肥後　坂　本　菊　子

のるこまのひつめの跡もみにぬまて
みちもせにちるはなのしらゆき
肥後　坂　本　竹　子

ゆくひとをとゝめ顔なるさくらはな
みちのちまたに咲きにほひつゝ
肥後　坂　本　道　子

旅ころも今朝たちそめしみちのへに
さくはひとへのさくらなりけり
札幌　山　田　ふ　み　子

かへるさも忘れて野路のさくらかり
こよひはゝなにやとやからまし
東京　椎　野　秀　子

ゆけと〱つきぬさくらのした路は
あしのつかれもわすられにけり
東京　北　島　功　子

はなかけをたとり〱てたまほこの
みちのとほさもおほへさりけり
熊本　日　高　か　ず　子

たまほこの道のゆくてのさくらはな
東京　山　口　琴　子

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さきつゞくちもとの花をわけゆけば　みきひだりよりそてにかをれる　東京　杉田繁子

ふりはへてとふたにあるをさくら花　くもにのりゆくこゝちこそすれ　東京　石野敏子

かへさにとおもひてすぎし岡そひの　みちのゆくてに見るそうれしき　東京　田中よし子

菅の根のなかきはるひも行きくれぬ　花のしたみちくれすもあらなん　東京　林榮子

花ことにたちとゞまりてみましかは　にほひこぼるゝはなのゑまひに　東京　戸木のぶ子

急きてもこゝろうかれてなにとなく　けふもこゝにてひをやくれなん　東京　山口すま子

ゆくみちも又ゆくみちもさくらにて　はかとりかれしはなのしたみち　東京　林環子

雲雀あかるかたのゝ末のつしやしろ　いやおもしろきはるの野路かな　埼玉　横田秋子

さくらかりわけいるみちにさく花は　これよりはなのみちはありけり　美濃　吉村せむ子

ゆく人のそてもひとつにとまるかな　まつうれしさのはしめなりけり　長崎　八尾いへ子

山しつのこゝろなき身のそてたにも　みちのへにさくはなにひかれて　岩手　藤澤とみ子

山路をもあかてこゆけりけふもまた　にほふさかりのはなのしたみち　岩手　藤澤みつほ子

さくらさく道のゆくへはいそかれと　ゆくてのはなをわかともとして　三河　宇津野縫子

あすや見むくれかゝりたる山路にて　はなにとまりて日をくらしけり　三河　河合ぬひ子

さきつゞくはなのしたかけゆく人の　おもはすはなのさかりにそあふ　三河　本多きさ子

春の日のなかきもくれぬあすよりは　たちとまりけりみちもせきまて　栃木　青木たま子

道のへのはなのさくらにあくかれて　はなの木かけやよけてゆかなむ　和泉　福原菫子

おのつからゆきゝの袖もにほふなり　とふへきいへもとはてくらしぬ　東京　安井あや子

山さくらはなのさかりにうかれつゝ　すみたかはらのはなのしたかせ　東京　安井せつ子

いそくへき身さへわすれて幾たひも　ゆきゝもあかぬこかれぬのさと　尾張　後藤のぶ子

見わたせはかすみか雲かわかぬまて　こゝろひかるゝはなのしたみち　下野　瀬下知賀子

行くみちはまた遠けれとやまさくら　さくら咲きけりみちのゆくてに　下野　和賀井芳子

行くさきはまた遠けれとやまさくら　みすて兼ねたるはなのかけかな　下野　萬生定子

とも人のまちわひぬとばおもへとも　さきのさかりはいそけさりけり　下野　岩間きよみ子

何となくこゝろのこりのせられけり　見すてかねつるはなのしたかけ　東京　山口春子

路すからこゝろのこまにうつむちも　いま來しみちのはなのさかりに　秋田　三浦ふさ子

さくら花さきのさかりはたびごろも　たつなもはなにゆるみけるかな　肥後　德永萬壽子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そてまてにほふはなのしたみち

こゝろひく路のさくらにあくかれて　肥後　徳永多瑠子
なかきはる日もくれにけるかな

みちすから花にあそひてはるの日も　肥後　徳永廣子
みちかくろゝはなのしたかけ

丙之部

樵ひとになりのこされてみちのへの　肥後　田代喜和子
あたりはつかにほふはなかな

菜の花にあきやしつらむみちのへの　下野　瀬下喜代子
はなのこかけにてふもつとひて

いそきゆく事もわすれてみちのへの　東京　松村あさ子
はなのさかりにときをすこしつ

ゆけと／＼行ともつきぬなかめかな　大隅　宇都常子
はなさきつゝく野へのほそみち

うちかすむかすみの衣かしらくもの　栃木　川連秋子
はなさかりなるはるのやまみち

くれぬまとかへろ家ちもさくはなの　秋田　古瀬りく子
したゆくときはいそけさりけり

まなひやにかよへろ路のみきひたり　肥後　佐々有鄰子
はなのなかゆくはるのあけほの

とつくにの人さへつゑをとゝむまて　遠江　夏目一枝子
みちのゆくてのはなさかりかな

立よりてゆかはやはなのよし野やま　埼玉　前野ふさ子
はるのたひちのいそかさりせは

行けと／＼花にはてなきかつしかの　東京　川村松子
このさとすきむこゝちこそせれ

それもよしこれもとはなのした路は　東京　吾妻ちか子
たとろみちさへあやなかりけり

花にのみこゝろとまりてかへろさの　東京　館脇ます子
みちの遠さもおもはさろらん

うれしくも野こえ山こえゆくみちの　大隅　宇都一枝子
かたへは花のいまさかりなり

こゝろなき人やなりけんみちの邊の　大隅　宇都よし子
はなのしたえはまはらなりけり

かへりくろ道のかたへのさくらはな　大隅　宇和島愛子
ひとえたをりていへつとにせん

黑かれなたとろくろまになかりせは　大隅　大津眞子
なりてゆかましみちのさくらを

たひゝとのまそてやいかに匂ふらむ　但馬　田尻保代子
ゆきゝのおかのはなさきしより

しらくものかゝろとみえし峰こえて　東京　椎野ぬき子
いつしかはなのしたをゆくなり

春かすみたなひくやまのみちのへに　肥後　坂本游子
さけろさくらのはなのゝとけさ

ゆきかよふ人もまれなろほそみちに　東京　荒井滿武子
たれをまつらんはなのひともと

行かよふひともこゝろやとゝむらん　東京　荒井千代子
みちもせにさくはなのこかけに

野路ゆけはみきにひたりにさくら花　横須賀　岩橋久子
かすみにもれてさきにほふなり

てふ追ひてたとりゆくなろ畑みちに　伊豫　梯たけ子
おもひかけなきはなをみろかな

急くなろみちとし知れとなか／＼に　安藝　和佳千鶴子

みすごしがたきはなのおもかげ

越へてゆく八重の山路も咲くはなの
さかりはいとゝにきはひにけり　秋田　佐藤かつ子

こゝろなきわらへのそても匂ふらん
はなさくころの野邊のかよひち　東京　椎野薫子

さき匂ふさくらのはなのしたみちを
見つゝゆくまにはやくれにけり　東京　椎野清子

しはひとも歸りちおそくなりぬとや
はつせのやまちはなさきしより　奈良　澤田よし子

みやひなき人さへあしをとゝむまて
つゝみのさくらはなさきにけり　茨城　中里げん子

しろしらぬゆくも歸るもむつましく
ともにいこひてはなをみるかな　兵庫　泉久良子

ともすれはいそかるゝ身も忘られて
いこひかちなるはなのしたかけ　東京　戸賀崎治子

みちもせにゝほひこほるゝさくら花
ゆきかふひとにねたならせそ　相模　森田葉留子

としことにあまたさくらを植そひて
さとのゆきゝもはなのしたみち　東京　田中千代子

みな人のをれるみちのへさくらはな
のこるはたかき木すゑなりけり　山口　村上操子

さくら花見すてゝゆくもをしけれは
ひとねたをりていへづとにせん　山口　田村多豆子

ちるはなもひらくもゆかし春のひの
なかきすみたのかはそひのみち　東京　山本茂子

行くれぬ今よひはこゝにかりねせむ
ゆふかせかをるはなのしたかけ　下野　井上芙蓉子

春のきてはなさきしより野にやまに
あらぬかたにもみちはありけり　埼玉　横田音羽子

色も香もふかくそめてしさくらはな
ゆきかふひとのそてやひくらん　岩手　藤澤もと子

くろまよりかちにてゆかん道のへに
いまをさかりのはなをみかてら　横濱　山内多滿子

花見つゝゆきかふひとのおほきかな
つれにさひしき小みちなれとも　肥後　田代綾子

ゆきかへる人をとゝめてはるやまの
みちのせきもるはなのひともと　東京　山本梓子

おもふとち打つれ立ちてゆくみちの
かなたはいまぞはなさかりなる　下野　森田みと子

こゝによりかしこによりて永き日も
はなのこかけははかゆかぬなり　常陸　岡田蔦子

世の中はなへてさくらとおもふまて
みちのゆくてもはなさかりなり　下野　大木和賀子

はなさかぬみちこそなけれ山さくら
ゆきと見つねゝのほろたか根は　下野　和賀井花子

さきにほふはなよりはなの下みちは
行けとも行けとあくときのなき　下野　花方米子

ふみわけて何れに行くもさくらはな
さきにほはさるみちなかりけり　下野　木宮愛子

ゆきに行くいつれのみちもさくら花
咲かぬかたなくなりにけるかな　下野　中村清子

母うへのおゝせわすれてみとれつゝ
みちのゆくてのはなにくらしぬ　東京　池田靜子

うなゐ子もあなうつくしと行く道の　下野　民屋信子

歌の庭

はなのこかげにたちとまりつゝ

右にゆくみちなわすれてさくらはな　秋田　三浦さわ子
さきしひたりにまよひいりけり

玉まこのみちとほしともおもほゑす　宮城　大槻初音子
はなよりはなにうかれゆくかな

みちすから花のこかけにひまとりて　宮城　大槻慶子
はやゆふくれとなりにけるかな

古さとのはゝなたつぬて行くみちに　周防　大角志賀子
はからすもさくやまさくらはな

なるもなし山路のさくらしかりとて　松山　上原のふ子
見すてゝゆくもくやしかりけり

三とせふりこゆる山路のいそかるゝ　東京　近藤はな子
はなまなもるゝなつかしのいへ

いそくもとしはしやすらひ見て行ん　東京　田中ちゑ子
はなのしたかけいへもありけり

あさゆふなゆきこふみちのさくら花　伊豫　吉良貞子
あはれめてたくにほひぬるかな

へたてなき友とうちつれみちのへの　北見　中川伊代子
はなの木かけに日なくらしけり

たまほこのみちゆく人もみちのへの　肥後　德永嘗枝子
はななめてつゝいつちゆくらん

ほろかけぬくるまにのりて路すから　大隅　宇都涙子
ところの〳〵のはなな見るかな

大路ゆくひとのたもともにほふかな　肥後　德永下枝子
みやこのはるのはなさかりには

なにしおふ花のさとてふよしのやま　遠江　夏目松枝子
わけゆくそてにちるさくらかな

道のへのはなさくころはゆきゝする　石狩　布廣しま子
いへぢわするゝこゝちこそすれ

道のへに行きゝのひとなひきとむる　秋田　古瀬とよ子
はなのちからはいみしかりけり

おふみよのみろひらけゆくたひ人の　肥後　志方圓子
ゆきゝもとまるはなのしたかけ

ゆきゝする路のへにさくさくらはな　兵庫　石田さだ子
なりてゆくありこまつなくあり

山越ゆてうばがちかやのかはそひに　東京　後藤ちか子
ちるはなかけないりあひにすく

ちかひてしとものやかたな尋れんと　下野　岩間ひさ子
ゆくみちの邊にさくら咲きけり

見わたせは雪かとはかりわかぬまで　横須賀　岩橋花子
みちのゆくてはゝなさかりなり

ゆきと行くみちみなさくら咲きいて　下野　民屋賀久子
はなのさかりになりにけるかな

たらちれにかたらまほしと思へとも　下野　佐藤文子
はなのしたみちいそけさりけり

さきにさき行く道つゝきつらなりて　下野　大木善子
さくらにほはぬかたなかりけり

とくかへる家路わすれて咲きそめし　下野　民屋美津子
行く手のみちのはなな見しかな

ほの〳〵とかすめる野へなわけ行けは　丹波　大槻ふさ子
ゆかしくにほふやまさくらはな

日もすから路のゆくてのさくらはな　長野　小泉みつじ子
かさゝぬそてにかなりこそすれ

里ひとかゝよふあせみちわけゆけは　丹波　大槻まつの子

朝ゆふに行くみちのへのはつさくら　むかへかほなるはなさくらかな　丹波　大槻　まつの子

ゆきやらてなかめくらしつさくら花　けさうるはしくにほひてにけり　横須賀上　田　雪　子

はらからとたもとつられて行まゝに　はなのいろかにかすむのとけさ　下野　菅沼　みつほ子

ゆきかてらかたへを見れは咲く花の　やまぢしろくもはなの見ゆなり　下野　菅沼　すみれ子

のろこまのあかきにまかせ行く道の　ゆきふる如くみたれちるなり　下野　壬　生　德　子

たひ人をなくさめけにもみちのへの　かなたにかすむばなのしらくも　伊豫　梯　京　子

さくらやたれかうゑおきつらん

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

落花を見て感を記す

天

熊本市光琳寺町　日高かず子

「上にも下にもちら〳〵ほろ〳〵」とうたふ少女の聲にふと心うつりて、障子あくれば、夕ぐれの身にしむ風に昨日までも、今朝までもめかすめでにし花の、軒に咲けるも、築山のかなたに匂ふも、小蝶とまひ、雪とふりて、とり〳〵散りかひつゝ池水に再び榮は見するものから、やがてながれゆく、あな、あはれ〳〵何にうしとてならん、雨にやもろき風にやつらき、散ればぞ誘ふ、誘へばぞ散るといへば、何れをうらまんよしなく、己が心さへちり〳〵になりぬるぞうたてき。げに人の心ばかりあやしきものはあらじ、うれしき時は笑みこぼるゝとも見えうき時はとゞめあへぬ涙とふり、さてはあだありともいさぎよしとも向はん折々につけて同じ思こそせね。散りぬるが、いと面白くて花ひらを糸もてぬきしを心なしと笑はれたる。幼心にもなはめづるあまりにやありけん。今は昔となりぬ。とし〳〵の花におくれ、我世の春をいつかはとまちつるに、指折れば早も定まれる年の半を經し身今更におどろかれてなむ、行末長しとおもひし年月も過してはや夢のやうおぼへていみじかゝる世に、花のことうるはしくにはひ出て散りての後もかくはしき名を千年の後までのこさんはいとかたく、五十路もたらはぬ心地ぞする。さればよく學びよくつとめ、女の德をみがくまを己が春とおもはゞ、夜半の嵐のさそふともなとか

うらみわらんや。花にもましてをしまれんかし。

地

遠江國見付　藤田はな子

世に花てふ花は多かれど、最とも人に稱へらるゝは、櫻花にこそ、梅の花薫り惜しまず百花にさきがけしより、櫻待つまの心やいかならん。九重の御園奥深くさきいでたるは、いはずもがな、賤が伏屋のやれ垣のほとりに、われひとり春しりがほにさけるもあはれふかし、さるを、見るま程なく、一陣の風にさそはれて、一片の名殘だに止めず、散りゆくは、げにまちたる甲斐ぞなき、されどかく疾く散ればこそ、世の中に絶えて櫻のなかりせばと歎ふ人もあるなれ、もし風吹くも雨ふるもよそにして、梢にのこり色あせし花の長く散ることなかりせば、たれかは、これをめではやすべき、まことや、我大和男子の一旦事あるにのぞみて、義勇公に奉じ、君のため國のため、我身の幸は更なり、かゆるにものなき命を惜まで進む健氣さに、まさるとも劣らましや、唐人の死となりて全からんより玉となりて碎けよとは、かゝる事をやいふらん、人もこれと同じく徒らに香に醉ひ色にあくがれて、名利のためにのみすごさば、色あせし花の長く梢にのこれるが如し、いと口惜しき限りになん、さるを世にはかゝる人の多きぞうたてき。

人

東京芝區三田四國町十五池田方　池田靜子

妾は今落つる櫻の花を見て、切なき思ひにしづみぬ。あはれ落花よ。あれは如何にしてかくあはれなるよ。昨日はあまたの公達あるはおほくの姫君にめではやされて、錦をかざりしも、今日はあまたの人々にふみにぢられて、見る影だにもなきものを。つひにはうつろひ果つべき花なれど、まことうらめしき心地ぞする。

あはれいとしの吾が母上は、恰も去年の此頃に、敢へなく天にのぼらせ給ふ。あゝ浮世のならひ、いつしか消ゆる命とは、かねては知れど、いかなれは母上、したふ姿をあとにして、歸らぬ旅に赴かれけむ。散り行く花を見るにつけ、過ぎし事ども思ひ出で、いとも悲しき思は湧き出でぬ。あはれ咲きそらふ花の一ひら二ひら散りそむるもいとおもはせがほなりや。春ごとに打つれて、ここかしことあくがれつゝ、遊び暮らせし昨日こそ思ひ出づれば盡きぬ涙のたねにぞあるなれ、など

む事なく行く水は、去年に變らず流るれど、花下陰に樂みしわが母上の面影はいづこの空にや隱れ給ひけん。いとゞこひしさいやまさり、立去りかねて彳めば、夕日は西にかたぶきて、名殘の光いろうすく、諸行無常の鐘の音は心の底に鳴り響き吹く風寒く身に沁みて、空に知られぬ花吹雪。袖にしたる涙の露。

(以下原稿到着順)

長崎　八尾いへ子

野も山もわかぬ迄霞深うたなびきて、小川に流るゝ水の音も打はれ蔭、山吹など若芽もえ出てゝ、いと長閑なるに、かくてもかなと思へる櫻の花も雪とのみ散り行くは春のあはれの限とやいふべからん。されどちる樣のいさぎよきは、武夫の心にもたとへられていさましくそあなる。残りなく散るそめでたきなともかゝる折にや詠みたんめり。さかぬ間をおそしと恨み、ほころびてはあく事なう、春の日の長きもよそに過すめるを、雨にぬれ風にさそはれて散りゆく花のもとには、あはれを惜しむ人の少なきを、心あらはうたてくや思ふなるべし。人もときめきたらん折は。ゆかりやからさへ絶えすおとつれぬるを、思ひがけなき浮世の風に、家も身もうつろひたらんには、朝夕かしつきし人さへ、よそに成ゆくそうたてき、けにさくと見しまのとかこちけん言葉も、繰返され、さかりなるは必らずといふ、世のあちきなきことわりもおもはせじとや風の音高く他處の花さへ、わか方に吹てさむからしめたるそいとにくき。

山形　玉生照子

鳥部野につきぬ恨みの烟をなげくがこと無情一吹の嵐に昨日まで咲きほころびし花の散る、名殘をしさは、なべての人の心ならん。雨に思ひ、風にうれひ、愛る心は飽なくに幾久しくもかゝれかしと眺めらるゝものをあはにつれなき風にさそはれて、散るそうたてき。鳥は巣に、花は根に、歸るは自然のこゝろなりとはいへ、しばしは惜むらん、人の爲、風も心して吹なむものを、あゝ觀すれば人生は仇櫻かな。實に果敢なきは花、げに常なきは人の世なり。

松山　上原のぶ子

世にかなしくすべなきは、吹風にさそはれて、あえなくちる花になむありける。そも〳〵此花よ。またさかぬほどは、いかで〳〵と人にまたれ、咲出ては世にうへなうもてはやされ、見愛る心もうかるゝを、いかなれは一夜の風にかくもあとなくなりぬらむ。これをおもへは、すべて人の世もまたかゝりけん。朝にはうるはしとめではやさるゝも夕にはすでに老さらぼひて、遂に常なき世の嵐にさそはれて、はかなくなれるも、いと〳〵あはれなりや。されどこの花にくらふれは、七十八十の人のよはひは、いとながくはおもはれると。きはまりなき天地日月にくらぶれは、七日のさかりをも傚えぬ木すゑには、いくらもかはらざるへし。されど花はひとたびちり果てゝも、また再びさく春のあれば、はかなき恨にもあらざるべし、とおもはるゝにもいさゝか心に感するまゝを、筆にまかせてかくなむ。

肥後　田代艶子

四時をり〳〵のうつりかはりにつけても、あはれふかきは、げに春秋のながめになむ。秋の月のさやかなる、春の月の朧なる、秋の紅葉の優なる、春の櫻の艶なる、秋の野の心すみ、春の野の心浮き立つ、何れを何れと、別ちがたき中にも、いつしかとまちに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し花の、やう〳〵、咲きそろひつと、見るまに、はや時ならぬ雪、と散りしく、今日此頃の、けしきばかり、あはれは、秋こそまされ、などいひけん人も、そゞろ、涙さしぐまるゝなるべし。あはれ、昨日まで、旭の光を受けては。大和心をあらはし、松杉などのひまよりもれては、白雲か、はた、天つ乙女の羽衣かと、あやしまれ、朧月夜に、にほひては、霞をへだてし手弱めの、おもかげを見るが如く、亦なか〳〵に、すてがたき、趣きありしを、飛鳥川、昨日のふちは、今日の瀬と、かはり易き浮世に、もれで、今ははや、仰ぐ梢はあとなくなりて、散りしく花の、幾千ひら、世の無情をさとりがほなる、あなあはれ、人生に似たる此櫻よ、盛り時は、歌に、詩に、もてはやされて、花の王とも、たゝへられつゝ百千鳥を、鳴き暮させしを、一たび梢をはなれなば、見かへる人も、なか〳〵に、はてはあくたと、諸共に、汚物集まる市外の塵捨場へと送らるさこそは、花も本意なかるらめ、あなあはれ、櫻に似たる人生よ、家富み、位高ければ、知人親族ならぬも、親しみ、睦みて、蟻の甘きにつくが如く、集り来るも、一朝不幸に陷りて饑になき、寒にこゞゆんか、来りて救ふ人、夫れ幾何ぞ、知人なるも知人ならず、親族なるも、たのみがたし、之れ人生の常ならずや、あゝ今日ありて、明日なきも、亦ますらをと、櫻なりけり、古へより、花は櫻よ、人は武士、とうたはるゝも宜なりけりな、さあれ何をかなげき、何をか恨みん、とく散る　こそ花の本意なれ、いさぎよく死するこそ、亦ますらをの、望みなれ、瓦となりて全ふせんより、玉となりて、くだけよとは、古人の金言なり、何をかなげき何をか恨みん、櫻は散りても、亦盛りあり、人は一度零落すとも、亦世に出づる望あり、徒らに心を挫く事やある、いでや散りしく花を、ひろひとりて、来ん春の、榮ゐいのると共に、世のはらからに幸あれがしといのらんかな。

相模　森田葉留子

雪とながめ、かすみとみて、その姿、そのいろ香をめで、なく鶯とともに、ゆめぢをたどり、心もそらに、まよひたるに、一夜のあらしになごりなく、雪とのみぞ、ちりしける、あはれ昨日までは、鶯の羽風に、一片二片ちるに、心いためしは、何のむづかひにありけん、しばしはたゞ見まもりて、いひいでん言の葉もなく、紙まで吹きとられし心地せり、さて文机を前に、つく〳〵と思ふ心に、うかぶにつれ、世に芳名をあげ、事業のためちるをうらみずをしまぬは、いかに心ゆくわざなれや、さればこそ、れをしも大和魂には、たくへつべけれ。

東京　山本梓子

山里の春の夕くれきてみれば、入相の鐘に花ぞちりける、とや古歌の心もしのばれて、春の日もやゝくれなむとする西山もと軒くち草ふかう生ひたるふる寺のほとりさまよへは、苔のみあつきおくつきに、花はひまなく散りかゝりて時ならぬ雪もて埋みたらむごとく、あと絶へたる道はいとゝしくふみ分けがたう、鳴きてとゝめむとにや、鶯のこゑのみしけし、あたなるものと誰かいひけむ、盛あれは衰ふる大方の世のことわりを、みすなるものを。散ればこそめでたきものと人も云ひけれ、あはれ此苔の下なる人々よ、さく花の盛りにしてはやされしも、冬草のかれ〳〵に過こせしもあらむ、されと常なきかぜにさそはれては、みなおなしことなるを無下にたから多からむをねがひ、うへか上をも求むるは、ことわりしれる花の心に、おもひくらへて、はづかしからぬにや、しかはあれと、德をまなび、道をたどるは、上がうへにも、この花の妙なる色に匂ふか如く、年ごとにいよゝみがゝまほしきことにこそなど、思ひつゝけしを、をこなるさかしらことゝ、苔の下なる人々の、きゝおもはむも、つゝましくや。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛媛 南 脊 子

あはれ昨日まで、色香ゆかしとめではやせし、庭のさくらの、けさ見れば、吹きくる風のまに〳〵、名殘なう、梢をはなれつゝ、苔の上もましろにちりはてぬ、あゝ花よ潔き花よ、其心なればこそ此の日の本に匂ひ出てたる甲斐はあるなれ、さるを、かくての〻ちは見かへる人だにもなきぞ、いと〳〵うたてき。げに大和のますらをにもよく似かよひたるよ、あなゝつかしきかな、したはしきかな、いさぎよき此花のこゝろは、さらば花よ此春は別るゝとも、こん年には又けだかきすがたに、匂ひ出てよかし、我は汝が潔き色香のみかは、いと〳〵潔き心の程をもめでしたひて、とこしへに忘れざらんを。

北見 中川伊代子

むら雀のさへづるこゑに。おどろかされておき出で。朝げをすまし、そゞろありきにとて立出ぬ。そこ此所を見まはすに。あはれ〳〵。昨日までさかりなりし花は。あちこちに散りけり。あなと驚く程もあらず又も一ひら、二ひら我袖に散りかゝるも、あはれふかし。ふと向ふのかたを、ながむれば。散たる花をうれしげに拾ひつゝ行くうなゐ子あり。其様の愛らしさ。我身も一度はかゝる頃もありしよなど。思ひうかめつゝ、人も彼花にひとしく、さかりは一時。やがちる時はきたるべし。はかなきものは人の身なりけり。彼の明日ありと思ふ心のあた櫻と云へる古歌も思出されて只何となく、悲しさのむれにあふれて。云はんかたなし。いざこれよりは。我身も一すぢにまなびの道を。いそしまんと思ひつゞけて。家にかへり。なごがましくも、思ふまゝをかいしるしぬ。

東京 椎 野 秀 子

昨日けふ、つれなき嵐に白雪と、散りしく庭の花、見るにつけても、思ひいでられてかなしきは、此の春にこそ、咲匂ふ花がげに、共に手をたつさへてめでなんと、ちぎりし我が懐かしの友のいまさぬにぞある、あゝ思へは我が身は、いかにして、かくは、友にはさちなきぞ、先には花子の君に別れ、去年は又君に、あゝなつかしの友や、君が愛てにし我が庭の花は、ことしもかはらて咲きいでたるに、君が音づれ給はざるに、花も本意なく思ふらん、去年のやよひのまとひのなり、君がやさしのちかひの言の葉、我れは今なほ忘れぬものを、さても君には来給はざるか、あゝうらめしきは夜半の嵐なりやな、日頃すこやかなりし君のかくあらんとは、神ならぬ身の露しらざりき、若葉すゞしき五月のころより、ふと病の床につかせ給ひしいたはしさ、わらはのかなしさやる方なく、一日も早くおこたりて、君が美しき御姿、やさしき言の葉きかましものをと、神かけて祈りしわらはの心を、情けなや神もうけ給はで君はゆき給ひぬ。あゝ口惜しきかな、恨めしかな、殘させ給ふべき言の葉の數々もおはせしならんと思へは、いとゞかなしさのまされるものを、ないときけん、實に夜半の嵐に散る花は、またも咲きいでゝ、逢ふ事も有るべきや、あゝ賴みがたきは浮世のならひ、かなきは人の命なると思へは、いとゝ悲しさの忍ばれて、しばし涙にかきくるゝ折から、ふきすく夕風、軒端の花のまたもひら〳〵と散りくる哀れさ、—しほ涙のさしくまれてなん。

東京 後 藤 ち か 子

旭のかげのうらゝかに、風なきにちる、庭の櫻の花びらを、障子にうつすうるはしさ、思ひあまりて小窓おしひらき、外の面をながむれば、遠くかすめる野や、山や、鶏の聲はいはずもあれ、百鳥のいさましうさへづりあそぶ言はん方なし、窓に小枝ふるゝ花のおり〳〵ちりてみだるゝを見ては、そゞろかなしみのわきいでゝ、たへ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がたくてなん、あすか川、淵瀬常ならぬ、世にしあれど、神の我をなほみすて給はぬにや、我はこゝに學びの窓に友よせて、たのしくやすけく敷島の、文の林に、いそしめどかなしからずや去年の春、ちりゆく花ともろともに、黄泉路にまかりしはらからの、昔の奥津城うちけぶる、烟にそわぬあはれさよ、來ん春毎に花のちる、たびに、思ひみだれん幾千度、あらばぞともに、今日の日を、こゝにこの窓に、この花にかたりあかして、世のうき事を忘るすべもありなんを、雲をへだてゝ天つ國あふげば遠くいや遠し、いつしか嘗の根の長き春日も、今したそかれつ、花間をもれて南の峯のかなたに、星一つほのめきぬ。

東京　近藤はな子

花さそふ、峯の春風ふきそふる、片山里の櫻がり、そらにしられぬ白雲を、袖にはらひつわけ入れば、一重二重にかぐはしく、積る落花のさらくに、舞ひつ迷へば、あなをしや、梢にのこる花もまた、ひらりくとみだれつゝ、しづ心なくひるがへりて、時ならぬ修羅の巷ぞめざましき。それとも見えねど、花間より一つあらはれ、又一つ、雄蝶は、雌蝶に、おくれがちに、羽風床しくみだれちる花の帷をぬうてとぶ。此のうるはしきいさましき、ながめによひたるわが心も、いつしか蝶の羽ごろもに抱かれつ、ちる花のうへにのりうつりては、しかすがに、ひとひらく、地にふるごとに、あやしき思ひの胸にひゞきぬ。

花を黄金にたとふれば、蝴蝶を人にたぐへつべし。とぶとりも拂へば、おつる満盛の匂ふ朝日にかざしけん、花の扇も時のまに、とぢてあはれを傳ふれど、世にときめきし、道長の錦の衣てらしけん久方の望月かくる世のためしは多かめれど、今の世の人皆、黄金の光に、眼くらみ、榮華の花にあこがるゝは、うたて、蝶の運命なまれびてのかはれごとにや、夕べ々々に、梢をもるゝ星の花数まさりつゝ、やがてはさめん夢ともしらずやあるらん。花は一度ちりて、またこん春に、同じはえある色に、匂ひいでんも、風寒き秋の野末に、ほのしろき、蝶のむくろぞ、げにあはれなりける。折しもひゞく、遠寺の鐘の音は、花をちらして、只一つ、諸行無常をふくみたる、夜のみ神のたれませる、すゞしのとばり、おもむろに、花より花にうつりきて、蝴蝶は見えずなりにしを、花は絶間なくちるなり。

和泉　福原菫子

春雨の晴れたるあした、窓押し開らき眺むれば、雪か霞かと疑がふ許り今を盛りと咲きみだれたる櫻花も、稍々色褪せて、嵐のさそふ度に、はらくと地の上におつる樣、あはれにも亦なくいさぎよし嗚呼、世の人誰れか、大和心のなき人やある、日頃は優に美しく咲きつゞくとも、事しあらば、露櫻の花のごと命惜まず、勇ましう散り果つるこそ人たるの本意ぞかし。あはれ花よ恨む勿れ、散るとも、床し香は、四海に薫りつゝあれば、落花何ぞかなしむことかはと、ひとりごとでは花も心あるにや、一ひら二ひら、わが前に散り來ぬ。

但馬　田尻保代子

遠近の花のたより聞ゆれど、心地にわづらはしくたれこめてのみありしが、母君のしきりに進め給ふまゝ、長閑なる春風に誘はれて出立つ。家より程近き堤の櫻見んとてたどり行けば、植ゑ並べたる櫻のさきゝ殘らず、散りも始めず、今を盛りと咲き匂ひて、白雲棚引くかと思はれ、花の下影流るゝ水は、あはたつ雲かとうたがはるゝに百千鳥高くさへづりあひ、蝶は木影に戯れ、小草は青やかにもえ出たるなど、何れもえびとゝのひたる春の色いはむ方なくをかし。斯なくがむる折しも、さと吹きくる風にほづ枝の花さらく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と散りゆくこそ、いとあたらしけれ。さはれ櫻は昔より敷島大和心にもたぐへらるゝ、花にしあなれば、一盛ありて後は世の人にうき目見ねじとの心しらひより斯う早うものするにやと思へは、目出度も又ゆかしき心地せられてなむ。

あはれ年立ちしは、昨日の樣におぼゆるを、梅はとくすぎて跡をだにとゞめず、桃も終り、櫻もはや散りそめて、今年の春もまさに暮れなむとす。げに月日には關守なく流るゝ水の如しとかや、熟々わが來方を思へは、數多の年月を重ねて、齡のみはすぎぬれど、何一つ故づきし事もなく、今なほなす業のうひ／＼しきは、いと恥數限りなむ。

まことや、花は散れども又咲かむ春あり、人世の春は二度あるべくもあらずさるべきをいたづらに、花をあはれみ、鳥をめで、蝶に戯れつゝ、こゝろの年月をすぐしゝ事の我ながらおぞましく、花の思はん事も、いと口惜しうなむ。斯くてはやがて、身の秋に至たらん時、いかに悔ゆとも何の甲斐かあらむ。いで今よりはたゆたふ胸にむちうちて、志す道をひたぶるに、つとめはげみ、散り行く花をかゞみとしてむやと、思ふも花の賜物か、否そゝのかし給ひし母君の御惠ならむかし。

肥後　坂本竹子

久方の月日の過るは矢よりも早しと三冬つき春さりくれは、うらうらに山邊は花に打霞み、野べは柳の眉つくる、比ろにしなれば、皆人の心ものとけしけふはしも、思ふ友とを打つれて、官軍墓地の花見に誘はれ、我もとも／＼行きしかは、幸ひ天氣も晴れ、一點の曇もなく、旭日の光は、四方に輝き、春の景色もいと長閑けく、共に愉快をぞ盡しぬ、既に墓地の樣は、西南の役の軍人等の、戰死のみ靈を慰めんとて、あまたの花卉を植へ、今を盛りに、百花香を爭ひ、匂を吐き爛熳と笑ふが如く、招くが如く空に雲雀の鳴くあり、蝴蝶の舞ふて戯るゝあり、誠に耳目を嬉ばしめ、限りなく愉快を盡したりしが、やゝ有りて晴天忽ち打曇り、春風そゞろに吹き來りて木すゑをさそひ、今を盛りと咲きかざりし花もはかなく、吹き散らさるゝ頃、恰も雪の降れるが如く、一入面白かりしも、けふを限の花なりと思へば、いともをしくて、互に愛惜を盡し、歎息の念を起し、實に人生も如斯ならんと、今日までは、花に緣ありしも、明日の日は如何なる、風に誘れんやと、一層惜く限りなく、皆／＼、悲嘆の涙に、むせびおりしが、あへなく心取り直し、一首の歌を詠し「あす見んと思ふまもなく吹く風にさそはれてちる花の哀さ」此の意を思へば、益々感に堪へ兼れ、嗚呼人世の生涯も斯くならん、男女の別ちなく、幼より勉强して、志を立て、目的を逹しなは、名譽は花におとらず、うつくしく、竹帛に、垂るゝのみならず、父母の名をもあらはし、國恩を報る事など、互に語り、互にいさめ、種々の談話に、時の經るもしらず　、早や日も西に傾きて、夕暮になりぬれば、花に別を告げ、世に有らば、再びあひ見ん事もあらんと、花に置きそふ露の身も消へなんばかりの春の日の、光長閑に照り渡り、いさめ顏なる若草も、青々として、綠の色に氣を移し、心すかしくなりにける、かゝる目出度き花乍ら、はかなき物は、世の習ひ、人の身も斯くならんと、落花の情限りなく、書き盡さんと思へど、みゝずがきの筆にて、盡すあたはされども、おのが思ひのまゝをあら／＼。

肥後　佐々有鄰子

世のなかは、かくもはかなきものかな。明日はつれなき風にさそはれなん。昨日まで爛熳たる花も。今朝の嵐のために、みな散り亡せて蘂のみぞなきしきる。朝ぼらけより眞袖つらねて、かしこの木かげ、こゝの山べにうかれあそびし妙齡の手弱女も。一朝の露と消うせし事はつれにあることゝなるを無。常を觀じては大和魂もくだけはてぬ。あはれかなしきものから落花の感を記すになん。

歌の庭

秋田　古瀬りく子

小蝶まひ、鶯もきてさへづる頃は、青柳のいと〳〵面白き、心地はすれどなか〳〵、にうつろひ易きよの中と、花はいはでも、知らせてん、物思ふ昔のはなしげみ、散るらん、花の香をとめて、朝には露にぞ、袖をぬらす、夕は、嵐のさそひ來て、ねぐらとたのむもゝ鳥も、ぬるひまさへやなかるらん、よにも靜けきひさかたの、雲井の庭にときはふる、松の木の間に咲く花も、世のことわりもしり顔に、おくれさきたつ散る事は、逃れしものと聞ゆれば、とてもかくても、たらちねの、上のみいとゞ、きづかひて、老そのもりに身をかこつ、盛り過ぎたる、姿をも、なさけありけんさゝがにの、糸一筋に、花びらを、つなぎとむるを、見るすらも、殊更あはれや、もよふして、惜めばとまる、そでの上、又もわびしき心地する、あはれと思ふ、ひとあらば、尋ねきてみよ　山櫻花ちる頃は、みよしのゝ吉野も、心つらき處なるかな、

安藝　和住千鶴子

春ふかみ、花さそふ風ゆるう吹く夕まぐれ、暁が軒端を立ち出て、いづくともなく、さまよひぬ。見渡せば遠の山々霞も深く立ち込て、雲井につゞく海原の波もいと靜なり。うべなるかな、家庭和樂のさまに例へつるも。さることなりとおもひつゞくるひまにみそらに知られぬ雪と花の下陰に至りぬ。あゝさしもあでやかなりし花の盛も流れゆく水に、さそはれて、とまらぬ春を惜みつゝなほ去りがてに、たゝずみても思ふ。野べにみやまに佐保姫の心づくしも夢のごと過さゆき、やがて池の蓮夏ひらけ、庭の木の葉に、秋たちて、ひもかゞみ結べる冬となり、又立ちかへる春の曙、世のさま、はた、人の身の、うつりかはりも、これにおなじ。西施小町もはづるてふ、たをやめも、やがては、杖を力に老の身となりなん。されば、われらも、うら若き頃よりおのが家のなりはひのほと〳〵に、習ひねんことは一すじの、まごゝろのだにあらば、ならび得べし。いざこれよりは朝に夕に、勉めはげみて、こん年の春さく花とかたみに其香を競はまし。かくせば老ひての、後に、昔はましかばの怨みはあらじかしなど、獨ごちしひまに、夕暮の空いと深く霞みわたりて内も外も、人の音もせず、幽かにいみじきに入相の鐘の音に、またもや落つるさくら花、あはれを添ふる朧月の、さしくるに、家路たどりつ、花にうつろ月影の、これぞことしの春の名ごりと思はれければ、その夜ほそき燈のもとに感じけることゞもなかくはかいつけぬ。

雲州　岩倉より子

今日は乳母と二人にて、朝の散歩に出かけぬ、いつも行く姫島、島とは云へど苔むしゝ、岩より岩へと、橋の如き天然の石ありて、傳ひ行けば、其の姫島にと着くなり、昔し尼子氏の月山城を落ちて時うら若き姫一人の翁と暫く住みし處とか、村人の口に傳はれり、今は一つの祠ありて、庭には彼方此方に面白く櫻の植はりて、島の周圍には松の繁れるに、朝日の涙をはなて、今や散る花にうら〳〵と、うすく霞みこめたるが、さながら、天つ乙女の羽衣の袖ふりはへて、舞ふ如く岸打つ波は鼓の音と聞こゆ、松の嵐は琴の音に通ふ如く、其の昔し住みにし姫の今も來て、彈づるかと思はれいかに美しかりし姫なりしなぞなど、おもひにふけりぬる耳に、幽に聞こゆ唱歌の聲、

敷島の大和心を人とはゞ
　朝日ににほふ山櫻花

げに尼子經久こそ朝日ににほふ山櫻の如く、ありしかど一門の末ぞあはれなる散る花を元枝に返さん由もなき、　主家を又來て春にあはせまつらんと、心をくだく山中鹿之助、隣國の毛利氏も爲めに膽を寒からしめしとか、戰敗れ、虜となりても猶屈せず、難を經る

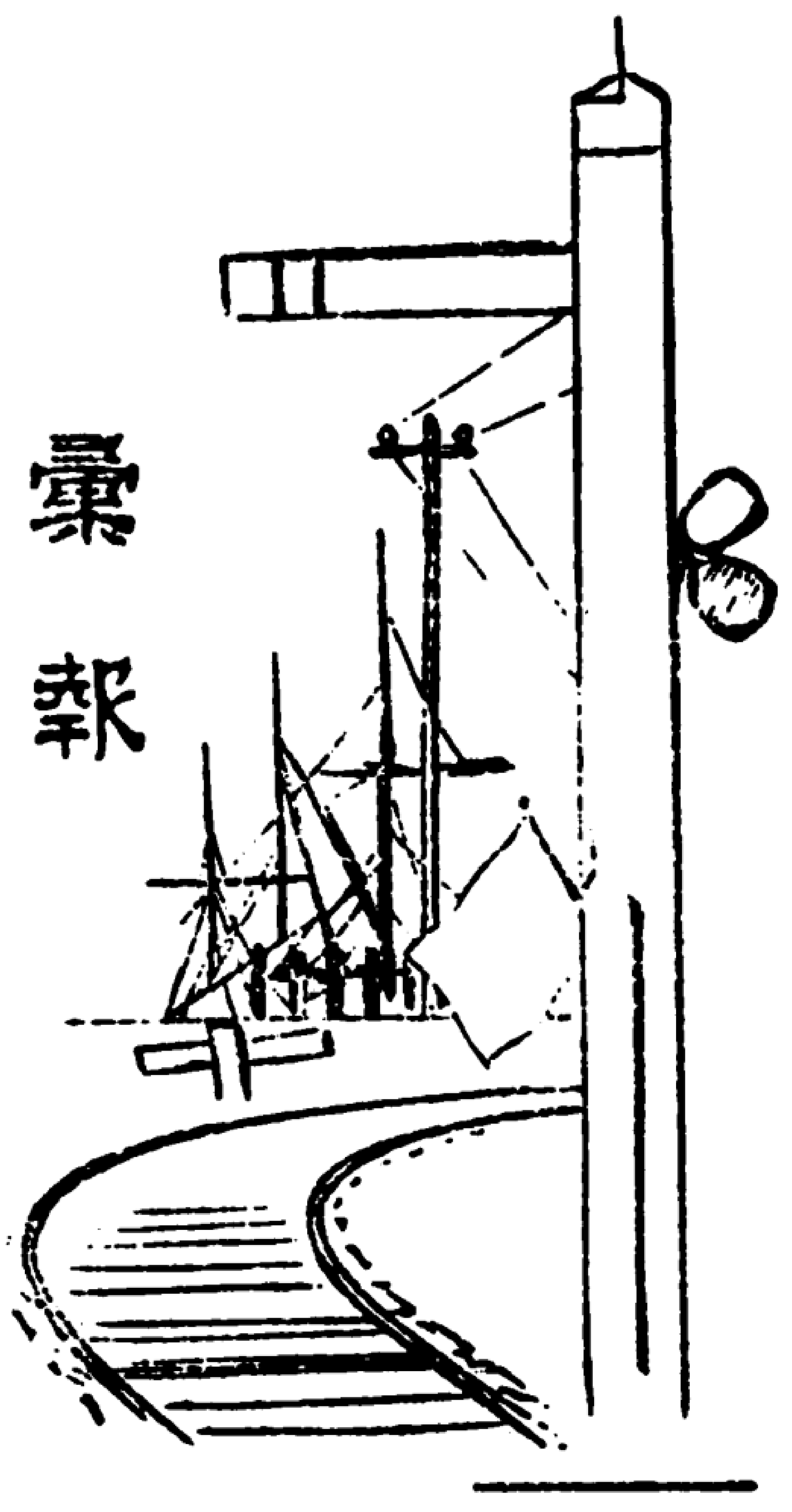
每に、勇氣一倍し、倒れて後止みし其忠、今の世の人に、山陰の麒麟と云はるゝぞうべなる、此の島に住みし。姬もしや幸盛の遺族のそれにてはあらざりしか、など深き〳〵思にふける內に、時うつりぬ、はや歸り給はずやと、進められやう〳〵我家に歸りぬわすれざるは此の島、此の花にこそ。

岸のひめ松よはくとも
　かはらぬいろは千代にみん

嵐はげしく吹かばふけ
　あたなるはなにならはむや

峯の若まつひくゝとも
　しらへはたかしちりのよそ

み雪烈しく降らはふれ
　ちるもみぢばにならはんや



○本年の赤十字社總會　日本赤十字社にては本年の第五回博覽會を好機として第七回總會を大阪に開會せらるべきやの說ありしが何分昨年の二十五年祝典及び第六回總會に於て空前の盛典として莫大の經費を要せしため本年は可及的質素を旨とし來る六月中旬上野公園內に於て第七回總會を開會することに決定したる由にて追て當日は　皇后陛下の行啓をも奏請する趣なれば宮中の御都合を伺ひたる上開會期日を確定する筈なりと云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○愛國婦人會大會　同會第二回大會は去月二十二日午後二時より九段阪上偕行社中庭に於て擧行したり、來會者は來賓貴婦人會員等無慮三百名にして、一同式場に集合するや、佐藤少將の紹介にて、君が代吹奏裡に閑院宮妃殿下御臨場あらせられ、左の御諭旨を賜はり、近衞公爵夫人會長に代りて答辭を奉呈し、次に主事會務の報告を爲し、次に奥村五百子氏は、本會の主趣を擴張するため、各區に演說會を催す必要ある旨を述べ、次に清浦法相本會の主旨を贊し、併て希望を述べ、次に澁澤男爵は本會の精神並に目的等に付き、一場の演說を爲し、是れにて式を了へ餘興並に立食の饗應等ありて、四時半頃退散したり

御諭旨

我が愛國婦人會は諸氏が赤誠を集めて能く慈惠の美果を着くる事を得んとす今よります〱斯會の培養に怠らずば遂には君國のために身を致したる幾多軍人の忠魂を慰め遺族の窮困をも救ふ事を得べし我れ今日諸氏の望みに從てこゝに總裁たる事を諾し以て斯會前途の發達を希ふ

○四谷女子技藝學校　寺田勇吉氏監督の下に今回荒木町二十七番地に新設せし同校は裁縫編物刺繍活花點茶割烹造花等の諸科を生徒の望に從つて教授する由なるが修業年限は一ヶ年乃至二ヶ年にして目下生徒の募集中なり

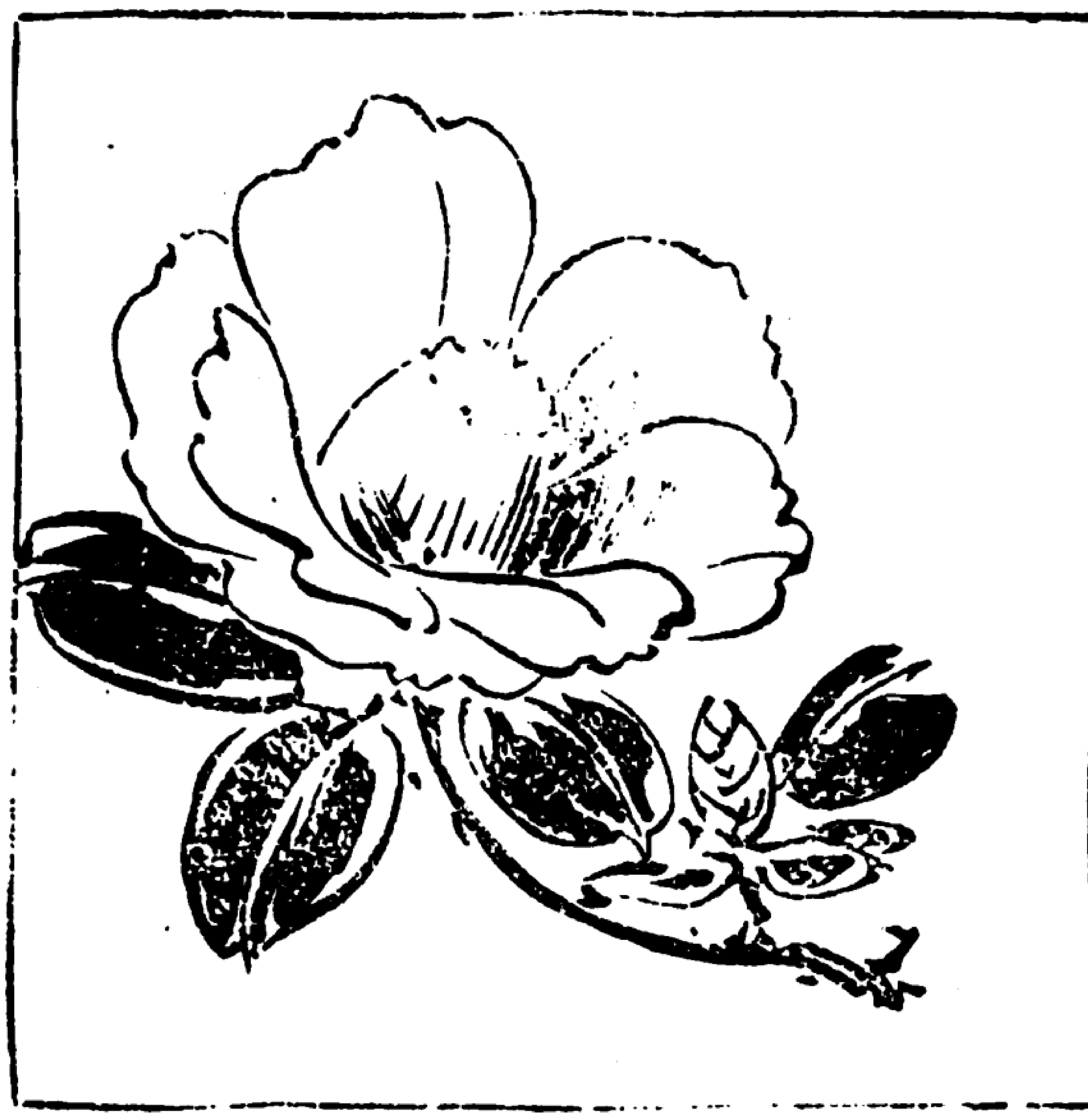
○日本女學校　本鄕區龍岡町三十六番地に私立せる同校は過る三十三年六月の設立に係り女子大學設立の趣意に基き準備として專攻科の設けあり教諭其人を得校中の整理着々其當を得たれば世間の信用も殊に善く目下生徒募集中なるが續々入校の申込ある由

○神奈川幼稚園の新築落成式　橫濱同伸會社の

本多平三氏等が去る明治廿九年中神奈川權現山に創立したる神奈川幼稚園は生徒の數を次第に增加し狹隘を感ずるに至りたるより今回同町本覺寺裏に新築し客月廿五日落成式を行ひたり

○女子東京美術學校の刷新　頗る批難の多かりし同校は今回校長始め事務員に大更迭を行ひ校長には子爵永井直哉氏事務員には同校出身の優等生女子二名を以て之に充て顧問輔佐等皆夫々著名なる教育家に依頼し　愈四月一日より新學期の授業を開始すると云ふ

○立教女學校の擴張　京橋區明石町の同校は從來四ヶ年なりし本科を五ヶ年とし本科卒業程度の者の入學し得べき二ヶ年の高等科は英語國語を中心としたる文學部とし又家政裁縫科を新設して四月十三日新學年の授業を開始すると共に各級補缺入學及び入塾を許可する由



○日本正則女學校　近時往々女子の奢侈に流れ輕佻に失する弊あれば之を救わんが爲め東京神田區小川町一番地に開設せし同校は井上、小杉、木村三博士の賛助に係り質實以て生徒を督し溫良以て其德を養ひ他日一家の主婦となるに當り毫も遺憾なからしめんことを期すといふ、されば質朴なる地方子女の來學には尤も適切なるべしといふ

○福岡縣私立技藝實習女學館　同館は昨年來小野米子館主となり福岡市濱ノ町三十三番地に設置

したるものにて教科を本科及び裁縫教員養成科の二種に分ち本科は二ヶ年裁縫科は六ヶ月を以て卒業期と定め且つ修身、禮法、遊戲の三科を必修科とし家事、算術、習字の三科を隨意科となし主として裁縫及び裁縫に關する理論を教授すといふかかる實地に必要ある學校の各地方に起れるは寔に女子の爲に悦ふべきことなり

○婦人會　愛媛縣北宇和郡宮内村にては、一昨年より品性を陶冶し智識を交換せんとの目的を以て、婦人會なるものを設立し、毎月第二日曜日に集會し、各自の意見を述べ有益なる談話を聽きて修身處世の道を明にし一鄉の親睦を計らんとの趣意にて、會費月額金五錢を納めし會員四十余名なりといふ感ずべきことなり

○康同璧女史の演説　康有爲の二女康同璧女史は政治學研究の爲め英國留學の途次我國に立寄りしが去る十四日明治女學校明治講話會の聘に應じ神田基督教青年會館にて英語演説を爲したる由尙ほ同女史は左の近什ありと

寄懷

鴻毛自視一身輕。百物千吾奈有情。漠々浮生原是夢。茫々世界果何營。讀書休泥前人論。立志須綴大衆生。公理家傳當大發。千秋熱血始能平。

○臺北の婦人慈善市　去月八日臺北淡水館に於て開かれし特志看護婦人會慈善市は其賣店を呉服類香港雜貨、書畫類、岐阜提燈團扇類、手藝製作品、珈琲店、飲食店の七部に分ち夫人令孃自ら賣子に扮して來客に接し又廣堂内に於ては慈善音樂の催あり午前九時に始まり午後四時頃に終りしが當日の入場者は内地人、本島人外國人を合せて千五百五人にて兒玉總督、後藤長官も臨場し各相當の買物を爲し當時出府中の島内各地方廳長よりは同會に向て寄附金を爲せる等にて其收入總計二千

八百七十五圓餘を得諸雜費を引去り純益千三百餘圓となれり狭き臺北人士の間に於て斯る結果を得たるは頗る上出來と謂ふべし

○外國人婚禮を所望す　獨逸人スミート氏夫婦は新婚旅行のため親族ラレメ、アムト、フイルエームの三氏と共に大阪市に來り眞ぞ嬉しい中之島なる大阪ホテルに滯在中スミート氏いふやう我等神の恵によりて蜂蜜よりも甘き月を迎へ薔薇の花愛らしき春に逢ひ而も世界の樂園と稱へらるゝ日本に遊ぶことを得たる幸福は何に譬へん此幸福を永く紀念に殘すため我等日本の舊き婚禮の式にて夫婦の盃を仕度しと望みけり同氏は彼國の藍商なればそれに縁故ある同市の繪具商等之を聞きヤツ一段と面白き趣向太郎冠者承知致いてござると四方八方周旋し先頃東區平野町堺卯樓を其場所と定めスミート夫婦を始め親族一同座につき先づ先づ芽出度い珍らしい例を三ツ盃、平生ならばズボンの島臺も今日は祝ひの黒の禮服禮儀正しく雄蝶雌蝶の銚子土器とりどりなれや媒介者の取廻し一座は繪具商の事とて床の懸幅屛風襖は申すに及ばず天井や壁まで極彩色のやうに一倍奇麗に立派に見ゆこのうち大西亮太郎氏は麻上下にて四海波を謠ひ芽出度く濟みたる時大西氏は更に立つて石橋を舞ひ鼓の音笛の調面白く文珠の淨土笙歌の花降る景色眼前に浮び獅子どらでんの舞樂千秋萬歳と舞ひ納めて座に直りけるは異國にも未だなき例とてスミート夫婦の喜び盡きせじなく

○怪力の少女　米國紐育州ポート、ゼルビスといふ所に住んで居るステラ、タンデリアスといふ當年十二歳の少女は、體量僅かに七貫八百匁の小娘であるけれども、非常に珍しき力を備へて居つて、如何なる大力の男でも、若し此娘が指を其男

の肩あり額なりへ觸れる時は、決して床から抱き上げる事が出來ぬさうで、現に此程も大力の男が二人掛りで抱きあげたれども、少も此小娘を動かす事が出來なかつたといふ。

○久間女學校　牛込區北山伏町なる同校は明治二十三年現校長久間孝刀自の設立に係り女子に實地的の學術を授くると共に最も力を婦德の涵養に効し專ら良妻賢母を出すを以て目的とし且つ寄宿舍は家族制度に依り校長職員自ら父母に代つて懇切に保護監督の勞を執る由因に刀自の先考梅翁は維新以前より大橋流の手習師匠として知られ刀自も明治初年に小學校を起し今尙は女學校と併せて之を監督し一門擧つて敎育事業に盡瘁しつゝありと云ふ



○五十年前の死骸　死したる人の墓を發きて、其遺骸を野外に曝すとは、野蠻未開の國にても、餘り多く聞かざる事なるが、文明を以て稱へらるゝ米國に、斯る惡漢こそ現はれたれ。されば文明の程度は、其國民に於ける道德の標準とはならざるか、是れ一個の疑問と云ふべしなど、鹿爪らしき冒頭を置くにも及ばざるが、茲に北米南加州ロウサンヂエルス河の傍に、キャンボ、サントウと云へる土地あり。老杉古檜天に參して、翠色滴らんばかり、四邊の景色宛然畵の如く、數多の古碑

處々に點綴して、青苔の下に眠れる人々の夢も、如何に安らけく靜かなるよと思はるゝ所なるが、中にも目立ちて莊嚴なるは、五十餘年前富豪を以て此國に聞えし墨西科の知事ピオ、ピコ氏一族の墓にて、大理石の墓表に刻まれし文字は歷々と『茲に知事ピオ、ピコ氏の妻マリヤ、イグナシオ、アルバラドの遺骸横はれり、千八百八年十二月十五日生れにて、千八百五十四年二月二日歿す』と西班牙語にて記されたり、此夫人は艶麗世に類ひなく、知事との伉儷琴瑟相諧ひ、身歿りし頃は五十近けれど、知事の哀惜譬ふるに物なかりしが、限り無き富を有する事なれば、金銀珠玉七寶纓絡等あらゆる寶を柩に藏めて、野邊の送りを爲し、切てもの心遣りとなしたりとて、古老の口碑にも殘り居るより、此頃非道の惡漢現はれ出で、何時の間にやら、右の墓を堀り毀ち、柩の中なる財寶を掠め去りたり、憎みても何餘りある烏滸の所業とこそ云ふべけれ。それは偖置き夫人の死骸を引出したるまゝ、荊棘の中へ打棄てありしを見るに、こは不思議！五十年前に死したるものなれば、肉は爛れ土と化し唯白骨のみなるべきに、四肢五體生けるが如く、たゞ鼻の頭と唇少しく缺けて、耳朶の歪み、皮膚の脂氣失せて乾燥せるのみ他部は蚤の喰ひし程も腐りし痕迹見えず。茸茸なる黄金色の髮は前額より左右に梳き分けられ、昨日今日櫛の齒を入れたらん如く、衣服も舊形のまゝにて、天鵞絨の袴、絹の靴下など稍色の古びたるのみ、棺の製造法は、純金の蝶番にて堅く蓋を鎖し、内部は亞鉛にて貼り詰めたり。却說此事の四方に傳へらるゝや、ピオ、ピコ知事の曾孫にて、其近傍に住めるもの馳せ來り、昔聖徒キヤンチダは、羅馬に於て神の道を護らんが爲め、勇ましき最後を

遂げたるが、其屍は神の惜ませ給ひけん、年月を經ても生けるが如く、更に朽ち爛れざりしと、されば我高祖母も、尋常人にては在まさず、神の御心にかなひたる天使の此世に下降せしならん、此遺骸が土中にありて幾多の星霜を經ながら、少しも糜爛せざるこそ確の證據なれと、鼻動かして誇り居るとか、宗敎上の迷信と、家の自慢とを一ツにして、左る正なき事を誇るも、文明國の民と思はれねど、人情の上より云へば、非難すべき程にもあらず、併し近頃珍らしき事にて、彼國にては專らの取り沙汰なる由

新刊書目

國家醫學會雜誌	第一九一號	國家醫學會
少女界	第三號	金港堂
うらにしき	第一二五號	尚絅社
女子の友	第一三五號	東洋社
六合雜誌	第二六六號	ゆにてりあん弘道會
日本婦人	第四〇號	帝國婦人協會
音樂の友	第五號	樂友社
婦人と子供	第三號	フレーベル會
偕行社記事	第三一〇號	偕行社
をんな	第三號	大日本女學會
愛國	第八八號	愛國社
日本青年	第一五號	日本青年會
商家の友	第一二號	時事新報社
法の母	第一一六號	夫人正法會
大日本婦人教育會雜誌	第一五二號	同教育會
法令審議錄	第四號	法令審議會
女子新聞	第廿一號	女子新聞社
軍人遺族新報	第一號	軍人遺族救護義會
文庫	第五號	內外出版協會
新聲	第三號	新聲社
成功	第六號	成功雜誌社
東京感化院月報	第一八、九號	感化院
愛國婦人	第二五號	愛國婦人會
婦女新聞	第一五〇號	婦女新聞社
敬愛叢報	第三號	敬愛女學校
濟民新報	第九〇號	濟民新報社
經濟新報	第二〇號	經濟新報社
太陽新聞	第一二號	太陽新聞社
土佐公論	第一三十號	土佐公論社
敎育公報	第二六八號	帝國敎育會
体育	第一一號	日本体育會
東京經濟雜誌	第一一七二號	經濟雜誌社
東京敎育雜誌	第一五九號	東京府敎育會
圖書月報	第七號	書籍商組合事務所
中央公論	第三號	反省社
慶應義塾學報	第六二號	慶應義塾
國學院雜誌	第三一號	國學院
大八洲雜誌	第二〇〇一號	大八洲館
作文敎範	卷一、二	光融館
湘烟日記		育成會
近識評論	第五一號	近識評論社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

文學士 吉丸一昌編纂

再刊

名家修養談叢 全

全壹冊
菊判洋装美本
紙数二百八十頁
定價金参拾六錢
郵税八錢

目次

○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士 井上哲次郎
○數學的智識の必要…… 島田三郎
○常道論……文學博士 元良勇次郎
○日本の人種及言語……法學博士 田口卯吉
○快樂……文學博士 加藤弘之
○學問、出身、目的、手段…… 島田三郎
○兩極主義……文學士 藤井健次郎
○苦學……文學博士 根本通明
○質學…… 島田三郎
○無窮的進歩…… 海老名彈正
○讀書と修養…… 松村介石
○進化論と現今の日本……文學博士 元良勇次郎
○善良なる市民…… 安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士 志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士 村上專精
○言論文章に就て…… 島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士 山田一郎
○青年を誡む……文學博士 加藤弘之
○ベーコン、ルツソー、及びバーゼドーの教育思想……ドクトル 尺秀三郎
○歴史的國民と非歴史的國民……獨逸文學博士 長瀬鳳輔
○慾望……文學博士 元良勇次郎
○苦學生に望む…… 片山潜
○福澤諭吉翁…… 島田三郎

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　飯沼珠城畫

山崎合戰

菊版　洋裝美本
定價金參拾九錢
郵稅金六錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰、是れ我神州空前絶後の英雄豊臣秀吉があらん限りの智惠と力とを振ひし花も實もある大戰爭なり。之を例の戰鬪小說に獨特の妙ある塚原澁柿先生が江戸紫の粹且つ高尙にして押出よく、色も艶も古今獨歩の彩筆を執て叙述されたるものなれば、猿面重瞳の羽柴筑前、虎頷狼顧の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演ずるが如く、雲漠々、雷殷々、砲火閃き、劍光迸る。舞臺一轉すれば衣冠束帶の豊臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大德寺燒香場の活動寫眞。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話新橋特八八八番）
（電話新橋二六九三番）

發兌元　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　小堀鞆音鏑木清方畫

小牧合戰

新刊

菊版洋裝
口繪入美本
定價金五十五錢
郵稅十錢

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山の大合戰は此の蟠龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず。塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽微顯の功一にして足らず、此書の如き前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き實に奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史畫界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏揷畫は鏑木清方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

發兌元　東京築地二丁目　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堀内新泉著

少女讀本

月雪花全部完成

各定價金拾八錢
郵税金各四錢

嬢さん方お待ち兼の少女讀本全部完成いたしました、奇麗な本に出來ましたサァ皆さん雲雀高く霞に陰れて鳴く野邊や花かつ散る櫻の木陰、或は緑の柳髮くしけづる窓の下此こを繙きましたならどんなに面白くどんなに可愛らしいかとても御話にはなりません・マア一寸讀で御覧なさい

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十四版製本中

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八●●二六九三番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

四六判紙數三百頁
定價三十五錢
郵稅六錢

○○○○二六新聞　清少納言の人となりは或る點まで明快に詳傳されたれど紫式部は尙ほ霞を隔つるが如し好で古人を研究し最も熱心に古閨秀を研究する著者に於ても感情を暴露せざる紫式部を明快に詳傳し得ざるは是非なき次第なり

○○○○國民新聞　曰く枕草子、枕草子の文章、清少納言の和歌、紫式部の理想を論ず、小說としての源氏物語、諸家の源語論を評す、以つて本書の性質を略ぼ察するを得べし。　文辭の雄ならんと欲して、　時に枝葉に走るなきにあらざれども、又た其所論に首肯し難き節なきにあらざれども著者が清紫二姬を研究したるの深かりしは多とすべし。

○○○○日出新聞　是れ梅澤和軒氏が貞淑謙讓溫乎玉の如き紫式部と才氣煥發英烈の如き清少納言とを對照批判し延いて王朝時代の國文に及ばん　として枕草紙と源語を反評論したるものなり　引證該博筆鋒犀利加ふるに著者が這種のことに專念研鑽せし餘に出でたるものなれば今の所謂片々たる著述ものとは大に其趣を異にするものあり

○○○○成功雜誌　二女流の詩を捕へ來つて其人物と作物を縱橫に批判したる所の議論最も妥當にして眞摯著者の苦心充分に現はれたり

發兌元　東京市築地二丁目　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂

再版

新編ひめかゞみ

菊版洋裝美本
壹部金貳拾五錢
郵稅四錢

近世女子教育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも許すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を宗として重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社玆に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全なれらざるべからず、學藝は花にして操行は實なり、花あり實ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る

東京市京橋區築地二丁目
發行所　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

本派本願寺前大法主

明如上人遺芳錄

全壹冊菊版最美本、上人最近眞蹟、名號、偈詰、和歌等數葉插入、
別にアートタイプ尊影（中平商店發行）を添ふ

●壹册定價金貳拾錢郵稅金四錢

本書は今回遷化せられたる本派本願寺第二十一世明如上人大谷光尊法主一生の御傳記にして本山の記錄に基き眞宗文壇健筆家編纂の任に當り顧問諸氏の校閲を受けたるもの也加ふるに中平商店發行の上人御尊影は最近の撮影に係り一見眞に逼るを以て契約の上本書と共に發賣することゝしたれば長く上人の高徳を欽仰感戴せられむことを切望して已まざるなり

發行所　京都市松原通大宮西へ入法宣寺　國光社員出張所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地　電話特新橋八八　電話新橋二六九三　株式會社國光社
大阪市心齋橋北詰東入　國光社員出張所

●本書は全國到る處の書店に販賣せり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

定價
一枚二錢
一ヶ月三十五錢
三ヶ月前金壹圓
六ヶ月前金壹圓九十五錢
一ヶ年前金三圓八十五錢

廣告
標準五號活字二十二字詰
一行一回三十五錢
同 三回以上三十二錢
特別第一面四十五錢

郵税
一枚五厘日本朝鮮及本邦郵便局所在地一ヶ月十三錢其他外國五十錢

發行所
東京京橋區日吉町四番地
國民新聞社

明治三十六年四月一日發行
每月二回一日十五日發行　第拾參年第七號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

婦人藥王

婦人最良藥！中將湯

子宮病血の道にて悩み種々の藥を用ひて其効なく年久く御困りの人は中將湯を試し見よ





婦人科專門醫學博士
諸大家實驗證明



効能

子宮病
血の道
逆上頭痛
月經不順
産前産後」

諸症に奇効わり

定價		郵送料
五週間分	貳圓	拾六錢
三週	壹圓廿五錢	拾錢
二週分	八拾五錢	六錢
一週分	四拾五錢	四錢
三日分	貳拾錢	貳錢
一日分	七錢五厘	貳錢

本舖　東京市日本橋區通四丁目七番地
（特電話本局千〇九十七番）
津村順天堂本店

支舖　大阪市南區堺筋塩町北へ入ル
（特電話東二百七十八番）
津村順天堂支店

（東京築地株式會社國光社印刷所印刷）

Digitized by Google